



目次

ミヒャエル・コールハース クライスト	1
--------------------------	---

ミヒヤエル・コールハース クライスト

十六世紀の中葉、ハーフェル川の河畔に、学校教師の息子で、馬鹿がつくほどの正直者で、同時に、この時代からすれば全くもって仰天すべき男でもあった、名をミヒヤエル・コールハースという馬喰が住んでいた。――常軌を逸したこの男も、三十になるまでなら、善良な市民の見本であると思なすことができた。男は、今でもその名前を冠しているある村に屋敷を保有し、そこで生業を営みながら、おだやかに日常を送っていた。神を畏れながら、妻からの贈り物である子どもたちを教導し、勤勉で、実直な人間に養育しようとしていた。隣人たちの中で、男からの慈悲深さや公正さを享受していない者はひとりもなかった。つまり、人倫を外れることさえなければ、世間は、男との思い出を祝福するはずだったのである。しかし、あの権利意識が、男を略奪や殺戮へと導いたのであった。

綱でひと繋ぎにした、どれもよく肥え太り、光り輝いた若い馬たちを引き連れ、他の領邦に踏み込んだ時のことであった。幾つかの市場で、馬を売ることによって手に入る儲けをどう支払いに充てるべきか、ちょうど皮算用していた時であった。「善良な家長の身の振り方としては、一部は新たな儲けのために使わなければ。とはいえ、一部はやはり現世の愉しみのために取って置かなければ。」エルベ川まで出た時のことであった。ザクセン地方に立っていたある騎士の居城の脇のところで、この道ではかつて一度もお目にかかったことがない街道の遮断に、彼は出食わした。たまさかちょうど強い雨も降ってきたので、馬たちの歩みを止めると、封鎖所の監視人に向けて、大声で彼は言った（その後すぐ、この監視人の方も、不機嫌そうな顔で窓からこっちを睨み返してきた）。「開けてもらえませんか。」と、馬喰は言った。「こっちで何があったんです？」そう聞くと、かなり長い時間を空け、ひとりの収税吏が、その建物から近づいてきた。「領邦君主の特権なのだが、」と、次のような打ち明け話をしながら、男が言った。「地主貴族であるヴェンツェル・フォン・トロンカに、それが下賜されたのだ。」――「そうですか。」と、コールハースは言った。「で、そのヴェンツェルとやらは、地主貴族だと仰いましたっけ？」そして、城の方にジッと目をやったが、その城は沢山の尖塔を煌めかせながら、下にある農地の全体を俾倪していた。「あの老領主が亡くなられたんですか？」――「脳卒中で亡くなられたのだ。」と、遮断用の棒をもち上げながら、収税吏が答えた。――「ふむ、おかわいそうに！」と、コールハースが答えた。「あの方は、威厳のある老領主でした。人の往還を何よりの喜びとして、やれる限り、物の商いを盛んにしようとして、いつぞやは石畳の道路を建設するようにお命じになりました（なぜなら、村に道が入る外のところで、わたしの雌馬が足をくじいてしまいますから）。で！ わたしの何がいけない

のです？」——と、彼は聞いた。それから、税関の衛兵から乞われた数グロッシェンを、風に翻えるマントの下でゴソゴソしながら取り出すと、一方で男の方は、「早く！　早く！」と、呟きながら、この悪天候を呪っていたが、「さあ、ご老体、この棒が森に生えたままなら、もっとよかったんでしょうが。わたしにとっても、あなたにとっても。」と、言い足した。そうして、男に金を渡し、馬に飛び乗ろうとした。ところが、まだ遮断棒の下を潜り抜ける前のこと、「そこで待っている、馬商人！」という新たな声が背後の塔から響いて、その窓がバタンと閉まり、城守が駆け下りてきた。「さて、何が始まるのか？」と、自問しながら、コールハースは馬の歩みを止めた。まだ太った身体の上でベストのボタンを留めようとしていた城守が近寄ると、悪天候のために身体を斜めに振りながら、「通行許可証を見せろ。」と、言った。——「通行許可証ですって？」と、少しうろたえながら、コールハースが聞いた。「わたしが知る限り、そんなものはありません。それが領主からのどんな種類のしろものなのか、ちょっと教えてもらえませんか。そうすれば、もしかして、偶然、用意できるのかもしれませんが。」と、彼が言った。城守は、彼の顔を横からジッと眺めながら、「選帝侯の許可証がなければ、馬商人は、馬たちを連れて他の領邦には踏み込めないのだ。」と、答えた。馬商人が言い返した。「自分は、今までにもう十七回も、そんな証明書なしで国境を往復しています。自分の生業に関する選帝侯の全ての命令についても、知悉しています。今回のことは、そもそも間違いなんじゃないですか（この件については、しっかり考えてもらうようお願いします）。わたしの一日の旅程は長いので、ここでの無駄な逗留は許されていません。」ところが、城守からの答えは、こうであった。「十八回目もすり抜けられるとは思うな。だから、改めてようやく通達が出たのだ。ここで通行許可証をまた買うか、やってきた道を引き返すか、二つのうちのどちらかだ。」この驚くべき強請行為に怒りを感じ始めた馬商人は、少し考えた後、サッと馬から降りると、手綱を下僕に預けながら、「その地主貴族のフォン・トロンカとやりにじかに会い、話をしてみるか。」と、言った。その居城に向かうことすら、彼は厭わなかった。「しみつたれの守銭奴には、瀉血をするくらいがちょうどよいのだが。」と、ブツブツ文句を言いながら、城守が後ろからついてきた。二人は、互いにジロジロ品定めをしながら、広間の中に入ってきた。地主貴族は、たまたま数人の陽気な友人たちと酒食の席にいたが、何かの冗談で果てしない爆笑が轟く中、苦情を言うため、つかつかとコールハースが近づいてきた。「どうした、何があったか？」と、地主貴族が聞いた。その見慣れない顔をチラッと見るなり、騎士たちは口を噤んだ。しかし、馬の申し立てをコールハースが始めるや、すぐに取り巻きたちは、「馬ッ？　それはどこだ？」と、大声を出しながら、その馬たちを見るため、ドツと窓辺に駆け寄った。ひと繋ぎになった、輝くような馬たちを一目見るや、地主貴族の提案もあり、彼らは下の中庭に降りることにした。雨はすっかり止んでいた。馬たちの周りには、城守、執事、下僕たちが集まり、その上に舐めるような視線を走らせていた。彼らは、鼻白の紅栗毛を誉めたり、栗毛が気に入ったと言ったり、黒鹿毛のブチの雌の毛を撫でたりした。「ここの馬たちは鹿のようだ、この領邦では、これ以上の馬たちにお目にかかることはあるまい。」と、誰もが心の中で思っていた。「良馬といっても、この馬に跨がる騎士のお歴々ほどではありませんが。」と、勢いよく、コールハースが言った。「一頭いかがですか。」と、彼は勧めてみた。堂々とした紅栗毛の雄に心を揺すぶられた地主貴族は、「これは幾らするのか？」

と、聞いた。一方の執事は、「つがいの青毛たちはいかがですか？」と、促すことで、彼をうるさがらせた（馬疋が足りないので、農場で使ってみてはという考えであった）。しかし、コールハースが値段を言うと、幾ら何でもそれは高過ぎると、騎士たちは思ったし、「そんな値段で手を打ったら、円卓に乗りつけ、アーサー王に拜謁しなければならない。」と、地主貴族も言った。物言いたげな視線を青毛たちに向けて投げながら、城守と執事が囁くのが目に入り、不吉な予感に襲われたコールハースは、この青毛たちを手放すためなら、やれることは何でもやろうと考えた。彼は、地主貴族に言った。「閣下、この青毛たちは、六ヶ月前に二十五グルデンで買いました。三十グルデンだけもらえませんか。それなら、お譲りします。」地主貴族の側に控えた二人の騎士たちは、「この馬たちはおそらくそれだけの価値があります。」と、断言した。ところが、地主貴族は、「青毛たちよりも紅栗毛に金を払いたい。」と、言い、フッと腰を浮かせた。これに対し、コールハースは、「もしかして、次の機会があれば（また馬を連れて、通りかかることがあれば）、取引をすることがあるかもしれません。」と、言うと、出発に向け、地主貴族には別れを告げ、馬たちの手綱を取ろうとした。ところが、その時、人混みから一步を踏み出した城守の口から、「話を聞いていないのか。通行許可証なしでは、旅は続けられないのだぞ。」という声が出た。後ろを振り向いたコールハースが、地主貴族に、「わたしの商売全体を台なしにするこの状況に、本当に正当性がありますか？」と、聞いた。地主貴族は、その場から離れながら、困ったような顔で、「もちろんだ、コールハース。許可証を貰ってこなければならぬ。城守とよく話をし、この旅を続けるのだ。」と、答えた。コールハースは、「馬の移出のために作られたこの通達の網をくぐり抜けるのは、わたしの本意ではありません。」と、断じると、「ドレスデンの通過の際、許可証は密書の形で購入してきます。」と、約束しながら、「この命令は全く知らなかったもので、今回は見逃してもらえませんか。」と、頼み込んだ。「さて、まあ！」と、地主貴族は言うと、今、再びまさに天気は崩れ出し、彼の瘦せた両足の間を辻風が吹き抜けていった。地主貴族は、「そいつは通してやることにしよう。お前たちはこっちに來い！」と、騎士たちに言うと、踵を返し、城内に入ろうとした。地主貴族の方を向いた城守が、「許可証の購入の保証のために、少なくとも担保はもらっておくべきではないですか。」と、言った。地主貴族は、再び城門のところ立っていた。「一体、青毛たちのために、どのだけのお金や物を担保に入れるというのです？」と、コールハースが聞いた。「あの青毛たちを預けさせればいいんじゃないですか。」と、髭の奥で口をモゴモゴさせながら、執事が答えた。「確かにそれが最も理に適っています。許可証さえ貰えれば、いつでも請け出せるのですから。」と、城守が応じた。余りにも法外な要求に驚いたコールハースは、ブルブルと震えながら、胴着の裾が腹の前に来るように直していた地主貴族に、「確かにあの青毛たちは売つつもりでしたが。」と、言った。ところが、その瞬間、一陣の突風が雨や霰というあらゆる重荷を門から掃き出したので、地主貴族は、全てに決着をつけるため、「馬たちを手放す気がないなら、もう一度、やつを遮断棒の向こうに追い払え。」と、叫び、その場から立ち去っていった。ここでは手荒な真似を控えるべきというのがよく分かっており、他に置いていけるものがなかった馬商人は、この要求は飲むしかない、決意した。彼は、青毛たちの綱を外し、城守が指定した厩舎まで牽いていった。そして、一体、ザクセン地方では緒についたばかりの馬の調教に関して、そういう命令が出ていないのも

半信半疑で、馬たちには下僕をひとりつけ、金を渡すと、下僕には、「俺が戻ってくるまでは、馬たちから目を逸らすな。」と、よく言い聞かせ、綱でひと繋ぎにした残りの馬たちと共、そこの市場に出すため、ライプツィヒへの旅を続けた。

ドレスデンからこの〔ザクセン〕領邦のより小さな市に対して商売をするのが常であった馬商人は、その郊外の町のひとつに幾つかの厩舎がついた屋敷を一軒、保有していたが、そのドレスデンに着くや、秘密文書局に足を運び、そのうちの数人とは旧知の仲であったその数人の評議員から、元々、思っていたように、通行許可証のこの一件は作り話だと教えられた。彼からの請願を受け、怒った評議員たちから、それが無根拠だという書面の証明をもらったコールハースは、それによる地主貴族の悪企みの全貌を理解するまでには至らず、瘦せっぽっちの地主貴族の浅知恵をあざ笑っていた。数週間後、綱でひと繋ぎにした馬たちを満足の行く値で売り払うと、人並みの苦労は重ねながら、トロンケンブルクまで帰っていった。

証明書を提示された城守は、それにはとやかく言わず、「今、馬たちを取り返したい。」という馬商人からの投げかけには、「ちょっと取りにいきますか。」とだけ、返事をした。しかし、コールハースは、中庭を横切っている時にはすでに、次のような不愉快な場面に遭遇させられた。つまり、トロンケンブルクに下僕を置いてから幾日もせぬうち、彼らが言うところの不遜な態度で、彼の下僕は打擲され、追い払われたと聞いたのである。この話を伝えてきた下男に、彼は聞いた。「一体、あいつが何をしました？ その間、馬たちの面倒は誰が見ています？」しかし、これには、「ちょっと分かりかねます。」という返事だけがあり、その後、すでに予感で胸が一杯の馬商人に、厩舎の扉はパッと開かれたが、そこにその馬たちはいた。さて、その驚きはどれほどであったか。よく肥えた光り輝く二頭の青毛たちのかわりに、ガリガリに痩せた老いぼれ馬のつがいがあるにはいた。梁のように何かを引っかけられそうな骨格。手入れもされず、適当にひねくり回されただけのたてがみや毛並み。動物界の悲惨さを表わす真の凶像！ 弱々しく動き回りながら、馬たちは嘶いていたが、コールハースは顔を真っ赤にして震えながら、「この駄馬たちの身に一体、何が起きたのです？」と、聞いてみた。脇で控えていた下男が、「さらにひどい不幸に見舞われたものではありません。飼葉は適当にやっていました。ただ、ちょうど収穫の時に役畜が足りず、ちょっと農地で使ったのです。」と、答えた。かくも恥ずべき、申しあわせたように手荒なやり方をコールハースは呪ったが、自分の非力さも感じたので、内心の怒りに歯を食いしばって堪えながら、他に何もやれず、この盗賊の巣窟から再び馬たちと一緒に出発する支度に、早くも手をつけていた。すると、口論に招き寄せられた城守がやってきて、「こんなところで何をしている？」と、聞き、「何をしているかだと？」と、コールハースが答えて、「仮置きしてあったわたしの青毛たちを地主貴族のフォン・トロンカとその取り巻きたちが畑仕事に使用してもよいという許可を、一体、誰が与えたのです？ これが人間のやることですか？」と、言い足して、疲れ果てた駄馬たちを目覚めさせるため、鞭を一振りし、それでもやはりビクリともしないのを、分からせてやった。しばらくの間、この城守は、不遜な感じで彼を見ていたが、「この無作法者を見てみろ！ 大体、この若造は、この老いぼれ馬たちがまだ生きているのを神に感謝すべきじゃないのか？」と、答えた。「下僕がいなくなったら、誰が馬の世話をするというんだ？ 出してもらった飼葉代を農地で馬が働いて返すというの

が、そんなにいけないことか？」と、言う、「ここで弁解するつもりはないが、それでも駄目だというのなら、犬を呼ぶことにしよう。そうやって中庭に平和を取り戻すやり方を、わたしは心得ている。」と、言う、話を終えた。――馬商人の胴着の下では、心臓がバクバクと脈を打っていた。危うく、この卑劣な太っちょを泥の中に投げつけ、その赤ら顔を足で踏んでやるところであった。しかし、金秤にも似た彼の権利意識の中では、まだユラユラとしたところがあった。自分の心の裁判所の前に立っても、この相手が罪の意識に苛まれているのか、まだ確信するところまでは至れなかった。彼は、グツと罵りの言葉を飲み込むと、馬たちの方に歩み寄り、状況を静かに考察し、たてがみを撫でながら、「一体、どんな過ちで、あの下僕はこの居城から遠ざけられたのです？」と、低い声で聞いてみた。「あの役立たずは、中庭で生意気ばかり言ってきましてね！　止むをえない厩舎の入れ替えにまで口を出し、あの老いぼれ馬たちのかわりに、むしろトロンケンブルクにやってきた二人の貴公子の馬たちを、一晩、路上で過ごさせると言ってきたのです！」と、城守が答えた。――下僕が近くにおいて、下僕の証言とこの分厚い唇の城守の証言をコールハースが比べられてさえいたら、そのことで彼は、これらの馬たちにそういう価値を認めていたのかもしれないが、棒立ちになり、乱れた青毛のたてがみを撫でながら、今の立場で自分がやれることには何があるかと、考えていると、突如、場面が転じ、兎狩りから戻った地主貴族のヴェンツェル・フォン・トロンカが、騎士、下僕、猟犬からなる一団を引き連れ、城前の広場に飛び込んできた。「何が起こったんだ？」と、問われた城守は、すぐにその言葉を引き継ぐと、事実に対して悪意に満ちた改変を加えながら（一方で、見知らぬ顔を見つけた猟犬たちは、恐ろしい吠え声を上げ、他方で、騎士たちはそれらに対し、「静かにしろ。」と、命じていたが）、自分の青毛たちをちょっと使われたというだけで、この馬商人が、反抗に向けたいかなる企みに出ているのかを訴えていた。「この馬たちを自分のものと認めることはお断りします。」と、高笑いしながら、馬商人が言った。コールハースは叫んだ。「これはわたしの馬じゃありません、閣下！　三十グルデンの価値があった、あの馬たちではありません！　わたしは、よく肥えて健康そのものだった馬たちを、返して欲しいと思います！」――一瞬、血の気が引いたようになり、地主貴族は、馬から降りると、「H**A**が、これらの馬を受け取らないというのなら、放っておけばよい。来い、ギンター！」と、言った。ズボンの埃を片手で払いながら、彼は叫んだ。――「ハンス！　こっちに！」それから、騎士たちと戸口をくぐっている時にさらに、「ワインももってこい！」と、大きな声で言い、屋敷の中に入っていった。コールハースは、「馬たちをこのままコールハーゼンブリュックの厩舎に連れて帰るくらいなら、皮剥ぎ人を呼び、屠殺場で捌いてもらった方がましだ。」と、言った。もうそれからは、駄馬たちを一顧だにせず、その場に立たせっ放しにしながら、「権利を手にするやり方なら、わたしにも心得がある。」と、断言すると、鹿毛に乗り、その場を立ち去った。

大急ぎでドレスデン行きの街道に入り、下僕や、あの居城で聞いた下僕に対する訴えについて考え、だんだん並足になり出すとすぐ、まだ千歩も行かぬうち、再び馬頭を廻らせ、その方が賢明で正しいやり方と思われたあの下僕への事前の尋問のため、コールハーゼンブリュックの方に進路を変えた。なぜなら、正しい感情、すでに世間の繊細な機微に通じていた感情は、彼をして、名誉毀損はあったにせよ、実際、あの城守が主張

するように、ある種の罪がこの下僕に帰せられるのなら、当然の帰結として、馬たちの損失も受け入れねばならないという気にさせていたのである。そのことに関し、同時に卓越もしていたある感情は、「元々、そんな風にしか見えないが、この事件の全体がもし口裏をあわせただけの話であれば、受けた侮辱に対する補償と将来の同胞の安全を自らの力で掴み取るという義務の世界に、お前は入るのだ。」と、彼に囁きかけ、先に進むほど、立ち寄ったあらゆる先でトロンケンブルクで旅行者に日常的に行なわれている悪事について聞けば聞くほど、この感情は、ズンズン深く根を張っていった。

コールハーゼンブリュックに着き、貞淑な妻、リスベートを抱擁すると、喜んで足元に集まる子どもたちにはキスをしながら、第一下僕のヘーゼのことで、「あいつについて何か聞いていないか？」と、すぐに聞いた。リスベートが答えた。「ええ、最愛のコールハース、あのヘーゼなんです！ 考えてもみて下さい、可哀想なあつ男は、十四日ほど前、ひどい殴られようで、いいえ、まともに息ができないくらいの殴られようで、ここに来たのです。わたしたちは、彼をベッドに運んでやり（そこでも、ひどく血を吐いたんです）、何度も話を振ることで、ようやく聞き出しましたが、それが理解を絶する話だったのです。通行を許可されなかった馬たちと一緒にトロンケンブルクで足止めされたとか、ひどい虐待で居城を去ったとか、一緒に馬たちを連れ出すのがどれくらい大変だったのかとか。」「で？」と、マントを脱ぎながら、コールハースが言った。「あいつは、もうよくなったのかい？」——「まだ血は吐きますが。」と、彼女が答えた。「一進一退ですわ。すぐにわたしは、あなたがそこに到着するまでの馬たちの世話のため、トロンケンブルクに下僕をやろうと思いました。なぜなら、ヘーゼはいつも誠実で、実際、他の誰より、わたしたちに仕えていましたから。ですから、あんなにも沢山の証拠に支えられた彼の発言を疑うとか、何か別の事情で馬たちをなくしたと信じる資格は、少しもないと思ったのです。ところで、彼からはこんな申し出がありました。つまり、他の人を犠牲にしたいくないので、あの盗人の巣窟には誰もやるなというのです。馬のことは諦めて欲しいとも言っていました。」——「あいつはまだベッドで横になっているのかい？」と、ネクタイを緩めながら、コールハースが聞いた。——「二、三日前からですが。」と、彼女が答えた。「もう屋敷の中を歩き回っています。いずれ分かることですが、ヘーゼの言葉に嘘はありません。この事件は、ここ最近、トロンケンブルクで他の領邦の人間に対して行なわれてきた不法行為のひとつなのです。」と、彼女は続けた。——「そのところをまずはっきりさせないと。」と、コールハースが答えた。「リスベート、あいつが起きているなら、ここに呼んできてくれないか！」そう言うや、デンと肘かけ椅子の上に腰を下ろした。夫人の方は、夫が冷静でいるのを大いに喜び、下僕を呼ぶため、その場を後にした。

下僕を伴い、夫人が部屋に入ると、「お前はトロンケンブルクで何をやった？」と、コールハースが聞いた。「お前には、必ずしも十分に満足してきた訳じゃないんだ。」——その言葉を聞くと、下僕は、青ざめた頬の上に赤い斑点をポツンと滲ませながら、しばらくジッと黙っていた。それから、「確かにそれはそうでしょうね、旦那様！」と、彼は答えた。「なぜなら、わたしは、たまたま神の摂理で手にもっていた火つけ糸を（追い出された盗人の巣窟にそれで放火してやるつもりでした）、そこで子どもの泣き声が聞こえたので、すぐさまエルベ川に投げ捨てたのですが、それでもまだこんなことを考えていま

したから。『神の雷電で灰になってしまえ。それだけが俺の本望だ！』とね。」——驚いたコールハースが、「ところで、どんな風にトロンケンブルクから追い出されたんだ？」と、聞き、これに対して、「旦那様、ひどい悪ふざけがあったのでございます。」と、ヘーゼは答え、額から汗を拭いた。「といっても、起きてしまったことは仕方ありません。畑仕事で馬たちを駄目にしたくなかったので、わたしは言いました。『こいつらはまだ若いので、物を牽いたことがないのです。』」——困惑をひた隠しにしながら、コールハースが答えた。「お前は、これについては必ずしも本当のことを言っていないぞ。あの馬たちは、この春にはもう、少し引き具をつけていたんだ。急いで収穫を運ぶのに必要と言われたなら、あそこの居城で（あそこでは、それでもお前は、ある種の客分だったのだから）、数回なら、あちらの気の済むようにやって差し上げればよかったんだ。」——「旦那様、そのようにさせてもらいました。」と、ヘーゼが言った。「あちらが不機嫌そうな顔をするので、青毛にもさして負担にはなるまいと踏んだのです。三日目の朝、車の前に馬たちを繋ぎ、三杯分の穀物を運んで差し上げました。」胸に熱いものがこみ上げていたコールハースは、床に目を落としながら、「そいつは初耳だな、ヘーゼ！」と、返事をした。——「事実としては、そうでした。」と、ヘーゼが請けあった。「わたしが意固地になった点としては、馬たちが昼飯を食べ終わる前は、決して再びくびきに繋がらず、『それに対する飼葉はタダでもらい、飼葉代として旦那様からもらったお金は、ポケットにしまっておけ。』と、城守や執事から言われても、『いい加減にしないと、痛い目にあわせるぞ。』と、答え、回れ右をしながら、その場から離れたことがありますが。」と、ヘーゼが言った。——「しかし、その意固地さが元で、トロンケンブルクから追い出されたのもあるまい。」——「滅相もない。」と、下僕は叫んだ。「神をも恐れぬ不法行為のためになのです！　なぜなら、その日の夕方、トロンケンブルクから来たあの二人の騎士の馬たちが厩舎の中に連れてこられた時、わたしの馬たちは、厩舎の戸に繋がれていたのですから。そこで一夜を過ごさせるという城守の手から青毛たちを奪い取り、『一体、これらはどこでならいさせてもらえますか。』と、聞き、城壁の縁に作られた板拭きの豚小屋を指差されたのです。」——「お前が言っているのはだな、」と、コールハースが割って入った。「厩舎というより、むしろ豚小屋と呼んだ方がいいくらい、それくらいひどい場所という意味じゃないのか。」——「旦那様、豚小屋でした。」と、ヘーゼが答えた。「正真正銘の豚小屋でした。豚たちが出たり入ったりするので、真っ直ぐ立っていることもできませんでした。」——「きっと青毛たちを泊める場所がそこしかなかったんだろう。」と、コールハースが言った。「騎士の馬たちには、ある種の優先権があるんだろうから。」——「あそこの場所はですねえ、」と、低い声で下僕が答えた。「狭いところでした。あの時は、全部で七人の騎士が居城にお泊まりでした。もし旦那様があそこにいたら、馬と馬の間を詰めさせたんでしょうが。『それであれば、村の方で厩舎を借りようと思います。』と、わたしは言いました。ところが、『俺の目の届くところに置くのでなければ駄目だ。中庭から出すなどという大それたことはするな。』というのが、城守の答えでした。」——「ふうむ！」と、コールハースが言った。「で、お前はどうしたんだ？」——「その二人のお客様は、一泊後は、翌朝からさらに先を急がれると、執事からは聞きましたので、馬たちを豚小屋に入れました。しかし、次の日もそうはならず過ぎ、三日目の朝、『その騎士の方たちは、あと数週間、この居城で過ごされることになっ

た。』と、小耳に挟みました。」——「つまりだ、最初、鼻づらを突っ込んだ時、そう思ったより、豚小屋はそれなりにマシな住み心地だったということか、ヘーゼ。」と、コールハースが言った。——「さようでございます。」と、下僕が答えた。「その場所を少し掃いているうちに、しのげる感じにはなってきました。数グロッシェンを下女に渡し、豚をどこかへやってくれとも頼みました。それから、丸一日をかけ、朝、明るくなると板塀から屋根板を外し、夕方にはまたそれをかけてやることで、馬たちも立っていられるようになりました。今や、馬たちはガチョウのように屋根から首を突き出し、コールハーゼンブリュック、あるいはそうではなくても、もうちょっとましなところはないかと、グルグル首を回しておりました。」——「さて、そうなるとだな、」と、コールハースが聞いた。「なんでお前は追い出されたんだ？」——「それはですね、旦那様、」と、下僕が答えた。「先方が、わたしを追い出したかったからでしょう。わたしがいては、馬たちを使い倒せませんから。あの方たちは、中庭でも、奉公人部屋でも、そこら中でしかめっ面をしてきました。といっても、こっちはこっちで、『脱臼するくらい、勝手に顔を引き撃らせている。』と、思っていましたので、結局、やつらは囲い込みの機会を使い、わたしを中庭から放逐したのです。」——「そうはいつでも、理由というものが！」と、コールハースが叫んだ。「それでも、何かの理由というものがあるだろう！」——「ええ、もちろん。」と、ヘーゼが答えた。「極めて公正明大な理由があります。止むをえず、豚小屋で過ごしていた二日目の夕方のことです。わたしは、そこで身体を汚してしまった馬たちを引っ張り出し、洗い場まで乗っていくところでした。城門をくぐり、横に曲がろうとすると、下僕と獵犬を従えた城守と執事が、棍棒を手に、背後の奉公人部屋からこっちに向かってくる物音と、『コラ待て、悪党ッ！』と、呼ぶ声がしました。『止まれ、クズ野郎ッ！』と、まるで取り憑かれたような感じです。行く手には、あの門番が立っていました。彼と、挑みかかる猛り狂った人々の群れに向かい、『何かありましたか？』と、わたしは尋ねました。『何があったかだと？』と、それが城守の答えでした（と、言いながら、二頭の馬たちの手綱をギュッと掴んできました）。『これからこの馬たちを連れてどこへ行く？』と、聞きながら、こちらの胸倉をグッと掴みました。わたしは言いました。『どこへですって？ 天からの雷電を食らうがいい！ 洗い場まで乗っていくんです！ まさか、わたしが——？』『洗い場ッ？』と、城守が、叫びました。『ベテン師め、お前には、街道の上をコールハーゼンブリュックまで泳いでいく方法を教えてやろう！』城守と、片足に取りついた執事が、悪意に満ちた殺害の衝動に駆られ、わたしを馬から引きずり落としたので、わたしは泥の中にダラリと伸ばされてしまいました。『人殺しッ！ クズ野郎ッ！』と、わたしは叫びました。引き具とカバーと下着の包みはまだ厩舎の中でしたが、城守と下僕が蹴りと鞭と棍棒で襲ってきたので（執事は、馬たちを連れ去ろうとしていました）、わたしは瀕死の状態、城門のところに倒れ込んでしまいました。『泥棒猫ッ！ その馬たちをどこに連れていく？』と、言いながら、わたしが立ち上がると、城守からは、『この中庭から出ていけ！』という大声が上がり、一方で、『それ行け、カイザー！ 行け、イエーガー！』という声も、轟いていました。『行くんだ、シュピッツ！』それから、ゆうに十二匹はいるであろう獵犬の群れが襲ってきました。その後、わたしは垣根から一枚の板切れ（それが何だったのかはよく分かりません）を破り取り、三匹の犬を打ち殺しましたが、咬まれた傷がひどく痛み、そこからは退却

しなければなりません。ピーッ！ と、甲高い笛の音がしました。獵犬は中庭に駆け込み、ギーッと城門は閉ざされ、門が入れられました。わたしは、道の上で気を失ない、倒れてしまいました。」——顔を青ざめさせながら、無理に冗談にしておもうという感じで、コールハースが言った。「お前は、本当にあそこから出たくないと思っていたのかな、ヘーゼ？」それから、ヘーゼが顔を赤黒くして、目を伏せているので、彼は言った。「本当のことを言っているんだぞ。お前は、その豚小屋が気に入らなかった。それで、『コールハーゼンブリュックの厩舎の方がまだましだ。』と、そう思ったんだ。」——「まさか！」と、ヘーゼが叫んだ。「なぜって、引き具やカバーやわたしの下着の包みは、豚小屋に置いたままだったんです。飼葉桶の裏の赤い絹のネックチーフの中に隠してあった三ライヒスグルデンも、懐にせずじまいじゃなかったでしたっけ？ 雷電よ、地獄よ、悪鬼よ、すぐにやってこい！ そんな風に仰るなら、捨てた火つけ糸にすぐまた火を点けてやろうと思いますよ！」「まあまあ！」と、馬商人が言った。「本当に、悪気があって言ったんじゃないんだ！ いいかい、お前が話したことの一言一句を、わたしは信じるよ。このことが、最後の晩餐の中で話されたとしても、このことを誓った上で、それをいただくことにする。わたしがやれと言ったことが上首尾に運ばなかったことが、残念でならない。もう下がっていいぞ、ヘーゼ、寝床に下がっていいんだ。ワインを一杯飲んで、元気をつけるといい。お前の側に公正さがあるように！」そうして、立ち上がると、第一下僕〔ヘーゼ〕が豚小屋に置いてきた物品の一覧表を作り、それらの価格を綿密に書き込み、治療費がどれくらいに見積られるのかを聞き取ってやった。それから、もう一度、サッと片手を出すと、その場を去らせたのであった。

その後、事件の全容とその内的な繋がりを妻のリスベートに明らかにし、どのようにして司直にひとりで訴え出ると決めたのかを説明しながら、そういう決心に至った彼を心から応援しようとする妻の様子に、目を細めていた。というのも、彼女は、こう言ったのである。「他にもまだ、おそらくあなたより我慢が足りない沢山の旅行者が、あの居城の脇を通過するでしょう。今回のような無秩序を止めるのは、神様がなさるお仕事です。わたしは、訴訟の実行に伴う費用をしっかりと請求しようと思います。」「お前には勇気があるな。」と、馬商人は言う、その日とそれに続く数日間、妻や子どもに囲まれた楽しいひとときを過ごし、仕事の都合がつくや、嘆願書を〔ザクセン〕裁判所に提出するため、ドレスデンに向けて出立した。

その地で、知りあいの法学者の助けを借りながら、抗告状を書き上げたが、その中には、自分や下僕ヘーゼに対し、地主貴族のヴェンツェル・フォン・トロンカが行なった不法行為についての長々しい陳述の後、同人への法的措置、馬疋の原状回復、下僕だけでなく、自分も苦しんだ損害に対する補償について要求していた。実際、この司法事件には曇った点などひとつもなかった。不正に馬たちが拘引されている状況は、他の全体に決定的な光を投げかけていた。単なる偶然で馬たちが病気になっていたとしても、それらを再び健康な状態まで回復させろという馬商人の要求には、それでもなお正義というものがあった。さらにコールハースには、首都〔ドレスデン〕中を見回した時、自分の事件への熱心な支援を約束してくれる友人たちにも欠けていなかった。馬の売買で大きくなった商売により、彼の名前は知れ渡っていたし、その誠実な仕事ぶりで、この〔ザクセン〕領邦の要人たちからの受けもよかったのである。彼は、名望のある人士である自分

の弁護士とほろ酔い気分で何度も食卓を囲み、訴訟費用の支払いとして一定の金額を手渡すと、数週間後には、この弁護士の言葉により、この司法事件の結果にはすっかり大船に乗った気分で、妻のリズベートがいるコールハーゼンブリュックまで戻っていった。ところが、数ヶ月が経ち、年の暮れを迎えても、当地で係争中にしてあった嘆願書への決議書はおろか、ひとつの説明書すら、ザクセンからは返ってこなかった。彼は、何度も裁判所に申請を出し、何がこれほどひどい遅れの原因なのか、改めて親書で法律顧問に問いあわせて、ドレスデンの裁判所の上層部の取り巻きたちにより、その嘆願書が完全に却下されているということを知った。――「その根拠はどこにあるのか？」という、意外の念に溢れた馬商人からの返書に対する件の人の答えは、次のようであった。「その地主貴族のヴェンツェル・フォン・トロンカは、ヒンツとクンツという二人の若い貴族の両フォン・トロンカと親戚関係にあり、このうちのひとは〔ザクセン〕選帝侯に仕える献酌侍従で、それどころかもうひとは侍従長で――、これ以上、あれこれ裁判所に労力を費やすより、やはりもう一度、トロンケンブルクにいる馬たちを押さえた方がよいと思いますし、そうしてもらいたいと思っています。」それから、「今、首都〔ドレスデン〕にいる地主貴族が、馬たちをあなたに渡すように部下に指示しているようです。」という話を馬商人に理解させると、「そこで満足したくないとあなたが思っているとしても、少なくともこの事件については、さらなる指示でわたしを煩わさないで下さい。」と、懇願することで、この話を終えた。

この頃、コールハースは、まさにブランデンブルクにいたが、そこでは市長のハインリヒ・フォン・ゴイザウが、たまたまその行政区の下にコールハーゼンブリュックがあったその市に転がり込んだ相当額の資金を元手に、病者や貧者向けの幾つかの慈善施設の開所という事業に取り組んでいた。とりわけ、彼が身を粉にしていたのは、その地方のある村に湧出し、皆が効能を期待していたある鉱泉を、虚弱者たちの使用に供することであった（後に、それほどの効能はないことが分かった）。コールハースは、頻繁に往来する中、宮廷での宿泊の際にすでに一緒になったことがあり、この男とは懇意の仲であったので、トロンケンブルクでのあの最悪の一日以来、呼吸時の胸痛が残った第一下僕のヘーゼに、屋根と囲いだけのこの小さな療養泉を試すようにとの許可を与えていた。幾つかの指示を出すため、その市長が、コールハースがヘーゼを入浴させていた大釜の縁までやってきた時、たまたまコールハースの手には、妻が送った使者を通じ、ドレスデンの法律顧問から送られた拒絶状が握られていた。医者と喋りながら、今、開いたばかりの手紙の上に、コールハースが一滴の涙を落とすのに気づいた市長は、親しさと思いやりに溢れた態度で近づくと、「どんな不幸に見舞われたのです？」と、声をかけてやった。何も言わず、馬商人がサッと手紙を手渡したので、トロンケンブルクで彼に行なわれた不正や、その結果、今もヘーゼが寝込んでしまっている（それも、おそらくは一生の間）のを知っていた、威厳に溢れるこの男は、彼の肩を叩きながら、「気を落とすんじゃないありません。賠償が受けられるように力を貸しますから！」と、そう言った。彼の指示に従い、馬商人が城にいたゴイザウを訪問したその日の夕べ、次のようにゴイザウは言った。「わたしは、事件についての短い説明をつけた請願書だけをブランデンブルク選帝侯に送り、そこに弁護士の手紙も同封し、ザクセン地方で行なわれた暴力に関する領邦君主の保護をお願いしてみます。その陳情書はもう用意してありますが、別の荷物

の下に忍ばせ、〔ブランデンブルク〕選帝候の手元まで届けることを約束します。事情さえ許せば、必ずやあなたのために、ザクセン選帝候に宛てて申請を出してくれるでしょう。地主貴族とその一味の奸計に逆らい、ドレスデンの裁判所でやつらに正義を突きつけるのに、それ以上の手続きは必要ありません。」大いに喜んだコールハースは、彼からの好意の新しい証拠に心からの謝意を表わしながら、「ドレスデンで何も手を打たず、すぐにベルリンでの係争にもち込まなかったのが、ただもう残念でなりません。」と、言った。それから、完全に指定された通りの抗告状を市の裁判所の文書課で書き上げると、それを市長に手渡した上、自分の事件の結果についてはこれまでよりずっと確信を深めながら、コールハーゼンブリュックへ戻っていった。しかし、何週間も経たぬうちにすでに、彼は、市長の仕事でポツダムまで来ていたある裁判権保有者から、次のような話を聞かされるという苦しみを味わされた。「〔ブランデンブルク〕選帝候は、請願書を法官のカルハイム伯爵に手渡しました。しかし、それは狙い通り、暴力事件の捜査や処罰を求め、じかにドレスデンの宮廷には回付されるのではなく、暫定的に、さらなる詳細情報を求め、地主貴族のフォン・トロンカの許に預けられました。」その裁判権保有者は、コールハースの住居の前で、馬車から外に身体を出さず、このような打ち明け話をせよと命じられているようであった。「一体、なぜカルハイム伯爵はそのような振る舞いに出たのです？」という驚いたコールハースの問いにも、男は満足な答えを返せなかった。「あなたには我慢のしどころと伝えるように、市長からは言われています。」と、もう少しだけ男はつけ加えた。彼は、旅を続けるように強いられているようであった。短いやり取りの最後によく、そこから漏れ出た幾つかの言葉から、どうやらカルハイム伯爵がフォン・トロンカ家と姻戚関係にあるらしいと、コールハースは嗅ぎ取ることができた。――馬の調教や、家屋敷や、妻や子どもにも喜びを感じられなくなったコールハースは、将来への暗い予感に沈みながら、翌月が来るのを待った。そして、この翌月が経過した後、その予感にピッタリと添うように、あの市長の手紙（より大きな回答書が添付されていた）を手に、温泉で少し症状を改善させたヘーゼが、ブランデンブルクから帰ってきた。その手紙の中身というのがこうであった。「あなたの事件で、何ひとつやって差し上げられなかったのが残念です。あなたに下達された内閣官房の決議書をそちらに送ります。トロンケンブルクに残した馬たちは、もう一度あなたが引き取り、残りの手続きは休止するというのを、わたしはお勧めします。」――その決議書の中身というのがこうであった。「ドレスデンの裁判所の報告によれば、この男は無益な訴訟狂だである。この男が馬たちを置き去りにした先の地主貴族は、これらを拘引したのでは決してない。この男は、居城まで人をやり、これらを引き取るか、あるいはその移送先を地主貴族まで伝えるかすべきである。いずれにせよ、内閣官房をこのような面倒や不和に巻き込んではいならない。」馬などどうでもよかったコールハースは――問題が二匹の犬でも、同じ痛みを感じたはずであった――、この手紙を受け取るや、怒りの余り、口角から泡を吹き出した。彼は、中庭で物音がする度、あの若い貴族の手下たちが姿を現わし、ひょっとして多少の謝罪はあるにしろ、ろくに飼葉も与えられず、やつれた馬たちをまた返しにきたのではと、かつて自分の胸を騒がせた不吉な予感を抱えながら、門道の方に目をやったのであった。これは、世知に長けた彼の魂が、感情とピッタリ一致するいかなるものも見い出せなかった唯一のケースであった。しかし、しばらくするとすぐ、彼

は、街道を往来していた知人から、「例のトロンケンブルクの駄馬たちは、相変わらず、地主貴族の残りの馬たちと一緒に畑で使われている。」という話を耳にした。そして、そんなひどい無秩序の世界を見せられるという苦痛の真ん中を突っ切るように、これからは自分の胸の中でだけ秩序を見出すという内心からの満足が燃え上がってきた。彼は、境界を接する不動産の買い取りによる地所の拡張計画をかねてから温めていた隣人の地方官を招き入ると、男が着座したところで、「ブランデンブルクとザクセンにあるわたしの地所、動産と不動産を引くくめた家屋敷に、幾らなら払ってくれます？」と、切り出した。この言葉を聞くや、妻のリスベートは顔を青ざめさせた。彼女は振り向き、自分の背後の床のところで遊んでいた末の子を抱き上げると、死人のような視線を、子どもの赤い頬を掠めてチラッと投げた後（子どもは、彼女のネックレスで遊んでいた）、馬商人とその男がもっていた紙切れの上に、フッと落とした。「なぜ急にそんなおかしな考え方になるのです？」と、怪訝そうな顔で彼を見つめながら、地方官が聞いた。これに対し、言われた当の本人は、努めて明るい感じを装いながら、「ハーフェル川の河畔の屋敷を売却するという考えは、急に湧いたんじゃないやありません。われわれ二人は、この話題についてはもう何度も話してきたでしょう。ドレスデンの郊外にあるわたしの屋敷は、ハーフェル川の河畔のそれに比べれば、考慮に値しない単なる付属物です。つまり、あなたがその意思を貫き、その二つの地所を引き受ける気にさえなれば、こちらには契約を締結する用意があるのです。」と、答えた。「まあ、コールハーゼンブリュックが全てじゃないですし、それと比べれば、副次的で、卑俗なものですが、普通の父親として家政を切り盛りする方が、より目的に適っているのかもしれない。要するに、あなたには言うのですが、わたしの魂はより大きな物事に目標を定めたのです（多分、これについてはすぐに噂になります）。」と、少し無理のある冗談をつけ加えながら、彼はそう言った。これらの発言に心を揺すぶられた地方官は、子どもに何度もキスをする彼の妻の方を向き、「ところで、ご主人はすぐの支払いがご希望なんじゃないやありません？」と、おどけた感じで言った。それから、股の間に挟んだ帽子と杖をテーブルの上に置き、馬商人がずっと手にもっていた書状を、それにザッと目を通すため、彼から受け取った。コールハースは、男の方に近づきながら、「これはもしものために作った四週間の期限つきの売買契約書です。」と、言うや、署名、合計額（売買価格そのものの金額と、違約金つき売買、つまり、四週間以内に売買を見送る際に応じるべき弁済に関わる金額）の記入以外は、全てが整っているのを示し、「これは公正なもので、決して手間は取らせません。」と、断じると、「さあ、売値をつけて下さい。」と、もう一度、陽気な感じで誘った。夫人は、部屋のあちこちを歩き回った。心臓は早鐘を打ち、子どもがつまんだ布地は、肩から完全にずり落ちそうであった。一方の地方官は、「このドレスデンの地所の価値については、皆目、見当がつきません。」と、言ったが、これに対し、コールハースは、買い取りのためにこれまでに交わした書状を男に押しつけながら、この書状からはもう半分くらい高値であると読み取られたが、「わたしなら百グルデンと見積ります。」と、告げた。一度、売買契約書に目を通し、その中で、彼にとっても奇妙と思われる言い回しで、返還の自由が規定されているのに気がついた地方官は、すでに半分、心は決まっていたが、「もちろん、厩舎にいる繁殖馬たちはわたしの手には負えません。」と、言った。しかし、「馬までは手放す気はありません。兵器庫にぶら下がっている多少の武器も手元に残

すつもりです。」と、コールハースが答えたので、それゆえ――、地方官は、何度かためらいながら、しかし、少し前にすでに一度、散歩の途中、半分は本気、半分は冗談でつけたその地所の価値には全く相応しくないつけ値を、ここで最後にもう一度、繰り返した。コールハースは、書けとばかり、インクと羽根ペンを押しつけたが、耳から入った内容が信じられない地方官は、「正気ですか？」と、聞き、少しカチンときた馬商人が、「冗談を言っているだけとお思いですか？」と、答えたので、真面目な顔で羽根ペンを受け取り、筆を走らせた。その申し出に対し、彼は、売り手がその取引を撤回せねばならない際の弁済について書いた部分は線で消し、買う気がないドレスデンの地所は抵当に入れ、百グルデンの貸与を約束し、さらに二ヶ月間は取引を再び撤回できる完全な自由を与えてやった。これらの処置に感銘を受けた馬商人は、いや増す思いで男の手を握り、主な条件であった売却価格の四分の一は即金、残りは三ヶ月後にハンブルクの銀行で支払うとの合意がようやく成ると、幸いにも上首尾に運んだこの取引を祝うため、「ワインをここに。」と、言った。そして、酒瓶を運んできた下女に、「栗毛に鞍を置くように下僕のシュテルンバルトに言づけておけ。」と、言い、「首都〔ベルリン〕まで行き、準備をせねばならないのです。」と、述べると、「ここへ戻ったらすぐ、今はまだ秘めておくべきことを、もっと大っぴらに打ち明けるつもりです。」と、曖昧な感じで伝えた。その上で、グラスにワインを注ぎながら、当時、まさに互いに戦闘状態にあったポーランドとトルコについての質問を投げ、それについての様々な政治的憶測の中に地方官を巻き込むと、その後、最後にもう一度、「この取引がうまくいくように。」と、祈りながら、乾杯して、それから、男を退出させた。――その部屋から地方官が出るや、リスベートは彼の前に跪き、大きな声で言った。「とにかく、わたしとわたしが産んだ子どもたちのことを思い続けているのなら、そして、どんな理由かは知りませんが、わたしたちがすでに追放されているのではないのなら、教えて欲しいのです。この恐ろしい下準備が、一体、何を意味するのかを！」コールハースが言った。「愛する妻よ、実際のところ、毛ほどの心配もいらぬのだ。地主貴族のヴェンツェル・フォン・トロンカについてのわたしの嘆願書を下らぬ騒動だとする決議書が、この手の中にはある。そして、そこには明らかに誤解があるから、もう一度、この嘆願書を〔ブランデンブルク〕領邦君主ご自身まで個人的にもち込もうと、決心したのだ。」――「どうして、家まで売ろうとするのです？」と、混乱した仕草で立ち上がりながら、彼女が大きな声を出した。馬商人は、彼女を優しく胸に抱きながら、「なぜって、愛するリスベート、自分の権利を守ってくれない領邦に住み続けようとは思わないからさ。踏みにじられるなら、人であるより、犬になった方がましだ！ わたしの妻なら、きっと同じように感じるのに違いない。」と、答えた。――「権利が守られないと、どうして分かるのです？ 控え目に陳情書を懐に忍ばせながら、いつものようにあの方に接近するとして、それが脇に置かれる、あるいは、聞き取りを拒む回答が来ると、どうして分かるのです？」と、声を荒らげながら、女が聞いた。――「いいさ、分かったよ。」と、コールハースが答えた。「こういう点での不安が杞憂だとしても、それでもまだ、この家が売られた訳ではないのだ。あの方自身が清廉の士なのは、よく分かっている。取り巻きたちを抜け、〔ブランデンブルク〕選帝侯にさえ辿り着ければ、権利が認められ、今週の終わりには、君のところや、昔からの仕事に喜んで戻ってこられるのは間違いない。それから先は（と、キスをしながら、彼は続け

た)、死ぬまでここで君と暮らしていく！——とはいえ（と、さらに続けて）、あらゆるケースへの準備を整えるのは望ましいことだ。そうことで、君にはしばらくの間、なるべく遠く、シュヴェリーンの叔母さんのところへ、子どもたちと一緒に行って欲しいのだ（どのみち、ずっと行きたがっていただろう）。」——「エエッ？」と、女主人が叫んだ。「シュヴェリーン？ 国境を越え、子どもたちと一緒に、叔母のいるシュヴェリーンへ？」そして、この驚きは、彼女から言葉を奪い取っていった。——「そういうことさ。」と、コールハースが答えた。「事件のために行動を起こしても、後顧の憂いに煩わされずに済むように、できるだけすみやかに。」——「ああ！ 意味が分かった！」と、女が叫んだ。「武器と馬以外、今のあなたには不要なのよ。それ以外は、何であろうと、誰が取ろうと構わないんだわ、取りたい人が！」そして、クルリと後ろを向くと、肘かけ椅子に倒れ込んで、泣き崩れた。——驚いたコールハースが言った。「どうしたんだ、愛しいリスベート？ 神様は、妻と子どもたちと財産をわたしに恵んで下さった。今になって、急に違うものをお願いしろと言うのかい？」——————親しげな様子で彼女の横に腰を下ろすと、その言葉を聞き、顔を真っ赤にした彼女が、彼の首に腕を巻きつけた。——「どうか言って欲しい。」と、彼女の額にかかる巻き毛を払いながら、彼は言った。「どうしたらいい？ 事件を諦めるべきかい？ トロンケンブルクまで行き、馬たちをまた返して下さいと、騎士をお願いをして、ヒョイと馬に跨がり、乗って帰ってくればいいのかい？」——「そうすべきだわ！」とは、あえてリスベートは言わなかった。——泣きながら、首を振ると、彼にギュッと身体を押しつけ、熱いキスで彼の胸を埋め尽くした。「さあ、それなら！」と、コールハースが大きな声で言った。「生業を続ける以上、この権利は与えられるべきと感じてくれるなら、わたしはそれが欲しいのだが、それを手に入れる自由を与えてもらいたい！」そうして、立ち上がり、「栗毛に鞍を置きました。」と、伝える下僕に、「シュヴェリーンまで妻を送るため、明日は鹿毛にも馬具をつけておけ。」と、言いつけた。リスベートは、「わたしにちょっと考えがあります！」と、言うと、立ち上がり、涙を拭い、「その陳情書を〔ブランデンブルク〕領邦君主に渡すために、わたしがそれを預かった上、あなたではなく、このわたしがベルリンに行くというのはどうでしょう。」と、書見台の前に座る彼に向かい、聞いた。複雑な胸の内から出たこの話に心を動かされたコールハースは、膝の上に彼女を抱き寄せながら、「愛する妻よ、それは無理というものだ！ 領邦君主には幾重にも取り巻きがいて、近づくと、様々な厄介事に巻き込まれるのだ。」と、言ったが、リスベートは、「多くの場合、あの方に近づくな、男より女の方が何千倍も容易ですわ。」と、答えた。「その陳情書をわたしに下さい。」と、リスベートは繰り返した。「あなたが、陳情書を手にしたあの方しか見たくないとしても、わたしは保証しますわ。あの方は受け取ります！」彼女の勇気や賢明さについては、色々と証拠があったコールハースは、「では、一体、どうやるんだ？」と、彼女に聞いた。すると、彼女は、恥ずかしそうに下を向き、「かなり前のことですが、〔ブランデンブルク〕選帝候の城の城代がシュヴェリーンで働いていた時、わたしに求婚してきたのです。今では、確かにその方も結婚し、沢山の子宝に恵まれています。まだ完全にはわたしを忘れていないでしょう。——要するに、こういう事情やそれ以外のあり過ぎて話せない諸々の事情から有利さを引き出すところは、わたしに任せて欲しいのです。」と、答えた。コールハースは、大いに喜んで彼女にキスをすると、「その提案に乗ってみ

よう。」と、言い、「あの城自体の中で領邦君主に陳情するには、男の妻の懐に入るより他にする必要はない。」と、教え、例の陳情書を手渡すと、馬車に鹿毛を繫がせ、しっかりと荷造りした上、忠実な下僕、シュテルンバルトをお供に、送り出してやった。

しかし、この旅は、彼が事件の中で行なったあらゆる不首尾に終わった行動の中でも、最悪のものになった。というのも、それから数日も経ぬうち、馬の口を捕らえたシュテルンバルトは、早くも再びトボトボと中庭に入ってきたのだが、その車室では、手足をダラリと伸ばし、胸に恐ろしい挫傷を負った夫人が、横になっていたのである。真っ青になったコールハースは、馬車まで駆け寄ったが、この不幸の原因の連鎖については、何も聞き出せなかった。下僕の言葉では、「城代は屋敷にはおらず、そのため、城の横の旅館への投宿を余儀なくされ、翌日、リスベート様はその宿をお発ちになり、馬たちと一緒にここへ留まるようにと、下僕たちには命じられましたが、夕方になる前にはもう、このような姿でお戻りになられたのです。」とのことであった。察するに、余りにも厚かましく選帝侯に向かって進み出たので、あちら側の過失というより、彼女を取り囲む番兵のひとりの単なる粗野な熱狂で、その槍の柄により、胸を突かれたということのようであった。少なくとも、夕方、失神した彼女を旅館まで運んだ者たちの話ではそうであった。というのも、彼女自身は、口から溢れる血に遮られ、ほとんど何も喋れなかったのである。その後、この陳情書は、ある騎士の手で受理された。シュテルンバルトが言った。「わたしがすぐにでも馬に飛び乗り、この不幸な事件の知らせを旦那様にお伝えします。」しかし、呼び集めた外科医からのあらゆる抗議にも関わらず、「いかなる事前の通告もなしに、わたしをコールハーゼンブリュックの主人のところまで運びなさい。」と、夫人は主張した。移動により、すっかり瀕死の状態になった彼女を、コールハースはベッドまで運んだが、そこで彼女は、やっとのことで苦しそうに息を継ぎながら、さらに数日間を生き永らえた。事件に繋がる何らかの情報をえるため、意識を回復させようとの全ての試みは水泡に帰し、硬直した、すでに生氣のない目でそこに横たわり、彼女は、一切の呼びかけにも答えなかった。ただ、死の直前だけ、彼女は、もう一度、息を吹き返した。なぜなら、たまたまその時、ルター派の聖職者がベッドの脇に立ち（ちょうどその頃、夫の例に倣い、彼女は、芽生えたばかりの信仰をその宗派に対して告白していた）、繊細かつ荘重なる大音声で、聖書の一節を朗読していたのである。そんなことで、突然、彼女は、陰鬱な顔で聖職者に目をやると、あたかもそこには読むべきものはないという風に聖書を引ったくり、ペラペラとページをめくり、何か探しものをするかのようであったが、ベッドの脇に座っていたコールハースに、人差し指で次の一節を差し示した。「あなたの敵を赦しなさい。あなたを仇する者にも、善行を施しなさい。」——それから、本当に心の籠った一瞥を投げ、彼の手を握ると、亡くなったのであった。——コールハースは思った。「主よ、わたしがあの地主貴族を赦すようには、わたしをお赦しなさいませぬ！」熱い涙を流しながら、彼女にキスをし、その目を閉ざし、彼はその部屋を立ち去った。そして、地方官が、すでにドレスデンの厩舎の代金として送ってくれた百グルデンを受け取ると、彼女のためではなく、むしろ王妃のために指図されたような埋葬式を注文した。しっかりと鉄の金具が打たれたオーク材の棺桶、金や銀の房飾りがついた絹製の枕、荒石を漆喰で塗り固めた深さ八エレの墓。末の子どもを胸に抱きながら、ひとりで墓穴の脇に立ち、彼はその仕事に目をやった。そして、弔いの日が来ると

共、黒布で覆うように命じた広間の中、雪のように白い彼女の亡骸を安置した。聖職者が、棺台の脇で感動的な説教を述べ終わると同時に、故人が手交した陳情書に対する決議書が届いたが、そこには、「馬たちをトロンケンブルクから請け出すこと。投獄処分を受けたくなければ、この件について、二度と申請するのではない。」と、書いてあった。この書状をコールハースは懐に入れて、棺桶を馬車に載せて運ばせた。墓に土を盛り、そこに十字架を立てさせ、亡骸を葬った会葬者たちがその場を離れるや、たった今、主をなくしたばかりのベッドの前に、もう一度、跪くと、それから、復讐の仕事に取りかかった。彼は、椅子にドッカーと腰を下ろし、地主貴族のヴェンツェル・フォン・トロンカに宛て、「お前が奪い取り、野良仕事で駄目にしたあの青毛たちを、この書状を読んてから三日以内に、コールハーゼンブリュックまで運び、コールハースの厩舎で自ら肥育せよ。」と、生来の権利に基づいて命じる判決文を書き上げた。それから、騎乗する使者にこの判決文を託すと、「書状を渡したら、またコールハーゼンブリュックまで戻ってこい。」という指示も与えた。馬が引き渡されぬまま、三日が過ぎると、彼は、ヘーゼを呼び出して、馬の肥育の件で、地主貴族にどういう義務を課したのかを説明した上、「俺と一緒にトロンケンブルクまで馬で行き、やつを連れてくると、やつが判決文に書かれたことのコールハーゼンブリュックの厩舎での実行を渋るとして、連行されてきたあいつに鞭を食らわせるのと、どっちがいい？」と、聞き、そこに読み取れるだけの意味を読み取ったヘーゼが、「旦那様、今日中にでも、」と、歓声を上げ、鍔なし帽を空に投げながら、「馬櫛の当て方を教えるため、あいつに結び目が十個のベルトを編み上げさせてやりましょう！」と、断じたので、コールハースは、屋敷を売り、子どもたちは馬車に放り込み、領邦の国境の外まで送り出すと、夜を迎え、いずれも黄金のように忠義心に溢れた総勢七人の残りの下僕たちを招集し、武器を与え、準備を整えて、トロンケンブルクに向けて出発した。

これらの少ない手勢を引き連れて、早くも三日目の夜が更けた頃には、門のところで無駄話をしながら立っていた収税吏や門番を蹴散らすと、居城の中に飛び込んだ。彼らが火を投じた城の小屋という小屋からは、突然、パチパチと音がしていたが、そんな中、ヘーゼは、螺旋階段を抜け、城守の塔の中に侵入し、半裸になって座り、カード遊びに興じていた城守や執事を、殴ったり、刺したりしながら、なぎ倒したが、一方のコールハースは、地主貴族のヴェンツェルのいる城の中に押し入っていた。天からの裁きの天使はこうして舞い降りたが、ちょうどその時、大爆笑の渦の中、馬商人が送付した抗告状を側にいた大勢の若い友人たちに読んで聞かせていた地主貴族は、城の中庭からやってくる声に気がつくや、一転、死んだように顔を真っ青にして、「逃げろッ、諸君！」と、紳士たちに叫び、姿をくらました。広間に入るや、自分に近づいてきた名をハンス・フォン・トロンカという地主貴族の胸倉を掴んで、広間の隅に投げ飛ばし、その脳髓を石畳に飛び散らせていたコールハースは、武器を手にとった他の騎士たちを下僕たちが制圧し、追い散らす中を、「地主貴族のヴェンツェル・フォン・トロンカはどこだ？」と、聞き回っていた。そして、呆然とした人々からは、「何も知りません。」という答えだったので、彼は、城の側翼に繋がる二部屋の扉を蹴破ったが、広い建物をあちこち駆け回っても見つからないので、出口の封鎖のため、悪罵しながら、城の中庭まで降りることになった。そのうち、小屋からの火に炙られ、早くも城は、天に向かってモクモクと大量の

黒煙を吐きながら、全ての付属施設と一緒にすでに紅蓮の炎に包まれ、シュテルンバルトは、キビキビと立ち働く三人の下僕たちと共に、鉋や釘で留められていないあらゆるものを引っ張り出しては、素晴らしい戦利品として、馬と馬の間に引っ張り返していたが、その一方、開け放たれた城守の窓からは、ヘーゼの勝鬨の声と共に、城守や執事の死体が、その妻や子どもと一緒に、バラバラと降っていた。城の階段を降りていた時、地主貴族の家政を切り盛りしていた痛風病みの老執事夫人がヒシと足元に縋りついたコールハースは、踏み段に留まりながら、「地主貴族のヴェンツェル・フォン・トロンカはどこに？」と、女に聞き、か細い、震えるような声で、「礼拝堂の中に逃げ込んだと思います。」と、返事があったので、松明をもった二人の下僕を大声で呼び、手元に鍵がないため、入り口を鉄槌と斧でこじ開けさせ、祭壇やベンチを引っ張り返したものの、それでも地主貴族が見つからなかったのは、彼にとっては大きな痛恨事であった。たまたま、コールハースが礼拝堂から戻ると、トロンケンブルクの身内の若い下僕が、すでに炎で炙られていた大きな石造りの厩舎から、地主貴族が所有する中でも最も気性の荒い雄馬を引っ張り出そうと、大急ぎでこちらにやってくるころであった。まさにその瞬間、藁で葺かれた小さな小屋に、例の二頭の青毛がいるのを見出したコールハースは、「なぜこちらの青毛たちを助け出さない？」と、聞いたが、その下僕が、厩舎の扉に鍵を差し込みながら、「もうこちらの小屋は燃えていますので。」と、答えるので、その鍵を厩舎の扉から勢いよく引き抜き、扉の向こうに投げ、刀の峯で霰のように激しく下僕を叩きながら、燃え盛る小屋のところまで追い立て、野次馬たちによる恐ろしい哄笑の中、「その青毛たちを助け出せ。」と、要求した。その小屋が自分のすぐ後ろで倒壊してからほんの数分後、下僕が、その口を捕らえた馬たちと一緒に、驚きの余り、顔を青ざめさせながら、そこから戻ると、もうそこにコールハースの姿はなかった。城の前の広場にいた下僕たちのところまで足を運び、何度も自分に背を向ける馬商人に、「今さら、この馬で何をしますおつもりですか？」と、彼が聞くと――、突然、不意に、恐ろしい、もし当たっていたら即死というような勢いで、馬商人が足を振り上げ、一言も返さず、サッと鹿毛に跨がり、城の門を抜けると、下僕たちが自分たちの営みを続ける中、黙って朝焼けの光に目をやっていた。

朝になり、城壁を残して城は完全に崩れ落ち、そこにはもうコールハースと七人の下僕の姿しかなかった。馬から降り、再度、明るい陽光の下、それによってようやく四隅が照らされることになった一帯を探索し、彼は、極めてつらいことではあったが、居城への試みは完全に失敗したと納得したので、痛みと苦しみで胸を一杯にししながら、地主貴族が逃亡中に取った進路の情報を入手するため、何人かの下僕をつけたヘーゼを送り出した。とりわけ、エアラプルンという名のムルデ川の河畔の裕福な女子修道院と、その地では慈悲心に溢れた敬虔な婦人として知られた尼僧院長のアントニア・フォン・トロンカが、彼の心を悩ませていた。なぜなら、この尼僧院長は、あの地主貴族の血を引く叔母で、幼児期における乳母でもあり、このような形であらゆる必需品を奪われた今、この修道院に彼が逃げ込むのは必定と、不幸なコールハースには思えたのである。このような状況についての情報を入手した後、コールハースは、まだ居住に使えるだけの部屋があった城守の塔に登り、いわゆる「コールハースの訓令」を口述すると、それを文章の形に書き表わしたが、その中では、この〔ザクセン〕領邦に、「わたしが法律上の戦いを挑む地主貴族のヴェンツェル・フォン・トロンカには、どんな支援も行なってはな

らない。」との命令を下し、それどころか、親戚や友人の別なく、あらゆる住民に、「死刑やそこから来る全財産の焼却刑こそが相応しいこの男をこちらに引き渡せ。」との義務も課していた。彼は、この宣言文を旅行者や外国人を通じてその地方にばら撒いたが、それどころか、下僕のヴァルトマンには、「エアラブルンにいるアントニア尼の手元までそれを届けろ。」との具体的な指示まで出し、その複写を手渡すということすらやったのであった。その上、地主貴族に対して不満があり、戦利品を入手できる見込みに釣られ、手下になりたがっていたトロンケンブルクの数人の下僕たちに話をもちかけると、彼らを歩兵の様式に従い、石弓や短剣で武装させ、騎乗した下僕たちの後ろについてこいと、教え込んだ。そして、輜重隊が強奪した全ての物品を換金し、皆に分け与えると、このつらい仕事からの疲れを癒すため、数時間ほど、城門の下で休息を取ったのであった。

昼になり、ヘーゼがやってきて、コールハースの心が、常に暗い予感に沈みながらずっと呟いてきたこと、つまり、あの地主貴族が、叔母のアントニア・フォン・トロンカ老尼と共に、エアラブルンの修道院にいるという話は本当ですと、報告した。どうやら、彼は、城の背後の壁に空いた外部に抜ける扉を通り、エルベ川の小舟が浮かぶところまで斜めに繋がる、小さな屋根つきの、細長い、石造りの階段を降り、脱出したようであった。少なくともヘーゼの報告では、真夜中、舵も櫂もない小舟に揺られ、地主貴族がエルベ川のある村に逢着し、村の荷車でまたエアラブルンへと出発したというので、トロンケンブルクの火事で集まった人々は怪訝な顔をしていたという話であった。—————コールハースは、この情報に大きなため息をつき、「馬たちは飼葉を食べたか？」と、聞き、「食べました。」と、手下たちが応じるや、「それでは、馬たちに騎乗せよ。」と、一団に命じ、三時間後には、早くもエアラブルンの前に立っていた。折しも、はるか遠方の地平線の近くで雷雲がゴロゴロと轟く中を、彼がその地点を前に着火した松明を手に、一群を引き連れて、その修道院の中庭に入り、彼を出迎えた下僕のヴァルトマンが、「訓令は確かに手交しました。」という報告をしていたその時、その尼僧院長と修道院執事が、取り乱した感じで口論しながら、修道院の門をくぐるのが見えた。後者の修道院執事（小柄で、年配の、雪のような白髪頭をした男）は、コールハースに怒りの目差しを向け、甲冑を着せられながら、大胆不敵な声で、自分を取り囲む下僕たちに、「塔の鐘を打ち鳴らせ。」と、命じていたが、前者の尼僧院長は、銀の十字架を片手で捧げながら、亜麻布のように真っ青になり、傾斜路を降り、他の尼僧たち全員と一緒に、コールハースの馬の前でバツタリとひれ伏していた。ヘーゼとシュテルンバルトが、丸腰だった修道院執事を打ちのめし、捕虜として馬と馬の間に引きずり出している間に、コールハースは尼僧院長に、「地主貴族のヴェンツェル・フォン・トロンカはどこだ？」と、聞いたが、バルトから大きな鍵束をジャラジャラと外しながら、「ヴィッテンベルクですわ、コールハース、威厳のある方！」と、女が答えて、「神を畏れるのです。それから、不正を働いてはなりません！」と、震える声で言い足したので、——成就せぬ復讐という地獄に再び突き落とされたコールハースは、馬頭を転じ、「火を放て！」と、叫ぼうとしたが、その刹那、恐ろしい雷電が、彼の身体を掠め、地面の上に落ちた。コールハースが、再び女の方に馬の首を向けながら、「訓令は受け取ったか？」と、聞き、弱々しい、聞き取れるかどうかの声で、「たった今、受け取りましたわ！」と、婦人が答え——、「たった今とは？」——、「神のご加護で、地主貴族の甥がすでに完全に逃亡を果たし、二時間が経過した今

です！」—————陰気な目つきでコールハースが振り返った先にいた下僕のヴァルトマンが、「大雨によるムルデ川の増水で、今より早くは辿り着けなかったのです。」と、話したことで、吃りながら、この事実を認めたので、コールハースは気を取り直した。松明の火を掻き消しながら、広場の敷石の上に降り注いだ恐ろしい突然の驟雨が、彼の不幸な胸の内の痛みを拭い去ったので、婦人の前で帽子をピクリと動かすと、「兄弟たちよ、わたしに続け、地主貴族は、ヴィッテンベルクだ！」という言葉と共に、馬頭を転じ、拍車を当てると、厩舎を後にした。

すっかり夜になり、街道筋にある宿屋に投泊すると（馬たちがひどく疲れていたもので、そこで一晩、休息を取らねばならなかった）、十人の一団をもってしても（なぜなら、今ではそれくらい強大になっていた）、ヴィッテンベルクのような土地には逆らえないと分かっていたので、彼は、二本目の訓令を書き上げると、その中で、この〔ザクセン〕領邦で自らが遭遇した事件についての簡単な説明の後、彼自身の表現を借りれば、「全ての善良なキリスト者たち」に、「手付金やその他の戦闘からえられる利益についての誓約」をしながら、「全キリスト者の共通の敵である地主貴族のフォン・トロнкаへの事案を敢行せよ」と、要求していた。その後、すぐに出されたもうひとつの訓令では、彼は、自らを「帝国からも、世界からも自由な、神のみに支配された人士」と、自称していた。それは、病的で、迷妄に彩られた狂燥であったが、チャリチャリと金の鳴る音や、略奪物が手に入るという見込みもあり、ポーランドとの和平で扶持をなくしたならず者たちの大量の流入を招くことになった。そんなことで、ヴィッテンベルクの殲滅のため、彼がエルベ川の右岸まで戻ると、その数は、実際、三十余名にまで膨らんでいた。当時、彼は、この市をグルリと囲む薄暗い森の中の人気のない場所にあった朽ち果てた古い煉瓦小屋の屋根の下、馬や下僕たちと一緒に横になっていたが、訓令を手に、変装して市中に派遣されていたシュテルンヴァルトから、「市ではすでに訓令が広く知れ渡っています。」と、聞かされるや、聖霊降臨祭の聖なる前夜、一団と共にすぐにそこを発ち、住民が眠り込んでいた間に、市の複数の地点に同時に火を放った。その際、下僕たちは市の郊外で略奪の限りを尽くしたが、彼は、とある教会の扉の柱に一枚の書状を貼り出し、そこには、次のように書かれていた。「わたし、コールハースは、当市に火を放った。もし件の地主貴族をこちらに寄越さなければ、」そこに書いてあった通りに言えば、「地主貴族の搜索のため、いかなる壁の裏も覗かずに済むよう、全てを灰塵に帰せしめるであろう。」——この前代未聞の悪事への住民の驚きは、言葉では言い表わせず、幸い、風のない夏の夜だったのもあり、火は十九棟の家屋（その中には、教会が一棟あった）を焼いただけで終わったが、夜明けと共に、その大部分が鎮火するや、この驚くべき暴君の撃退のため、老代官オットー・フォン・ゴルガスは、五十人からなる一隊を早くも派遣していた。しかし、その際、一隊を率いるゲルシュテンベルク大尉による余りにも馬鹿なヘマのため、倒すどころか、恐ろしく危険な武勲をコールハースの一行全員に与えてしまった。というのも、彼を包囲、殲滅するという考えで、大尉は、この兵士たちを沢山の小隊に分けたので、一団をひとつに固めたコールハースにより、孤立した各地点で、殲滅、潰走させられ、早くも翌日の夕方には、領邦の希望であった全部隊のうちの誰ひとり、その戦場には立っていなかったのである。これらの戦闘で手勢の数人を失なったコールハースは、翌朝、改めて市に火を放ったが、血腥い下準備が奏を功し、多くの家屋と郊外の納屋の

ほとんどが、再び灰塵に帰した。その際、彼はあの有名な訓令を再び貼り出したが（より正確には、市庁舎自体の四隅に貼り出した）、そこには、代官によって派遣され、コールハースが破滅させたフォン・ゲルシュテルンベルク大尉の運命に関する報告も添えてあった。この挑戦に激怒した代官は、数人の騎士たちと共に、百五十人からなる部下の一団の先頭に自ら立った。地主貴族のヴェンツェル・フォン・トロнкаには、彼からの書面による訴えに基づき、彼を市から完全に遠ざけようとする民衆の暴力から守るための番兵をひとりつけ、その地方の全村には番兵たちを配備して、市の襲撃からの防衛のため、市の環状囲壁には哨所を設けた後、聖ゲルヴァジウスの日、領邦を荒らす竜の捕獲のため、彼は自ら出撃していった。この一団から身をかかわすなど、馬商人には朝飯前であった。つまり、巧みな行軍により、市から五マイルの地点までおびき出し、あらかじめ仕組んでおいた様々な計略により、「優勢に押されて、馬商人はブランデンブルク領まで逃げ込もうとしている。」と、代官にすっかり信じ込ませた後、突然、三日目の晩を迎えるや、ギャロップでヴィッテンベルクまで馳せ戻り、市への三度目の放火に及んだのである。変装し、市内に潜伏していたヘーゼが、この驚くべき芸当をやったのけた。刺すように吹く北風に乗り、この大火が、周辺まで延焼する壊滅的なものになったため、三時間も経ぬうち、四十二棟の家屋、二棟の教会、多くの修道院と学校、それに選帝候の代官自身の建物が、灰塵に帰した。夜明けと共に、敵はブランデンブルク領にいると信じ込んだ代官は、起きたことの報告を受け、隊伍を乱して反転すると、大混乱に陥った〔ヴィッテンベルク〕市がそこにはあった。つまり、何千人にも数を膨らませた民衆が、角材や杭で封鎖された地主貴族の屋敷の前、猛り狂った叫び声を上げながら、「市の外にやつを放逐しろ。」と、要求していたのである。官服に身を包み、全参事会員の先頭に立った名をイエンケンスとオットーという二人の市長は、様々な理由から地主貴族自身がそこに発ちたいと望んでいたドレスデンへの同人の移送の許可を求めて、〔ザクセン〕内閣官房の宰相宛てに送っていた急使の帰還を待ってみようと、空しく説いていたが、槍と棒で武装したこの無分別な一団は、これらの言葉には全く耳を貸さず、余りにも苛烈な処分を求める数人の参事会員には虐待をすら加え、今にも地主貴族の屋敷を襲い、打ち壊さんばかりであったが、まさにその時、代官のオットー・フォン・ゴルガスが、騎兵部隊の先頭に立ち、市中に姿を現わした。その場に居合わせただけで、すでに民衆に崇敬と恭順の念を生じさせるのが常であったこの威厳ある人士は、失敗に終わり、帰ってきた企図のかわりにとでもいうように、放火殺人犯の一味である駆逐された三人の下僕たちを市門のすぐ前でうまく捕獲すると、民衆の見る前で、一味を鎖に繋ぎながら、「わたしはコールハースの追跡を続けるので、遠からず、鎖に繋がれたあいつ自身を投獄することができるでしょう。」と、抜け目のない言い方で市参事に保証したので、幸い、これらのあらゆる鎮静化に向かう状況の力により、集まった民衆の不安は静まり、地主貴族がそこにいることについても、ドレスデンからの急使が戻るまでの間、ある程度、怒りが抑まることになった。オットー・フォン・ゴルガス氏は、数人の騎士を引き連れ、馬から飛び降りると、防御用の柵や杭を取り除いた後、二人の医者腕に抱えられながら、失神から目を覚ましてはまた失神し、この二人が精油や刺激剤で意識を回復させようとしている地主貴族の屋敷に足を踏み入れたが、今は、地主貴族が自らの罪で招いた行為について意見を交える時ではないと分かっていたので、静かに侮蔑的な視線を送りなが

ら、「身なりを整え、ご自分の安全のため、わたしの後について騎士用の独房に入って下さい。」と、言うだけに留めた。人々が、地主貴族に胴着を着せ、鉄兜を被せ、呼吸がままならぬ地主貴族が、まだ半分ほど胸をはだけさせ、代官と、彼にとっては義理の兄弟に当たるフォン・ゲルシャウ伯爵の腕に縋り、街道まで出てきた時、そこでは、彼を名指しする、神すら冒瀆するような驚くような呪詛の言葉が、天に向かって駆け上っていた。徒歩傭兵たちにより、ようやく押し止められていた民衆たちは、地主貴族を指差しながら、「蛭、領邦の惨めなペスト、人類の厄介者、ヴィッテンベルク市の呪い、ザクセンの汚物！」と、怒号していたが、瓦礫の山になった〔ヴィッテンベルク〕市の横断という悲惨な行軍の後（その際、彼は自分ではそれと気づかず、何度も鉄兜を地面に落としては、騎士がまたそれを後ろから被せてやっていたが）、ようやく一行が監獄に到着すると、そこで彼は、ひとりの屈強な番兵に守られながら、塔の中に姿を消した。そうするうち、〔ヴィッテンベルク〕市は、選帝侯の決議書を携えた急使の帰還により、新たな不安の中に投げ入れられていた。というのも、ドレスデン市民が性急な請願書を使って直訴した先の〔ザクセン〕領邦政府は、放火殺人犯たちの勢いに押され、地主貴族がその建物にいるとは認識したがらず、それどころか、「同人は、同人がいるはずの場所で（なぜなら、同人はどこかにはいるはずなので）、自由になるだけの兵力を使い、代官が守るべき。」との義務を代官には課したが、一方、善良なヴィッテンベルク市には、市の鎮静化のため、「フリードリヒ・フォン・マイセン王子が指揮するすでに五百人にまで膨らんだ軍団が、同人によるさらなる厄介事から市を遠ざけるため、そちらに向かっている。」という話が、伝えられた。ちなみに、この代官は、この種の決議書では民衆が決して鎮まらないことがよく分かっていた。それは、すでに市外の随所で馬商人が勝ち取った数々の小さな勝利により、ここまでに成長を遂げた強さについての極めて不愉快な噂が広まっていただけでなく、瀝青、麦わら、硫黄をもった変装したならず者たちの手により、夜陰を突いて進んできたこの戦闘が、こちらに接近中のフォン・マイセン王子が擁する援軍よりさらに強力な援軍が現われても、これまでもそうであったように、前代未聞の先例のない形で、独力で、それを打ち破るかもしれないからでもあった。短い熟考の後、代官は、受け取った決議書を完全に葬り去ろうと心に決めた。彼は、フォン・マイセン王子が自らの到着を知らせる手紙だけを、〔ヴィッテンベルク〕市の辻々に貼り出させた。夜が明けるや、獄舎のあった中庭から飛び出した、しっかりと鎧戸を降ろした一台の馬車が、重武装に身を包んだ四人の騎兵の伴走を受け、ライプツィヒに向かう街道の上を駆けていたが、その際、騎兵たちは、「この馬車は、プライセンブルクに向かっている。」と、それとなしに触れて回っていた。その存在が火や剣と結びついていた邪悪な地主貴族への落ち着きを民衆が取り戻すや、代官自身は、フリードリヒ・フォン・マイセン王子との合流のため、三百人からなる一団と共に、その地を出発していた。一方のコールハースは、実際、彼が俗世で取っていた特別な態度から、百九人にまでその勢力を増していた。そして、イエッセンでも武器の備蓄を調達し、軍団は最高度にまで武装を整えたので、「二つの嵐が近づいている。」との報告を受けるや、「それが王子のところにやって来る前に、暴風雨の速度で王子に相対してやろう。」との決意を固めた。彼は、そんなことで、翌日にはすでに、ミュールベルクの近郊でフォン・マイセン王子に夜襲をかけたが、その戦闘の最中、誠に遺憾ながら、ヘーゼという存在を失なった（最初の銃弾が命中す

るとすぐ、コールハースのかたわらにズサリとくずおれた)。しかし、この喪失に憤激した彼は、三時間に及ぶ戦闘の中、戦力をその村に集中できなかった王子が、夜明けと共に、自らの数箇所の重傷と自軍の完全な潰走により、ドレスデンまで退却せざるをえない状態になるほどの打撃を与えた。この勝利にすっかりのぼせたコールハースは、まだ代官がこれについての報告を受ける前、その彼に向かって反転すると、白昼、ダーメロー村近郊の広大な平原にいた代官に対する攻勢に撃って出たが、しかし、実際には、恐ろしい大敗北を喫し(とはいえ、同じくらいの勝利も上げたが)、夜更けまで格闘することになった。そう、かりにミュールベルクで王子が喫した敗北について、まだこの代官が伝令から何も知らされず、そんなことで、さらによい時期が来るまで、同じようにヴィッテンベルクに引っ込んでいた方がましと判断していても、翌朝にはむしろコールハースの方が、部隊の残党を引き連れ、ダーメローの教会の墓地に入った代官を再び攻撃していたことであろう。この二部隊の潰走から五日後、コールハースはライプツィヒの目前まで肉迫すると、市の三方に火を放った。――この機会にばら撒かれた訓令の中で、彼は、「全世界がその中に落ち込んだ奸計を、火と剣によって誅せんがため、今回の訴訟事件で地主貴族の側につこうとする全ての人々の前に来臨した、大天使ミカエルの代理人」と、自称していた。あわせて彼は、奇襲して、そこを住居と定めたリュッツェン城から、「万物によりよい秩序を与えるため、こちらの指示に従うように。」と、民衆に向けて呼びかけていたが、その訓令は、狂ったような調子で、「われわれの暫定的な世界政府の所在地であるリュッツェンの大城にて、これを認める。」と、結ばれていた。ライプツィヒの住民の幸運の女神は、降り止まぬ雨のため、それ以上は火の手が進まず、既設の消防隊の迅速な働きにより、プライセンブルクの近くの数軒の雑貨屋が焼かれるだけに終わるといふ結末を望まれた。それにも関わらず、目の前に半狂乱の放火殺人犯がいることへの〔ライプツィヒ〕市の驚き、地主貴族がライプツィヒにいるという幻想への市の驚き(そういう幻想の中に市はあった)は、筆舌に尽くしがたく、コールハースに差し向けた百八十人の騎馬隊の一団は、蹴散らされ、〔ライプツィヒ〕市の中まで押し戻されたので、市の財産を譲るつもりがない市参事会には、市門を完全に閉ざし、昼夜の別なく住民たちに壁の外を見張らせるくらいしか、残された道はなかった。市参事会は、「プライセンブルクには地主貴族はいません。」と、きっぱり断定する布告を、周辺の村々に貼り出したが、それも空しかった。なぜなら、馬商人は、同種の書状の中、「地主貴族はプライセンブルクにいるはず。」と、主張すると、「もし同人がプライセンブルクにいなくても、少なくとも居所の名前が明かされるまで、あたかも同人はプライセンブルクにいるかのように振る舞う。」と、断定したのである。ライプツィヒ市が落ち込んだ苦しみについての報告を急使から受けた〔ザクセン〕選帝候は、「コールハースの一味の拿捕のため、すでに二千人からなる軍団を招集し、わたしは、自らその陣頭指揮に当たるつもりでいる。」と、言明した。彼は、ヴィッテンベルク地方から放火殺人犯を放逐するという目的に対し、曖昧で、思慮を欠いた手段を使ったという科で、オットー・フォン・ゴルガス氏を嚴重訓告に処したが、誰の手によるかは分からない、コールハースの一味に対する布告が、ライプツィヒの近郊の村々に貼り出され、その中身が、「地主貴族のヴェンツェルは、従兄弟のヒンツとクンツと共に、ドレスデンにいる。」であると分かった時の、ザクセン全土、とりわけ首都ドレスデンを襲った混乱は、誰にも書き表わせない。

こうした状況の中、マルティン・ルター博士は、俗世での地位から来る名声に支えられた、鎮静効果のある言葉の力を駆使し、コールハース一味を俗世の秩序の大道に押し戻すという仕事に着手すると、放火殺人犯の胸の中にあるこちらに役立ちそうな要素に望みを繋ぎ、次のような内容の高札を馬商人に対して公布したが、それは〔ザクセン〕選帝侯領の全町村に貼り出された。

「正義の剣を揮うために遣わされたと詐称するコールハースよ、一体、お前は何をするのか、盲目の情熱という狂気に踊らされた不心得者、それ自体、不正とされることで頭から爪先まで満たされたお前は？ 家臣として仕えてきた領邦君主が、お前の権利、つまらない財産を巡る係争におけるお前の権利を拒絶したというので、不吉なる者よ、お前は火と剣をもって立ち上がり、彼が鎮撫していた平和な教区に、荒野の狼のように姿を現わした。お前は、虚偽と奸計に満ちたこれらの主張により、人心をかどわかしが、罪人であるお前は、神が全ての心臓の襲を照らすといういつか来るその日、そのことについて、神の御前で申し開きできると思うのか？ 自分の権利が拒絶されていると、どうしてお前は言えるのか？ 失敗に終わった最初の軽率な試みの後、穢らわしい自力復讐の感情に圧倒され、激高したその胸が、権利を手に入れる努力を完全に放棄した、そのお前に？ そうして、配達された手紙を握り潰した、あるいは、引き渡すべき通知を差し押さえたという一群の廷吏と権力の犬たちであるが、それは、お前の上役であろうか？ 洩神者よ、本当のお前の上役は、お前の事件について何も知らないということ、わたしはお前に知らせなければならないのか——わたしは何を言ったらい？ お前が抗っている当の領邦君主ですら、お前の名前を知らなかったという、そのことをか？ それゆえ、いつの日か、彼を告発するため、お前が神の玉座に歩み出したとしても、当の本人は、晴れやかな顔をして、『主よ、わたしはこの男に不正を働いてはおりません。なぜなら、その男の存在は、わが魂とは全く無縁でありましたから。』と、答えられるということをか？ 知るがよい、お前の操る剣は、略奪と殺人衝動の剣。お前は逆賊で、正義の神の戦士ではない。この世では車裂きと絞首台が、あの世では悪行や不信心に対して下される劫罰が、お前を待っている。

ヴィッテンベルク某所にて
マルティン・ルター」

折しも、リュッツェン城で、コールハースは、千々に乱れた心で、ライプツィヒを灰塵に帰すための新たな計画をあれこれと練っていたが——というのも、「地主貴族のヴェンツェルはドレスデンにいる。」という村々に貼られたその通達には、彼が望んだ市参事会員の署名はおろか、誰の署名もなかったのが、彼はそれを軽んじたのである——、その頃、シュテルンバルトとヴァルトマンは、夜更けに、城の門道にこの高札が掲げられているのを、驚きと共に見い出したのであった。何日も、彼らはコールハースの前に進んでは足を運ばず、コールハースがそれに目を留めるのを待ったが、空しかった。なぜ

なら、夕刻、陰鬱に、物思いに沈みながら、確かに彼は姿を見せるのだが、それはただ短い命令を下すため、何か目をやろうとはしなかったのである。そんなことで、ある朝、命令に反し、この近隣で略奪を働いた二人の下僕を絞首刑にしようという時、彼らは、そのことを彼に気づかせようと決意した。ちょうど、おどおどした民衆が両側で道を空ける中、最近、訴訟を委任して以来、恒例となった行進をしながら、彼が刑場から戻ってくるころであった。金色の房飾りがついた緋色の皮製の枕に載った一本のケルビムの大剣が彼の前を運ばれ、燃え盛る松明をもった十二人下僕が彼の後ろに従い、それで彼が奇異の念を抱くように、脇の下に剣を携えた二人の男が、高札が貼られた柱の周りをクルクルと回っていた。腰の後ろで両手を組み、物思いに沈み、門までやってきたコールハースは、目を上げ、そこにピタリと足を止めると、自分が見る中、下僕たちが恭しく後退りをするので、ぼんやりとその二人に目をやりながら、相当な早足でその柱のところに近寄っていった。そして、彼がしたことを不正と断じるその紙片を見出した時、その魂に湧き上がってきたことを、一体、誰に記せよう。というのも、そこには、彼が知る中でも最も高貴で、尊敬すべきとされる名前、マルティン・ルターの名による署名があったのである！ その顔に濃い血の色がサッと上り、兜を脱ぎながら、最初から終わりまで、二度、彼は目を通すと、呆然とした目つきで、何かを言わなければという感じで、後ろを振り返りながら、下僕たちの間を突っ切ったが、何かを口にするのではなく、壁からその紙片を引き剥がし、もう一度、目を通すと、大きな声で、「ヴァルトマン！ わたしの馬に鞍を置け！ シュテルンバルト！ お前は、わたしと共に城の中へ！」と、言い、姿をくらました。恐ろしく危険な状態にあった彼を、突然に武装解除させるためには、このような最低限の言葉だけで十分であった。彼は、チューリングゲンの小作人の扮装に身をやつし、「ある非常に重要な用件で、ヴィッテンベルクまで行かねばならない。」と、シュテルンバルトに告げると、特に優秀な下僕たち数名に見守られながら、リュッツェンにいる残党の指揮はシュテルンバルトに託し、「その期間中なら、攻撃の恐れはないから、三日後にはまた帰ってくる。」と、約束して、ヴィッテンベルクへと出発した。

名前を偽り、ある宿屋に投宿し、そこで日没を迎えるとすぐ、マントに身を包み、トロンケンブルクで鹵獲した一組の拳銃を手し、ルターの部屋へと忍び込んでいた。書類や本に囲まれて、書見机のところに座ったルターは、見知らぬ、奇妙な風体の男が扉を開け、後手でカチャリと鍵をかけるのを目にし、「誰だ？ 何の用だ？」と、声をかけたが、恭しい感じで帽子を片手でもち上げた男が、これから自分がきっかけを作るかもしれないルターの驚きをビクビクと予感しながら、「馬商人のミヒャエル・コールハースでございます。」と、返事をするかどうかで、「退がれ！」と、大声を出して、呼び鈴のところへ急ぐため、書見机からサッと腰を上げながら、「お前の息はペストだ、お前の接近は破滅だ！」と、つけ加えた。それ以上はピクリとも動かず、拳銃を引っ張り出すと、コールハースは、「尊師、あなたがもしその呼び鈴を鳴らされるのなら、この拳銃の一発で、わたしはあなたの足元に死体となって転がります！ お座りになって、話に耳を貸して下さい。あなたが詩の中で描いた天使たちに囲まれていたとしても、わたしと一緒にいる時ほど安全ではありません。」と、言った。腰を下ろしながら、ルターが、「何の用だ？」と、聞いた。「わたしを不正な人間だとするあなたの意見に論駁を加えたいので

す！ 例の高札の中、あなたは、わたしの上役は、事件について全く関知していないと仰いました。ならば、わたしに自由通行権を与えて下さい。わたしがドレスデンへ出向き、わたしの問題について、上役に報告して参ります。」と、コールハースが応じた。一連の言葉に混乱しながら、同時に安堵もし、「救いようのない、度しがたいやつめ！」と、ルターが大きな声を出した。「身勝手に裁判審理を進め、地主貴族のフォン・トロンカを襲撃してもよいとする権利、もしその居城で彼を見い出せなければ、彼を匿った全都市を火と剣で悩ましてよいとする権利を、お前はどこで手に入れた？」「尊師よ、これから先は、どこからも！ ドレスデンから来たある報告が、ずっとわたしを惑わし、唆したのです！ わたしが人間の下劣さを使って進めたこの戦い、それは一種の犯罪でした。あなたが保証したように、上役がわたしを追放さえしていなければ！」と、コールハースが答えた。「追放ッ！」と、彼のことをマジマジと見ながら、ルターが叫んだ。「何という狂乱の思考がお前を捕らえている？ お前が住む国家という共同体から、誰がお前を追放する？ いみじくも、国家というものがある以上、どんな人間でも、そこから追放されるという事態が、一体、どうして起こりえる？」——「追放されています。」と、ギュッと拳を握りながら、コールハースが答えた。「わたしに言わせれば、法律の守護を禁じられた人間は、追放されているのです！ というのも、わたしの生業の平和な繁栄のためには、これらの守護が必要になりますから。ええ、そうです。ですから、雑多な家財道具と一緒に、わたしはこの一団の中に逃げ込み、わたしに守護を禁じた当の本人は、荒野の猛獣たちが闊歩する場にわたしを追いやり、あなたは否定するのでしょうか、自衛用の棍棒をわたしに手渡したのです。」——「誰が、法律による守護を禁じたのだと？」と、ルターが叫んだ。「わしは書かなかったか？ お前が出した嘆願書は、まだお前が宛てた先の〔ザクセン〕領邦君主の手には届いてすらいないと？ もし公僕たちがあの方の背後でそれを握り潰したり、あるいは、そうではなく、あの方の知らぬところで神聖な名前を嘲笑っているとしても、そういう従者を選んだ廉で、神以外の誰がその責任を問えるというのか？ 呪われた、途方もない人間であるお前に、彼を処罰する権利が与えられるというのか？」——「分かりました。」と、コールハースが答えた。「〔ザクセン〕領邦君主が追放していないと仰るなら、またもう一度、彼の守護する共同体の懐の中に入ります。もう一度、繰り返します。不逮捕特権つきでのドレスデン行きの護衛をお与え下さい。そうしてもらえれば、リュッツェンの城に集めている一団は解散させ、門前払いを受けた嘆願書については、〔ザクセン〕領邦の裁判所の場で、もう一度、申し述べることにします。」——ルターは、不機嫌そうな顔で、机の上にあった書状を別の書類の上に投げると、沈黙の中に沈んだ。この奇妙な男がこの領邦で取っている反抗的な態度が、不愉快でならなかったが、男がコールハーゼンブリュックから地主貴族に出したという訓令について考えながら、「で、お前はドレスデンの裁判所に対して何を望む？」と、聞いた。「地主貴族への法律に則った処罰、かつての状態への馬疋の回復、われわれに対してなされた暴力行為により、わたしやミュールベルクで亡くなった下僕のヘーゼが被った損害の賠償をです。」と、コールハースが答えた。——「損害の賠償！ 違法な自力復讐の穴埋めに、手形や保証金という形で、すでにユダヤ教徒やキリスト教徒から何千という金を巻き上げながら、それでもお前は、賠償についての照会が来たら、計算し、その価額を見積もるといふのか？」と、ルターが大声を出した。——「神よ、ご加護

を！」と、コールハースが答えた。「妻の埋葬費はもちろん、屋敷、農場、保有していた財産の返還すら、わたしは求めません！　ヘーゼの老いた母親が、治療代の計算書や、彼女の息子がトロンケンブルクで受けた損害に対する明細書は出しますし、売れずに終わった青毛たちの損害は、政府から専門家に見積もりを出してもらえればと思います。」――「狂おしい、人知を絶した、度しがたい男！」と、ルターは言う、男の方をジッと見た。「お前の剣が、復讐、それも考えつく限り、最も残忍な復讐を地主貴族に行なった後でもまだ、やつへの判決にお前を駆り立てるものは何だ（最終的にそうなったとしても、大した効果は期待できないだろうに）？」――頬から一筋の涙を流しながら、「尊師ッ！　今回のことでは、わたしは妻を亡くしました。わたしとしては、それが不義の争いによる死でなかったということ、世間に知らしめたいのです。この件については、わたしの意見を採り入れ、あちらの裁判所の判断を仰いでもらえませんか。色々議論の余地がある他の全ての点は、わたしがあなたの意見を採り入れます。」と、コールハースが答えた。――「よいか、世論が言うように、状況が全く違うというのなら、お前が言うことには理があるし、お前が独断で自力復讐の方に舵を切る前に、もしこの争いを〔ザクセン〕選帝候の決定に委ねていたとしても、お前の主張が一々受け入れられていたのは、疑いようがない。しかし、全体を考慮すると、かりに救世主のためにお前が地主貴族を無罪放免にし、あんなにも痩せ細り、憔悴し切った青毛を引っ張って、それに跨がり、その肥育のためにコールハーゼンブリュックの厩舎まで戻っていったとしても、そのことで、事がもっと上首尾に運ばないということがあったらどうか？」と、ルターが言った。――「運んだかもしれませんが。」と、窓辺に歩み寄りながら、コールハースが答えた。「運んだかもしれませんが、運ばなかったかもしれませんが！　尊師、あれを四本の足で立たせるのに、愛する妻の心臓の血がいるとさえ分かっていたら、あなたが言うようにさえやっていたら、一シャッフアーの燕麦を惜しいとさえ思わなかったら、運んでいたのかもしれませんが！　しかし、これまでのところは大きな代償を払ってきたので、やり方は変えずに行こうと思います。しかるべき形で判決が出たら、地主貴族にはあの青毛たちを肥育してもらいます。」――「様々な思いに耽り、再び自分の書状に手を伸ばしながら、「お前のために、わしは〔ザクセン〕選帝候と交渉してくるから、その間、お前はリュッツェンの城で静かにしている。もし自由通行権が認められたら、道端で公けに貼り出す形で、そのことは発表されるであろう。」と、ルターが言った。――「確かに、」と、コールハースがその手に接吻しようと身を屈める中、ルターが続けた。「〔ザクセン〕選帝候が、正義のために恩寵の判決を下すかどうかは、分からない。なぜなら、彼は、一軍団を招集し、今にもリュッツェン城でお前を拿捕するところだと、聞いているのだから。ただ、差し当たっては、すでに言った通り、わしはやれるだけのことをやってきた。」そうして、立ち上がると、彼を追い出す準備に取りかかった。「あなたの約束で、この点についてはすっかり安心しています。」と、コールハースが言うと、それを受け、ルターは手で別れの挨拶を送ったが、一方のコールハースは、突然、彼の前で深く跪き、「わたしの心には、もうひとつお願いがあります。」と、言った。「なぜなら、いつもは聖体を拝領するのが習いの聖霊降臨祭のこの日、わたしは自分の軍事作戦があり、教会には行きそびれていますが、わたしの懺悔を聞いてもらい、それへの返礼に、特別な準備はなく、聖なる秘跡の恩寵をわたしに授ける親切心がありませんか？」少し考えた

後、鋭い視線を彼に走らせながら、ルターが言った。「分かった、コールハース、わしがそれを授けよう！　だが、お前を祝福しようという聖体のもち主であるあの方は、もうお前の敵を許してしまっているのだ。――一体、お前には、」と、彼は続けたが、一方のコールハースは、困ったような顔で、彼を見た。「自分を侮辱した地主貴族を同じように許し、トロンケンブルクまで行って、青毛たちに跨り、肥育のためにコールハーゼンブリュックまで騎乗して帰ろうとは思わないのか？」――「尊師ッ、」と、彼の手を握り、顔を赤くしたコールハースが、言った。――「ふむ？」――「あの方も、自分の敵の全てを許したのではありません。〔ザクセン〕選帝侯、わたしの二人の上役である城守と執事、ヒンツとクンツの両氏、かつてこの件でわたしの名誉を傷つけたあらゆる人を許すというのは、わたしの方でやってみます。しかし、あの地主貴族には、できれば、青毛たちを再び肥え太らせよと、要求したいのです。」――これらの言葉を聞き、ルターは、不満そうな顔で背を向け、呼び鈴の紐を引いた。呼ばれた書生が、灯りを手に廊下に姿を現わしたので、コールハースは涙を拭いながら、驚いて床から立ったが、その書生が、鍵のかかった戸口で空しく奮闘していた一方で、再び、ルターは書類の前に着座したので、この書生には、コールハースが扉を開けることになった。ルターは、その招かれざる客を横目で見ながら、「玄関までご案内しろ！」と、書生に言ったが、これに対し、一目見た訪問者に少し驚いた書生は、壁から玄関の扉の鍵を取ってくると、馬商人が退出しようとするのを待ち、半開きの扉の向こうに消えていった。――動揺し、帽子を両手で掴んだコールハースは、「尊師、そうすると、お願いした和解という恩恵に、わたしは与れないのですか？」と、聞いたが、ルターは、「救世主については無理だが、領邦君主については、――わしが約束した試みがどうなるか次第だ！」と、そっけなく答えた。そして、言いつけた仕事に一刻も早く取りかかれと、目で書生に合図を送った。沈痛の表情を浮かべながら、胸に両手を当てたコールハースは、下方に延びる階段を照らす書生の後を追い、その場を後にした。

翌日、ルターは、ザクセン選帝侯に公的な書状を送ったが、その中で、彼は、選帝侯の取り巻きで、周知のように、例の嘆願書を秘匿していたヒンツとクンツの両氏（フォン・トロンカ献酌侍従および侍従長）にきつい苦言を呈した後、「このように腹立たしい状況下では、この件については、馬商人の提案を認め、訴訟の再開に向け、男に恩赦を与えるしか残った道はありません。」と、生来、身についた大胆さで、〔ザクセン〕選帝侯に進言していた。「世論は、極めて危険なレベルでこの男の側についているので、三度、男の手で灰塵に帰せられたあのヴィッテンベルクですら、男に肩入れする者がおり、さらにもしこの提案が却下されても、間違いなく、悪意に満ちたコメントと共に、男は自らの提案を民衆に知らせるでしょうから、もはや国家権力ではコントロール不能なレベルへと、簡単に民衆は扇動されるでしょう。」と、彼は書いていた。「こういう異常事態では、武器を手にした市民との交渉という懸念は考慮から外すべきで、実際、この男は、自らに対して行なわれた法的手続きにより、ある意味、国家という関係の埒外に置かれています。要するに、このいさかいから抜け出すには、この男を、王位に逆らった反逆児というより（実際、余所者なので、ある意味、そう見なしてもよい資格はあります）、むしろ、この〔ザクセン〕領邦に攻め入った他国の一勢力として取り扱う方がまだましなのです。」と、彼は結んでいた。――この書状を〔ザクセン〕選帝侯が受け取った時、その城には、

帝国の総司令官で、ミュールベルクで襲撃を受け、その怪我が元でまだ寝込んでいたフリードリヒ・フォン・マイセン王子の伯父のクリスティーン・フォン・マイセン王子、裁判所の大法官のヴレーデ伯爵、内閣官房の宰相のカルハイム伯爵、ヒンツとクンツの両フォン・トロンカ氏（前者が献酌侍従で、後者が侍従長）、選帝候の幼なじみと腹心の部下たちが顔を揃えていた。枢密顧問官の資格で、選帝候の名前や紋章を使用する権限を有し、選帝候の親書を取り扱っていた侍従長のクンツ氏が、この件についてまず口火を切り、「わたしが偽りの陳述に惑わされ、それを全く無根拠の、無益な仕事とさえ見なさなければ、裁判所で、馬商人が従兄弟の地主貴族に提起した嘆願書が、独断的な処置で却下されるということは、絶対になかったでしょう。」と、もう一度、詳細に述べた後、目下の情勢について話しを始めた。彼は、「この失策について、馬商人が自らに許した残酷な自己復讐をやってよいとする資格は、神と人の法のどちらを見ても出てきません。」と、述べると、「合法的な軍事力として、馬商人と折衝をすれば、神に呪われたあの頭に、後光が差すことになります。」と、語り、「そのため、選帝候という神聖な位格に跳ね返ってくる恥辱は、余りにも耐えがたいと感じられるので、むしろ、」と、火のような雄弁を揮い、「もっと極端なこと、つまり、ルター博士が行なった提案が容認されたと聞くくらいなら、狂った反逆者が書いた判決文が受け入れられ、青毛たちの肥育のため、従兄弟の地主貴族がコールハーゼンブリュックまで連行されるのを見る方がましとすら思えます。」と、語った。裁判所の大法官のヴレーデ伯爵は、クンツ氏に半身を向けると、「確かに、思わしくないこの事件の解決に当たり、あなたが示された選帝候の名声に対するこのように繊細な配慮が、この事件が始まった時に発揮されなかったのは、全く遺憾なことです。」と、語った。伯爵は、明らかに間違った対策の実行のため、軽々に国家権力を用いることへの疑念を〔ザクセン〕選帝候に表わすと、領邦内での馬商人に対する人々の継続的な殺到に意味ありげな視線を投げながら、「不法行為の糸は、この調子で無限に紡がれていきます。」と、説き、「この糸を引きちぎり、この卑劣な騒動から政府をうまく引き上げるには、犯した過失について、直接、無条件に弁済しながら、公正な態度を率直に保つしかありません。」と、語った。「君ならどう考える？」という〔ザクセン〕選帝候からの質問に、クリスティーン・フォン・マイセン王子は、選帝候への尊崇の気もちから、少し身体の向きを変えながら、「ヴレーデ伯爵にその心情を明らかにしてもらい、わたしの心は、確かに、極めて深い尊敬の念で満たされていますが、伯爵は、コールハースの権利の実現を助けるつもりではいても、ヴィッテンベルクや、ライプツィヒ、その他の、彼らに虐待の被害を受けた領邦からの損害賠償や、少なくとも、処罰を求める正当な要求を自らが妨げているという点を考慮に入れておられません。」と、答えた。「この男との関係においては、国家の秩序は余りにもひどく毀損されており、権利の学問〔法学〕から借用した原理では、ほとんどそれを修復できません。そういう次第で、わたしは侍従長の意見に従い、そのような場合に発動される手段を用いるという考えに賛同したいと思います。つまり、十分な規模の軍勢を掻き集め、それによって、リュッツェンに拠点を置く馬商人に脅しをかけるか、圧倒するかするのです。」侍従長は、王子と選帝候のために壁際から椅子をもってくと、恭しい態度でそれを部屋の真ん中に置きながら、「このように両義的な事件を仲裁する手段について、誠実さと分別をあわせもつ方と意見が共有できたのは、嬉しい限りです。」と、言った。王子は、その椅子には腰をかけ

ず、片手で椅子の背を握りながら、ジッと彼の方を見ると、「わたしが両手を挙げてそのことを喜ぶ理由には全くなりません。というのも、そこから帰結する対策は、逮捕命令をあらかじめあなたに下達して、領邦君主の名を悪用した件であなたを告訴するということに、必然的になってきますから。」と、断言した。「というのも、予測もつかない形で増殖し、裁判所の手すりの前に出廷するのにも場所が足りない一連の悪事については、正義の玉座の前で幕を降ろさざるをえないとしても、あなた方がきっかけを作った最初の悪事については話が別で、あなたを極刑に処すという告発を行なって初めて、馬商人の抹殺についての全権は国家の手に委ねられますが、その事件というのが、極めて筋が通っているというのでその名が轟き、彼自身、民衆から一本の剣を与えられ、それを身に帯びているくらいなのです。」これらの言葉に驚いた地主貴族のクンツが、ジッと目をやった先の〔ザクセン〕選帝侯は、顔を赤らめながら、身体の向きを変え、窓辺に歩み寄ってきた。あらゆる方向からの当惑に満ちた一休止の後、カルハイム伯爵は、「こんなやり方では、現在、陥っている魔圏からは抜けられません。」と、語った。「同じ道理で行けば、あなたの甥のフリードリヒ王子にも、訴訟は及ぶでしょう。なぜなら、あの方もまた、コールハースに対して行なった奇妙な偵察行動の際、色々な形で命令を踏み越えたので、現在、陥っている苦境の原因を作った大勢の人々の群れに尋問すれば、あの方も同じようにその頭数に入るのでしょうし、ミュールベルクで発生した一件についても、領邦君主から責任を問われるのでしょう。」献酌侍従のヒンツ・フォン・トロンカ氏は、机の脇のところまで〔ザクセン〕選帝侯が近づいていたが、ぼんやりした視線を漂わせると、そこまでの言葉を引き取り、「当然、採択されるべき国家の決定が、ここにお集まりのような分別をおもちの方々の手をどうしてすり抜けたのか、それはわたしには分かりません。」と、語った。「あの馬商人は、わたしの知る限り、ドレスデンへの完全な自由通行権と事件の再審理を引き換えに、彼と一緒にこの領邦に侵入した一団を解散すると約束しています。とはいえ、この邪悪な自己復讐に恩赦を下そうというのではありません。つまり、ルター博士も参事院も混同しているらしい二つの権利概念があるという訳です。いずれにせよ（と、一本の指を片方の小鼻の横に当てながら）、ドレスデンの裁判所で青毛たちに対する判決が出されるのなら、放火殺人と略奪を理由にコールハースを監獄に送るのを妨げるものは何もないので、つまり、これは、二人の政治家の見解のよい部分を結びつけた政治的手腕のある変更で、現世と後世の人々から称賛を受けるのは間違いがないのです。」と、彼は続けた。――この発言に対し、王子と大法官は、目だけで献酌侍従のヒンツ氏に答えを返したが、それゆえ、この討議はまとまったと感じられたので、〔ザクセン〕選帝侯は、「次の参事院の会議が開かれるまで、皆さんからもらった色々な意見については、自分でもよく考えてみます。」と、言った。――王子が案出した暫定的な対策は、友情に対して極めて感じやすい選帝侯の心から、すでにして全ての準備が整った暫定的なコールハースへの出兵の気力を奪ったようであった。少なくとも、最も的を射た意見を述べたと思われた大法官のヴレーデ伯爵の印象が彼の中にはあり、その伯爵が、何通かの書状を彼に手渡し、その中で、「実際、あの馬商人は、すでに四百人にまでその勢力を増やし、それどころか、侍従長の不始末が元で〔ザクセン〕領邦を覆うこの大いなる不満があるので、遠からず、今の二、三倍の勢力を当てにできるでしょう。」と、書いてあるのが分かったので、迷わず、〔ザクセン〕選帝侯は、ルター博

士が提案した助言を受け入れることを決めた。それに伴い、〔ザクセン〕選帝侯は、コールハースの事件の全指揮権をヴレーデ伯爵に託すと、その数日後には、早くも一本の高札が立ったが、大まかな内容に従い、われわれはそれを次のようにお伝えする。

「われわれ、某、某、そしてザクセンの選帝侯は、マルティン・ルター博士がわれわれに下した仲裁に対し、特別に寛大な配慮を払いながら、もっている武器を閲覧日より三日以内に手放すという条件つきで、ブランデンブルクの馬商人のミヒャエル・コールハースに対し、同人が事件を再審理するためのドレスデンへの自由通行権を与えるが、そういうことで、予測できない話ではないが、もしドレスデンの裁判所で青毛たちに関する嘆願書が取り下げられるようであれば、私的制裁を遂げるために独断的な企てを起こした廉で、同人には、あらゆる法的な強制力を用いた厳格な処分を下すが、そのような裁きが下りなければ、彼とその一団には、正義のかわりに慈悲を認め、ザクセンで行なわれた暴力沙汰に対し、完全なる恩赦を下す。」

〔ザクセン〕領邦の全ての広場に張り出されたこの高札の一枚をルター博士から受け取るや、コールハースは、そこに書かれていたのがはなはだ条件つきの話であったにも関わらず、饞別、謝辞、適切な警告を与え、すぐに一団の全員を解散させてしまった。金銭、武器、家財道具などの略取した全ての品々は、選帝侯の所有物としてリュッツェンの裁判所に預け入れ、コールハーゼンブリュックの地方官には、自農場の買い戻し（あくまで、可能であればであったが）のための何通かの書状をもたせたヴァルトマンを、シュヴェリーンには、再び手元に置こうと考えた子どもたちを請け出すためのシュテルンバルトを、それぞれ派遣した後、誰にも知られず、リュッツェン城を抜け出し、証書の形で保有していた少額の財産の残りだけをもって、ドレスデンに向けて出立した。

地方官の誠実さのおかげで、手元に残っていたピルナ郊外の小さな住居の扉を叩いた時、夜はちょうど明けたばかりで、まだ市全体は眠りの中にあっただが、驚き、狼狽しながら、扉を開けた、家政の切り盛りをする執事の老トーマスに向かい、「政府の要職にあるフォン・マイセン王子に、ここに馬商人のコールハースがいると、伝えてきてくれ。」と、コールハースは言った。このことを知ったフォン・マイセン王子は、この男と人民の関係についてはすぐに頭に入れる方がよいと考え、時を置かず、お供の騎士たちや荷役夫たちを連れて表に出たが、コールハースの住居に繋がる街道には、すでに数え切れない人々が群れ集っていた。「人民の抑圧者たちを火と剣で蹴散らす、死の天使が降臨している。」との知らせは、市の内外を問わず、ドレスデン全体を震撼させていた。人々は、好奇心に満ちた一団の殺到に備え、玄関の扉に門を降ろすことになった。若者たちは、朝食を食べる放火殺人犯を一目見ようと、屋敷の窓をよじ登っていた。王子は、場所を空けようとする番兵たちの力を借りながら、屋敷に押し入り、コールハースの部屋に足を踏み入れるや、服を脱ぎかけの状態でテーブルの脇に立つ男に向かい、「馬商人のコールハースとはお前か？」と、聞き、これに対し、コールハースが、自らの境遇について訴える何枚かの書類が入った紙入れをベルトから出し、それを厳かに王子に手渡ししながら、「そうです！」と、応じると、「自軍の解散後、わたしは、下達された選帝侯の自由令に従い、青毛たちに関するヴェンツェル・フォン・トロンカへの嘆願書を裁判所に提出するため、ドレスデンにやってきました。」と、言い添えた。頭のとっぺんから爪先までコールハースをジロジロと舐め回す、素早い一瞥の後、王子は、紙入れの中の書類

に目を通し、その中のリュッツェンの裁判所で出された証明書が、選帝候の財産のためになされた供託と、どういう関係にあるかを男に説明させながら、子ども、財産、この先、男が送ろうとしている暮らしにまつわる様々な種類の質問から、この男の生き様をさらに吟味し、あらゆる面で、この男には安心ができると値踏みした後、もう一度、書状を返ししながら、「お前の訴訟の進行を妨げるものは何もないので、訴訟を始めるなら、裁判所の大法官のヴレーデ伯爵まで、じかに問いあわせるがよい。」と、言った。それから、一呼吸を置いた後、窓辺に近づき、屋敷の前に集まっていた民衆に一瞥を投げながら、「最初のうちは、番兵を受け入れるんだぞ。在宅の時だけでなく、外出の時もお前を守ってくれるのだから！」と、男に伝えた。———驚き、ジッと俯きながら、コールハースは黙り込んだ。王子は、再び、窓辺から離れながら、「何にしても！」と、言った。「そこから生じる結果には、責任を取らねばならない。」そして、屋敷を離れようとする意図をもち、再び扉の方に向きを変えた。「慈悲深い方！ どうぞ御心のままに！ ただ、わたしがお願いした際は、すぐにまた番兵を外すという点は、お約束下さい。そうであれば、今回の措置に異議を唱えることはしません！」と、われに返ったコールハースが、言った。「それは当然だ。」と、王子は答えると、この目的で派遣された三人の徒歩傭兵たちに向かい、「お前たちが逗留するこの屋敷の主人であるこちらの方は、自由の身で、この方の外出時には、ただ護衛の目的でのみ、後ろに従うことが許される。」という指示を出した後、下向きの手動きで、馬商人に別れの挨拶をし、その場を後にした。

警察からの注意もあり、危害を加えることは一切なかった見渡す限りの群衆を引き連れ、三人の徒歩傭兵たちをお供にしたコールハースが、正午頃、裁判所の大法官のヴレーデ伯爵の屋敷にやってきた。前室で、穏やかに、親しげに彼を出迎えた大法官は、丸二時間、彼の相手をし、事件の始めから終わりまでの全容の話をさせた後、「嘆願書をじかに作成、提出したければ、市の有名な官選弁護士、某の許を訪ねなさい。」と、伝えてやった。コールハースは、それ以上は時間を無駄にせず、その弁護士の屋敷まで足を運んだが、却下された最初の嘆願書に完全に添う形で、法律に則った地主貴族の処罰、馬疋の原状回復、自分、および、ミュールベルクで死んだ下僕ヘーゼが被った（ただし、これについては、同人の老母に対する）損害の賠償を求める嘆願書を書き終えた後、今でもまだ見物しようとする群衆を引き連れながら、急用で呼ばれぬ限り、もうそこからは離れまいと心に決め、再び自分の屋敷に戻っていった。

一方の地主貴族は、ヴィッテンベルクでの拘禁を解かれると、両足が腫れ上がった恐ろしい丹毒から回復した後、馬商人のコールハースによる告訴を受けた、違法に略取され、潰された青毛たちの嘆願書への弁明のため、これでもう最後という条件で、ドレスデンまで出頭せよとの要請を〔ザクセン〕領邦裁判所から受けていた。地主貴族にとっては傍系に当たる、従兄弟のフォン・トロンカ侍従長とフォン・トロンカ献酌侍従の兄弟は（地主貴族は、彼らの屋敷に滞在していた）、最大限の憤怒と軽蔑を表わしながら、地主貴族を迎えると、「一族に恥辱と不名誉をもたらすろくでなし、卑劣漢め。」と、名指しすると、「将来に渡っても、この訴訟に勝てる見込みは全くない。」と、予告しながら、「世間から嘲笑されつつの肥育を運命づけられた青毛たちの調達に向けた準備を今すぐやれ。」と、要求していた。地主貴族は、弱々しく声を震わせながら、「わたしはこの世で一番哀れな男です。」と、言った。「自分を不幸のどん底に突き落とした呪わしい事件の全

容を、わたしはほんの少ししか知らないのです。何も知らず、そんな気もないわたしを余所に、あいつらは、馬たちを収穫に使い、途方もない、一部はあいつら自身の農場での酷使で潰してしまいました。悪いのは全部、あの城守と執事です。」と、彼は誓った。そうして、そう言いながら、腰を下ろすと、「侮辱や中傷で、たった今、やっと抜け出したばかりの災禍の中に、軽はずみに突き返さないで下さい。」と、頼み込んだのであった。翌日、灰塵に帰したトロンケンブルクの近隣に地所があったヒンツとクンツの両氏は、他にやることもなく、従兄弟の地主貴族からの要請に基づき、不幸なあの日にいなくなり、そこから完全に行方不明になった青毛たちの報告を集めるため、その地に住む執事や小作人に宛てて書状を認めていた。しかし、その地は完全に廃墟と化し、ほぼ全住民が惨殺されていたので、分かったことはといえば、放火殺人犯による刀の峯打ちに追われ、その中につがいの青毛がいた燃え盛る小屋から、ひとりの下僕が馬たちを救出したが、その後、「これをどこにやりますか、これで何をしますか？」という下僕からの問いには、恐ろしい痲痺もちの足蹴りしか、答えがなかったという話だけであった。マイセンまで逃げ伸び、書面による照会を受けた、地主貴族の屋敷の痛風病みの老執事夫人は、「その下僕なら、恐ろしい夜が明けたあの朝、馬たちの口を牽き、ブランデンブルクの国境に向けて歩いていました。」との証言を行なったが、同所でなされたあらゆる照会は空振りに終わり、この地主貴族の屋敷には、ブランデンブルクに住む下僕はおろか、そこに延びる街道沿いに住居をもつ下僕もひとりもなかったので、この報告は誤りと考えられるようになった。トロンケンブルクの大火から数日後、ドレスデンを離れ、ヴィルスドルフまで出ていた人々は、「問題の刻限、同地では、縄に繋いだ二頭の馬を連れただひとりの下僕が姿を現わしたんだが、その馬たちは極めて悲惨な状態にあり、それ以上、一步も先に進めず、再肥育を望んだある羊飼いの牛小屋に留置された。」という証言をしていた。様々な理由で、これが探している青毛らしいというのは、極めてありそうな話であったが、そこから来た人々の断言では、「そのヴィルスドルフの羊飼いは、すでに身元不明の人物にこの馬を再び売り払った。」とのことで、「馬たちはすでに神の許にみまかり、ヴィルスドルフの骨塚に埋められた。」という出所不明の第三の噂もあった。従兄弟の地主貴族が小屋を保有しておらず、容易に分かるように、自分たちの小屋で青毛たちを肥育する義務を免除されたヒンツとクンツの両氏にとって、これらの物事の変転は願ったり叶ったりであったが、彼らは、それでもさらに完璧な保証を求め、この状況の真偽を確実なものにしようと考えた。そんなことで、ヴェンツェル・フォン・トロнка氏は、世襲君主、封建君主、裁判権保有君主の資格を用い、ヴィルスドルフの裁判所に宛ててある書状を認めたが、その中で、彼は、自らが委託を受け、いわゆる不幸な偶然で行方不明にした青毛たちについてダラダラと書いた後、「あらゆる費用の十分な弁済と引き換えに、その馬たちの現在のありかを搜索し、その馬たちをドレスデンの侍従長クンツ氏の小屋まで移送するように、誰であれその所有者に、要求、強制してもらいたい。」と、心の底から懇願していた。そんなことで、それから幾日も経ず、あろうことか、ヴィルスドルフの羊飼いが馬たちを売った先の男というのが、本当に姿を現わし、痩せて、フラフラの青毛たちを荷車の柵柱に縛りつけ、当市の市場までやってきたのであるが、ヴェンツェル氏、それどころか、誠実なコールハースにとって不幸だったのは、それがドッベルンの皮剥ぎ人だったのである。

ヴェンツェル氏は、従兄弟の侍従長が居合わせた時、不確かな噂として、「トロンケンブルクでの火災を逃れた二頭の青毛を牽いた男が、当市まで来ている。」という話を聞くと、二人して、もしそれがコールハースの馬たちなら、対価を払ってでも引き取り、屋敷まで運び入れようと、屋敷から掻き集めた数人の下僕たちをお供に、男がいる城の前の広場まで足を運んだ。しかし、馬たちが繋がれた二輪の荷車を見るため、その見せ物に吸い寄せられ、すでにドンドンと数を増す人々の群れを見出した時のこの騎士たちの驚きたるや、いかばかりであったか。その人々は、いつまでも続く哄笑の中、「国家を揺るがしているあの馬たちがもう皮剥ぎのところまで来ている！」と、互いに大声で言いあっていた。荷車を一周し、今にも死にそうな哀れな馬たちを吟味した地主貴族は、途方に暮れながら、「自分がコールハースから取り上げた馬は、これじゃないかもしれない。」と、漏らしたが、侍従長のクンツ氏は、言葉にならない怒りに満ちた一瞥を投げながら（もしそれが鉄でできていたら、ヴェンツェル氏は粉々になっていたであろう）、勲章や鎖が見えるように、後手でマントをバツと払いながら、皮剥ぎのところまでやってくると、「ヴィルスドルーフの羊飼いが入手し、所有者である地主貴族のヴェンツェル・フォン・トロンカが当地の裁判所で徴発を求めているのは、この青毛たちか？」と、尋ねた。桶一杯の水を手で抱え、荷車を牽くデップリと太った駄馬に水をやっていた皮剥ぎ人は、「この青毛がですかい？」と、言った。――桶を置いた後、駄馬の口から馬銜を外しながら、男は、「柵柱に繋がれたこの青毛たちは、ハイニヒェンの豚飼いが売ってくれました。それがどこから来たのか、ヴィルスドルーフの羊飼いや豚飼いは、その豚飼いか知りませんでした。そういえば、」と、言った。それから、桶をまた取り上げると、轆と膝の間で挟みながら、「そういえば、ヴィルスドルーフの廷吏が、その豚飼いに、『ドレスデンのフォン・トロンカの屋敷までそれを運ぶように。』と、言ったんです。それで、そこで指定された地主貴族の名前というのが、クンツだったかな。」とも、語った。そう言いながら、駄馬が桶の中に飲み残した水の余りを手に、クルリと向きを変えると、彼は、街道の敷石の上にザバリとぶちまけた。嘲笑する人々の群れの視線に囲まれ、冷やかな熱心さで仕事に励んでいた男の視線を自分に向けられなかった侍従長は、「わたしが侍従長のクンツ・フォン・トロンカだが、お前が運べと言われた青毛たちは、従兄弟の地主貴族のもち馬であるのに相違なく、それはあの大火の際、トロンケンブルクから逃げた下僕を通じ、ヴィルスドルーフの羊飼いの手に渡ったが、元々、この二頭は、馬商人のコールハースのもち馬だったのだ！」と、言った。そして、そこで大股開きで突っ立ち、ズボンをたくし上げた男に向かい、「そんな話を聞いたことはないか？ 全てはこの状況にかかっているのだが、そのハイニヒェンの豚飼いは、ひょっとしてヴィルスドルーフの羊飼いや、あるいは、その羊飼いや豚飼いやからそれを買った別の第三者から、そいつを入手してはいなかったか？」と、聞いた。――荷車の方を向き、立ち小便をした皮剥ぎ人は、「わしは、フォン・トロンカの屋敷でその代金を受け取るため、この青毛たちを連れて、ドレスデンまで行けと言われたんです。今、お前が言ったことが、わしの頭にはさっぱり入ってこない。あと、ハイニヒェンの豚飼いやの前のこいつのもち主が、ペーターか、パウルか、ヴィルスドルーフの羊飼いやかというのは、盗品じゃないんだから、どっちでもいい。」と、言った。そして、言いながら、広い背中の上で鞭をたすきがけにし、腹が減ったので、朝飯でも食おうという心づもりで、広場にある食堂まで歩い

ていった。侍従長は、ハイニヒェンの豚飼いがドッベルンの皮剥ぎに売った馬が、もしあの悪魔がザクセン中を乗り回していた馬ではない場合、この馬たちをどう処分すべきか、全く分からなくなり、「あなたは何か言うことがないのですか。」と、地主貴族に話を振ったが、その彼は、真っ青な唇をブルブルと震わせながら、「コールハースのものであろうとなかろうと、この状況なら、その青毛たちは買いでしょう。」と、答えたので、侍従長は、マントをバツと翻すと、自らを生んだ両親を呪いながら、これから何をすべきか、やらせるべきかも分からず、これらの人々の群れからその身を引き離れた。彼は、街道を馬で走っていた旧知のフォン・ヴェンク男爵に、「こちらにおいで下さい。」と、声をかけると、ならず者たちが、嘲笑するようにこちらに目を向け、ハンカチを口に当てながら、ドツと吹き出そうと、こちらの出発だけを待つ様子だったので、頑なにその場は離れぬようにしながら、その男爵に、「どうか青毛たちの検分のため、大法官のヴレーデ伯爵の屋敷で下馬いただき、あの方の取りなしを受けながら、こちらへコールハースを寄越すように動いてもらえませんか。」と、懇願した。コールハースが、廷吏に呼び出され、皆が彼に要求していたリュッツェンでの供託についてのある種の説明のため、たまたま〔ヴレーデ〕大法官の居間まで来ていた時、この〔フォン・ヴェンク〕男爵が、前述の目論見で部屋の中に入ってきた。そして、不機嫌そうな顔をした大法官が、肘かけ椅子から立ち上がり、男爵には見知らぬ顔の馬商人を、書類をもたせたまま、脇に立たせていると、男爵が、その大法官に、フォン・トロンカー族が置かれている窮状の説明を始めた。あのドッベルンの皮剥ぎ人が、「ヴィルスドルーフの裁判所から出た欠陥だらけの援助要請に基づき、馬たちを連れて姿を現わしたのですが、その馬というのが余りにもひどい状態で、あの地主貴族のヴェンツェルすら、コールハースの馬と認めるのを躊躇したほどでしたが、それでもなお、騎士たちの厩舎での原状回復の試みのため、皮剥ぎ人からこの馬たちを買い入れると仰るなら、事前のコールハースの目視検査により、上述の状況を疑いのないものにすることが、どうしても必要になります。」彼は、次のように結論づけた。「そういうことで、番兵の手で、馬商人を屋敷の外まで連れ出し、馬たちのいる市場まで案内する親切心が、あなたにはおありですか？」大法官は、鼻から眼鏡を外しながら、「第一に、話に出てきた事情が、コールハースの目視検査によってしか究明できないとしている点、第二に、地主貴族が望む地点までコールハースを番兵に連行させる権限が法官にあると思込んでいる点で、あなたは二重の過ちを犯している。」と、言った。それから、背後に立つ馬商人を紹介し、自らは腰を下ろし、再び眼鏡をかけながら、「この件については、こちらの馬商人ご自身に相談してみたいはいかがですか。」と、促した。――コールハースは、表情ひとつ変えず、心の動きを悟られぬようにしながら、「その皮剥ぎ人が市にもち込んだ青毛たちの検分のため、市場まで足を運ぶ用意があります。」と、言った。驚いた男爵が、振り返って彼を見る間に、コールハースは、再び大法官の机のところまで近づき、紙入れから出した書類でリュッツェンでの供託に関する報告をさらに色々とした上、「これで失礼します。」と、言った。同じように、顔を真っ赤にししながら、窓辺に歩み寄った男爵もまた、「失礼します。」と、大法官に挨拶をした。それから二人は、フォン・マイセン王子がつけた三人の徒歩傭兵を連れ、人の群れを掻き分けながら、城の前の広場まで進んだ。その間に、侍従長のクンツ氏は、周辺に集まった友人たちの懇願にも関わらず、ドッベルンの皮剥ぎ人と対峙しながら、群衆の中

で立ち位置を確保していたが、馬商人を伴い、男爵が姿を現わすや、その馬商人に歩み寄り、傲然と剣を小脇に抱えながら、「荷車の向こうに立っている馬はお前のものか？」と、尋ねた。慎み深く後ろを振り向き、そう尋ねてくる知らぬ顔の紳士に軽く帽子を上げた後、馬商人は、その質問には答えず、騎士たち全員をゾロゾロと従えながら、皮剥ぎ用の荷車に近づき、皮剥ぎ人が与えた乾し草には口をつけず、地面の方に首を曲げ、覚束ない足取りでそこに立つ馬たちを、十二歩の距離から（それ以上は、近づかず）サッと見て、「慈悲深い旦那様！」と、言って、また侍従長の方を向くと、「その皮剥ぎ人の言葉に嘘はありません。荷車に繋がれているのはわたしの馬です！」と、言った。それから、紳士たちの輪の全体に目を走らせ、もう一度、帽子をずらして一礼すると、番兵に同伴されながら、再びその場を後にした。侍従長は、その言葉を聞くや、兜の羽飾りが揺れるほどの早足で皮剥ぎ人の側まで駆け寄り、金が入った財布を投げつけると、その皮剥ぎ人が財布を手に取り、額にかかる髪を鉛の櫛で後ろに撫でつけながら、金勘定をしている間に、「馬たちの手綱を外し、屋敷まで連れてこい！」と、下僕に命じた。その下僕は、主人の大声で、群衆の中に見出ししていた友人や親戚たちの輪から身を離すと、実際のところ、顔を少し赤くしながら、馬の足元にできた大きな糞尿の水溜まりを跨ぎ、馬たちの側までやってきたが、馬たちを自由にしようと、手綱を取るや、「その駄馬たちに触るんじゃない！」という言葉と共に、下僕の従兄弟ヒムボルト親方が、早くも彼の腕を掴み、荷車から突き飛ばしていた。危うい足取りで、糞尿の水溜まりを跨ぎながら、下僕がもう一度、侍従長のところまで戻る間に（このような状況になり、侍従長は、言葉を失ない、立ち尽くしていた）、ヒムボルト親方は、「そういう仕事をさせるのなら、皮剥ぎ下僕に指図すべきじゃないか！」と、言い足していた。怒りで口から泡を吹きながら、少しの間、親方をジッと観察していた侍従長は、パッと身を翻すと、周囲を囲んでいた騎士たちの頭越しに、番兵たちに向かい、「こっちへ来い。」と、呼びつけた。そして、フォン・ヴェンク男爵が指名したひとりの士官が、城から数人の近衛兵たちを伴ってやって来るや、この市の市民たちが手を染めた恥ずべき扇動についての短い説明の後、その士官に、「その首魁たるヒムボルト親方を逮捕して下さい。」と、要請したのであった。侍従長は、親方の胸倉を掴みながら、この士官に、「こちらの男が、わたしの命令で青毛たちの手綱を解こうとした下僕を荷車から突き飛ばすという、虐待を働いたのです。」と、訴えた。親方は、巧みに身体を捻り、侍従長を押しつけながら（そうやって、侍従長の手をすり抜けていった）、「慈悲深い旦那様！　二十歳の若造に何をすべきかを言うのと、扇動するのでは、大違いです！　しきたりや礼節に逆らってまで、荷車に繋がれた馬たちの世話を焼くつもりかと、こいつに聞いて下さい。そして、わたしがそう言った後でも、やるというならやったらいい！　例えば、今、肉を切るもよし、皮を剥ぐもよし！」と、言った。そこまで聞いた侍従長は、下僕の方を向き、「わたしの命令通り、コールハースのもち馬の手綱を解き、屋敷まで牽いていくのに、何かためらいでもあるのか？」と、聞いたが、その下僕は、市民たちの中に紛れ込みながら、「そういう無茶な要求は、まず馬たちを普通の状態に戻した後で、するべきでしょう。」と、ためらいがちに答えたので、侍従長は、逃げる下僕の背中に追い縋り、家紋で飾られた帽子を引たくると、それを両足で踏んだ後、刀を抜き、激しい平打ちで、すぐさま広場から追い払い、解任してしまった。ヒムボルト親方が叫んだ。「このとんでもない痲癩

もちを、すぐに地面に伸ばしてしまえ！」そして、この騒動に湧き返る市民たちがドヤドヤと集まり、番兵たちを押しやっていた間に、背後から侍従長を打ちのめし、マントやカラーや兜をもぎ取り、手からは刀を奪い取り、恐ろしい剣幕で、広場の向こうに放り投げてしまった。地主貴族のヴェンツェルは、その騒動から逃げ出し、従兄弟を助けようと、空しく大声で騎士たちを呼んでいたが、まだ一歩も踏み出さぬうち、騎士たちはすでに民衆の殺到により、蹴散らされ、先の転倒の際、頭に怪我を負っていた侍従長もまた、群衆の大いなる怒りにより、されるがままになっていた。結局、侍従長の救助は、たまたま広場にやってきた選帝侯の近衛兵に属する士官が加勢のために呼んだ、騎乗する徒歩傭兵たちの一団の出現を待つことになった。その士官は、群衆を蹴散らした後、この怒れる親方を捕縛した。そして、数人の騎兵たちの手で、親方が監獄に移送される中を、二人の友人（ヴェンツェルと士官）は、血まみれになった不幸な男を地面から抱き上げると、屋敷まで運んだ。馬商人に行なわれた不正を償わせるという善意から出たこの誠実な試みは、かくも惨めな結末を迎えた。仕事を終え、それ以上、そこにいる気もないドッベルンの皮剥ぎ人は、民衆が散会し出したので、街灯の柱に馬たちを繋いだが、その馬たちは、日がな一日、誰の世話も受けず、不良や浮浪者たちの嘲笑を浴び、そこに立っていた。結局、そんなことで、あらゆる飼料や人手の不足から、馬たちの面倒は警察が見ることとなり、次の命令が出るまでの市の郊外の皮剥き場での馬たちの世話のため、日暮れ近く、警察は、ドレスデンの皮剥ぎ人を手配した。

本来、馬商人を責めるべき点はほとんどなかったが、この事件は、より穏健で、善良な人々の間ですら、彼の訴訟事件の結末に対する極めて険悪な雰囲気、この〔ザクセン〕領邦の内部に引き起こした。国家への馬商人の関係は、決して看過できないと考えられるようになり、彼の恐ろしい強情を満たすだけのために、このように瑣末な事件で、暴力で奪われた公正を彼に認めるくらいなら、むしろ公然と不正をなし、改めて全事件を却下した方がましという意見が、私宅でも公けの場でも交わされるようになった。大法官自らも、その過剰な誠実や、そこから湧き上がるフォン・トロンカ家への憎悪から、哀れなコールハースの完全な破滅に向けたこの雰囲気の設定と拡散に一役買ってしまった。今や、ドレスデンの皮剥ぎ人が世話をする馬たちが、再びコールハーゼンブリュックの厩舎から出た当時の状態まで回復するというのは、極めてありそうにない話であったが、かりに施術や継続的な世話でそれが可能になるとしても、現存する状況の結果として、地主貴族の一族に降りかかっているこの恥辱には甚だしいものがあり、領邦内でも最も高貴な一門として彼らが占めてきた臣民としての格からすれば、金銭による馬たちの弁済より以上に、安上がりで、理にかなうものはないと思われた。それにも関わらず、実際のところは、大法官は、この出来事の数日後、宰相のカルハイム伯爵が、病気で寝ていた侍従長の代理として、自分に上述の提案をしてきた一通の書状に応える形で、「お前は、もしそういう提案があっても、決して拒絶してはならない。」と、戒める書状をコールハースには認めて、宰相その人には、短い、そっけない返書の中で、「頼むから、この事件を私的な提案で煩わすのはやめてくれ。」と、書き、侍従長には、「馬商人は極めて真っ当で謙虚な人間である。」とした上、「馬商人自身に相談するのがよかろう。」と、促したのであった。実際、市場で起きた事件により、自らの意思を挫かれた馬商人は、それでも大法官のこの忠告に従い、最大級の歓迎とあらゆる出来事の赦免で彼らを遇しよ

うと、地主貴族やその親族からの意思の表明をひたすらに待ったが、誇り高き騎士たちには、このような意思の表明すらひどく神経に障る話で、彼らは、大法官から出された返書にひどくイライラしながら、翌朝、怪我をした時と同じように病気で横たわっていた侍従長の部屋を訪れた〔ザクセン〕選帝候に、それを見せたのであった。発作によって弱々しく震える声で、侍従長は、「この事件の収束に命を賭けた後でもなお、あなたの希望に従い、自分の名誉を世間の非難に晒してまで、和解と譲歩を求め、わたしと一族にあらん限りの恥辱と醜聞をもたらしたあの男の前に、もう一度、姿を現わさねばならぬのでしょうか。」と、聞いた。〔ザクセン〕選帝候は、手紙に目を通した後、カルハイム伯爵に、困惑しながら、「コールハースとはもう協議をせず、あの馬疋たちは決して回復しないという状況に立脚し、あの判決に従い、あの馬たちは死んだとして、単純な金銭的な補償に向けた判決をすぐに起案する権限が、あの裁判所にはないのか？」と、尋ねた。伯爵は、「慈悲深き旦那様、あれらは死んでおります。無価値ですから、国法的な意味で死んでいます。皮剥ぎ場から騎士の厩舎に運ばれるまでには、肉体的にも死ぬでしょう。」と、答えた。それに対し、書状を仕舞い込みながら、〔ザクセン〕選帝候は、「このことについては、大法官自身と話してみる。」と、言う、なおも半身を起こし、ありがたそうに片手を握る侍従長には、ねぎらいの言葉をかけながら、「健康には気をつけるのだ。」と、再度、勧めた後、思いやり深い態度で肘かけ椅子から立ち上がり、その部屋を後にした。

ドレスデンで事態がそのように進んでいた時、哀れなコールハースの頭上には、リュッツェンの方面から、もうひとつ別の大きな雷雲が集まっていたが、その電光を不幸な男の脳天に食らわすなど、ずる賢い騎士たちには朝飯前であった。というのも、馬商人に招集されて、〔ザクセン〕選帝候からの恩赦の発布の後、再び退役させられていた下僕たちのひとり、ヨハン・ナーゲルシュミットは、それから数週間後、ボヘミアとの国境であらゆる悪事に手を染めていた、これらのならず者たちの一部を改めて呼び出すと、コールハースが手本を示した仕事を自らが継承するのを善行と見なしたのである。この卑劣漢は、ひとつには、自らを追う捕吏たちを震え上がらせるため、ひとつには、自らの悪事に加担するよう、慣れ親しんだやり方で地方民たちを誘うため、主人から学んだ狡猾さで、自らをコールハースの名代と称すると、「大人しく故郷に帰った多くの下僕たちには、この恩赦は適用されず、それどころか、あのコールハース自身すら、天空が鳴動するような違約により、ドレスデンに着くや、捕縛され、番兵たちに引き渡されている。」と、触れて回り、そういうことで、放火殺人犯からなる彼の一味は、コールハースの時と瓜二つの高札の中、〔ザクセン〕選帝候が誓約した恩赦の遵守の監視という使命を帯びた、神の栄誉のためだけに蜂起した軍団として、掲示されたのであるが、すでに述べた通り、全ては神の栄誉でも、コールハースへの心酔でもなく（コールハースの運命など、どうでもよかった）、むしろ、そういうまやかしに守られながら、それにより、さらに一層、赦免を受けた快適な形で、放火や略奪を繰り返すためだったのであった。これについての最初の報告がドレスデンに届くや、騒動全体を全く別の形に変えるこの事件に、騎士たちは喜びの色を隠せなかった。彼らは、賢くも、不満げな横目を使い、自分たちが何度も強い口調で諫めたのに、あたかもコールハースの道に従えという合図を全ての悪党に伝える意思があったように、コールハースへの恩赦の付与という形で皆が犯した失策

を思い出させると、ただ制圧された主人の無事や安全のために武器を取ったというナーゲルシュミットの口実を信じるだけではならず、「この男の出現自体が、自らの狂った妄執に従い、政府を恐怖のどん底まで突き落とし、一步一步、この判決事件を、前進、貫徹させようとする、コールハースによる扇動的な企みに他ならない。」とする、断固とした意見を述べた。さらに、献酌侍従のヒンツ氏に至っては、〔ザクセン〕選帝候の控えの間での宴席の後、自らの周囲に集まった数人の主猟官たちや廷臣たちに、「リュッツェンでのあの盗賊団の解散は忌々しい茶番である。」と、言い放つと、大法官による公正さへの偏愛を大いに笑い、多くの巧みに結びあわせた事情から、「この一団は、相変わらず、〔ザクセン〕選帝候領の森の中、火と剣をもって再び飛び出そうと、馬商人からの合図だけを待っている。」との証拠を並べた。クリスティーン・フォン・マイセン王子は、神経に障るやり方で主人の名声を貶めようと強いるこれらの事態の変化に大いに不満を覚えると、城内にいた〔ザクセン〕選帝候の許にすぐに参内し、新たな軽犯罪をネタに、隙あらば、コールハースを陥れんとする騎士たちの意図を十分に察しながら、選帝候に、「即刻、馬商人への尋問の許可をいただきたい。」と、頼み込んだ。捕吏の手で政府の建物まで連行された馬商人が、ハインリヒとレオポルトという二人の幼な子を腕に抱え、何となく怪訝そうな顔で、その場に姿を現わした。なぜなら、その前日、彼の五人の子どもを伴い、あの下僕のシュテルンバルトが、子どもの宿泊先のメクレンブルクからやってきていたが、馬商人は、ここで書くには余りにも冗長となる様々な思いから、その場を離れようとする自分に泣いて縋る子どもたちを引き連れ、尋問に同道させようという気になったのである。王子は、コールハースが自分の横に座らせた子どもたちにしげしげと目をやると、親しげな様子で年齢や名前を聞いた後、彼のかつての下僕ナーゲルシュミットが、エルツ山地の谷あいでのどういふ暴挙に出たのかを馬商人に明らかにし、ナーゲルシュミットによるいわゆる訓令を手渡ししながら、「何かこのようなことを正当化するものがあれば、どうか挙げて欲しい。」と、促したのであった。馬商人は、実際のところ、この恥ずべき、裏切りの文書にはひどく驚かされたが、それでも、王子のように誠実な人間に、満足が行く形で、自分に行なわれた告発が無根拠であると説明するのに、大した手間はかからなかった。彼の説明では、もし現状がそのままなら、最高の形で進んでいる訴訟の判決に関する第三者の手助けは、そもそも不要だけでなく、彼自身が携行し、王子に示した数通の書類からは、平地で犯された強姦、その他のペテンに関しては、リュッツェンでの一団の解散の直後、むしろ彼は、ナーゲルシュミットを絞首台に吊そうとしており、そこからも、ナーゲルシュミットの心が同種の援助を彼に与える方向に傾くはずはなく、ゆえに、〔ザクセン〕選帝候の恩赦の発表をもって初めて（なぜなら、それが全ての事態を帳消しにしたので）、ナーゲルシュミットは命を拾い、翌日、不倶戴天の敵として二人は別れたという、独特な種類の事情が浮かび上がっていた。王子の了承の後、コールハースは着席すると、ナーゲルシュミットに宛てて一通の公的な書状を認めたが、その中で、彼は、「わたしやわたしの一団に破棄を言い渡した恩赦の堅持のための蜂起というお前の出まかせは、恥ずべき、邪悪な捏造だ。」と、説き、「わたしは、ドレスデンに到着した際も、牢にも入れられず、番兵にも引き渡されず、この司法事件すら、完全に思い通りに進められている。」と、述べ、「恩赦の公表後、エルツ山地で犯された放火殺人の廉では、お前の周囲に集まったならず者たちへの戒めに、法律に基づくあ

らゆる復讐の手にお前を引き渡しておいた。」と、認めた。そこには、当時、すでに絞首台行きが決まり、上述の通り、選帝侯が公布した特赦だけで首が繋がっていたこの役立たずについての民衆への教訓のため、リュッツェン城で馬商人が行なわせた犯罪審理からの引用である、上述の恥ずべき行為に関する、二、三の断章も添えられていた。そんなことで、王子は、「このような止むをえぬ状況に押された形で、尋問の際、皆が口にせざるをえなかった疑惑については心配しなくてよい。」と、コールハースには伝え、「お前がドレスデンにいる限り、下された恩赦を覆すことは決してしないから。」と、確約すると、テーブル上の果物を与え、もう一度、子どもたちとの握手のために手を伸ばし、コールハースには会釈をした上、その場を退出させた。同様に、馬商人の身辺に漂う危険を察した大法官も、この新しい出来事により、この事件がもつれたり、絡まったりする前に、それ自体を終わりにしようと、あらゆることに着手していた。そして、そのことは、政治的な力量をもつ騎士たちがまさに望み、目指したことでもあり、彼らは、かつてのように沈黙による罪の告白を通じた裁判判決の軽減だけに自らの抵抗を限定せず、今や、さらに奸計に満ちた三百代言的な言い回しで、この罪自体の全否定をやり出した。彼らは、「コールハースの青毛たちは、地主貴族が全く、あるいは不完全にしか知らない、城守や執事によるただただ身勝手な法的手続きで、ずっとトロンケンブルクに留置されている。」という讒言をしたかと思うと、またある時は、「同地に着いた時にはもう、青毛たちは、危険な、激しい咳の病に罹っていた。」という証言をし、それゆえ、責任をもって青毛たちを探し出そうとする証人たちを引っ張り出すことまでしたが、広範な調査や考察の末、その論拠も覆されると、それどころか、もう十二年も前から、家畜の疫病のため、ブランデンブルクからザクセンへの馬足の移入を本当に禁じた、〔ザクセン〕選帝侯による一通の勅令をもち出し、コールハースの手で国境を越えて運ばれた馬たちを地主貴族が拘留できる権利だけでなく、それをすべき義務の、日の光よりも明らかな証拠だとしたのであった。――その間に、コールハースは、その際に与えた損害の少額の補償と引き換えに、実直なコールハーゼンブリュックの地方官からあの農場を再び買い戻していたが、この取引の裁判上の協定を結ぶためか、数日間、ドレスデンを離れ、自分の故郷に出張したいとの希望を申し立てていた。とはいえ、その決心には、秋蒔き種の耕作のため、実際、極めて切迫していたかもしれないこの前述の取引をというより、かくも奇妙で、切迫した状況下での自己の地位を吟味したいという意向が強く働いていたのは、疑いようがなかったが、おそらくそこには、また別の種類の事情も働いていた（それを言い当てるのは、彼の胸中をよく知る人間に委ねることにする）。そんなことで、彼は、自分に割り当てられた番兵はそこに残すと、大法官の屋敷まで足を運び、地方官の手紙を携えながら、「どうやらそのように見えますが、もし絶対に出廷しろというのでなければ、わたしはこの町を離れ、八日か十二日（その期間内に、また戻ってくることをお約束します）、ブランデンブルクに向かおうと思います。」と、打ち明けた。不満げで、心配そうな顔をした大法官は、床を見ながら、「この裁判では、反対勢力からの悪意や言い逃れに満ちた異論があるため、予測不能な千通りの事態に備えたあなたの証言や陳述が求められており、今や、出廷はかつてないほどの必要事だと、白状しなければなりません。」と、答えた。しかし、コールハースは、この司法事件をよく知る自分の弁護士を引きあいにしながら、控えめな押し強さで、「外出については八日まで短縮します。」と、

確約し、その要求を貰いたので、大法官は、ちょっとの間を置いた後、コールハースを退出させながら、「そういう理由でなら、クリスティーン・フォン・マイセン王子に、通行証の発行を願い出るのがよい。」と、言ったのであった。———大法官の表情を読むのに長けたコールハースは、さらに自らの決心を固めながら、その場に着席し、何の理由も言わず、政府の高官であるフォン・マイセン王子に宛てて、「コールハーゼンブリュックへの八日間の往復通行証を発行していただきたい。」との請願書を書き上げた。この書状に対し、コールハースは、城代のジークフリート・フォン・ヴェンク男爵の署名がある政府決議書を受け取ったが、そこには、「コールハーゼンブリュックへの通行証を求めのお前の申請は、〔ザクセン〕選帝候殿下の御前に置かれている。その最終的な認可に基づき、それが下達されればすぐ、通行証は届けられるであろう。」と、書いてあった。「一体、どういう経緯で、自分が申請したはずのクリスティーン・フォン・マイセン王子がでなく、ジークフリート・フォン・ヴェンク男爵が、この政府決議書に署名しているのか？」という弁護士への照会に対し、「三日前、王子はご自分の地所に帰任され、不在中の政務は、前述の同姓の紳士にとっては従兄弟に当たる、城代のジークフリート・フォン・ヴェンク男爵に一任された。」という返事を、コールハースは受け取っていた。——これら全ての状況を受け、心臓が不安げに動悸し始めたコールハースは、不可解な冗長さで〔ザクセン〕選帝侯に提出された申請に対する決定をさらに何日か待ってみたが、何の音沙汰もなく一週間が過ぎ、さらに数日を経ても、この決定は届かず、あれほどはっきりした予告があったのに、法廷での裁判判決も下りなかったので、十二日目、どんな結果であろうと、自分に対する政府の意向を聞こうと強く決意して、着座し、改めて、強い調子で、求める通行証を発行して欲しいと、政府に宛てて請求したのであった。しかし、待っていた返事はなく、同じように過ぎた翌日の晩、自分の状況、とりわけ、ルター博士の尽力により、成立した恩赦について考えながら、物思いに沈み、奥の部屋の窓辺に一歩を踏み出した時、驚いたことに、フォン・マイセン王子が彼の到着時につけていた番兵たちが、ルターが滞在用に割り当てていた中庭に立つ附属の小建築物の中にいないことに、彼は気がついた。彼に呼び出され、「一体、これはどういうことだ？」と、聞かれた老執事のトーマスは、ため息をつきながら、「旦那様！　いつもとは様子が違っております。今日は、通常より徒歩傭兵たちの数が多く、日暮れと共に、グルリと屋敷を取り巻き、街道に面した正門の前には、盾と槍をもった二人が立ち、裏庭にも二人がおり、さらに別に二人、廊下の藁束の上にも寝転んでいる者があり、ここで夜を明かすつもりだと話していました。」と、答えた。すっかり色を失なったコールハースは、クルリと後ろを振り向くと、「いるだけなら、別に構わぬではないか、お前は玄関まで出て、手元が照らせるように、やつらに灯りでも渡してやれ。」と、そう言った。壺の中身を空けるという口実の下、表に面した鎧戸を開けて、老人が明らかにした状況が真実であることをさらに確かめた後（というのも、まさにその時、音もなくもち場を離れながら、番兵たちが要員交代をしたのだが、いやしくもあの取り決めがある以上、そんな措置は、誰にも考えられないことであつたので）、少しも眠気を感じず、彼はベッドに横になったが、明日への決心はもうついていた。というのも、実際、政府は、彼に約束した恩赦を破棄してくれていたもので、その見え透いた正義以上に、自らに関わる政府を疎ましいと感じることはなかったし、もし自分が本当に俘虜であるとしても（そのことに、疑念の余地

はなかったが)、それでも本当にそうだという、決定的で、率直な説明を、やはり彼らの口から聞きたいと思ったのである。それゆえ、数日前、ドレスデンで古い知人として彼に話しかけ、「いつかお子さんと一緒にいらっしやい。」と、招待してくれていたロックヴィッツの執事の屋敷の訪問という口実を設けると、翌日の夜明け、彼は、下僕のシュテルンバルトに命じ、馬を馬車に繋ぎ、それを引き出させるようにした。それがきっかけで屋敷に生じた動きに、頭を突きあわせて注目していた徒歩傭兵たちは、ひそかに仲間のひとりをして市に送ったが、それから数分後、数人の捕吏を従えた政府の役人がひとりでそこに来て、何か用事があるという感じで、向かいの屋敷に入った。わが子に服を着せていたコールハースも、同様にこの動きに勘づき、その時、必要以上に長く屋敷の前に馬車を停めていたが、警察の用意が整ったと見るや、そのことには全く頓着せず、子どもたちを同伴の上、屋敷の外に出ると、門の下に立つ徒歩傭兵たちの一隊には、通りすがりざま、「俺にはついてくるな。」と、言い捨てながら、男の子たちは抱きあげ、馬車に乗せ、事前の打ちあわせで、老執事の娘に預けることにしていた泣きじゃくる小さな女の子たちにはキスをし、慰めの言葉をかけていた。彼自身が馬車に乗り込むや、向かいの屋敷から捕吏たちを従え、あの政府の役人がやってくると、「どこに行く?」と、聞いた。「数日前、二人の子どもを連れて田舎まで出てくるように招待された、地方官の友人がいるロックヴィッツまで参ります。」と、コールハースが答えると、「フォン・マイセン王子の命令で、そういう場合でも、数人の騎馬の徒歩傭兵たちの随行的のため、暫時、お前には待ってもらうことになる。」と、政府の役人が答えた。馬車の中から、コールハースが、笑いながら、「一日、食卓でわたしをもてなそうという友人の屋敷では、身の安全が保証されないとお考えですか?」と、聞いた。快活な、感じのいい調子で、「もちろん、大きな危険はないのだが。」と、役人は答えたが、「この下僕たちが、邪魔になるというのでもあるまい。」とも、つけ足した。「わたしがドレスデンに着いた時、フォン・マイセン王子は、番兵を使うかは、わたしに任せると仰いました。」と、真顔になったコールハースが言うと、一方の役人は、この状況に不審なところを感じながら、慎重な言い回しで、「滞在中の全期間に渡り、番兵は使ってもらいます。」と、告げたので、馬商人は、番兵を置く契機になった一件を、男に説明してやった。役人は、「今、わたしは、警察の高官をしている城代のフォン・ヴェンク男爵の命令で、常時、あなたの身边を警護するように命じられています。」と、断ずると、「随行に我慢できないなら、そこにある誤りを正すため、政府まで、ご自分で足を運んではいかがですか。」と、勧めてやった。物言いたげな視線を役人に投げ、この問題が曲がるか、壊れるかするのを覚悟しながら、「そうしてみますか。」と、コールハースは言うと、心臓を動悸させながら、執事に命じ、馬車から降り、子どもたちは、玄関先まで連れ出させ、下僕たちは、馬車と一緒に屋敷の前に残させ、その役人と番兵たちを伴い、政府の建物に入った。同行者たちと共に、馬商人が、広間にいた城代のヴェンク男爵のところまで近寄ってみると、ライプツィヒ近郊で捕まり、前日の夕方、移送されてきたナーゲルシュミットの下僕の一味の実況検分が始められ、臨席中の騎士たちにより、質問すべきと思われる多くのことが聴取されていた。騎士たちが、急に声を低くして、下僕たちへの尋問を中断する中、馬商人がいるのに気づいた男爵は、そちらの方に歩みを進めると、「何かご用ですか?」と、聞き、馬商人が、ロックヴィッツの執事の屋敷で昼餐を受けるという企図や、不要な徒歩傭兵た

ちをこちらへ残置するという希望を、恭しい態度で伝えたので、サッと顔色を変えた男爵は、何かそれ以上の言葉を飲み込むようであったが、「大人しく屋敷にいらっしやり、ロックヴィッツの地方官のご馳走はお預けにして下さい。」と、答えた。――そして、会話を打ち切り、役人の方を向きながら、「この者については、先程、出した命令で最後とする。なお、六人の騎乗する徒歩傭兵の同伴なく、この者が当市を離れることを禁ずる。」と、そう言った。――「わたしは俘虜ですか？ 全世界が見守る中、厳かに誓約されたあの恩赦は、破られたと思ってよいですか？」と、コールハースが聞くと、突然、顔を赤くした男爵が、彼の方を向き、すぐに顔の前まで来て、目の中を覗き込み、「そうだ！ そうだ！ そういうことだ！」と、答え――、クルリと背を向け、馬商人を立たせっ放しにしながら、再びナーゲルシュミットの下僕たちの方に帰っていった。事ここに至り、コールハースは、その広間を離れると、自分がこれまでに踏んだステップにより、すでに残された唯一の延命手段である逃亡は極めて困難になったと分かったが、今や彼の方でも、恩赦の条項に従う法的拘束からは解放されたと見なせたので、むしろ自らが取った法的な手続きについては称賛していた。彼は、屋敷に戻り、馬を軛から外すと、あの政府の役人を伴い、大きな悲しみに震えながら、強いショックを受け、自分の部屋に入った。この役人が、吐き気を催すような口調で、「全てはすぐに氷解する誤解が元になっているだけです。」と、言う間に、捕吏たちは、この役人の目配せにより、中庭に通ずる全ての出口を封鎖していたが、それにも関わらず、この役人は、「表に通じる出口は今まで通り好きに使ってよいのです。」と、断じるのであった。

一方、エルツ山地の森にいたナーゲルシュミットは、捕吏や徒歩傭兵による全方位からの余りにも強力な圧迫を受け、自らが引き受けた種類の役割の遂行のための援助物資にも完全に払底し、ついにはコールハースを本当に自分の側に引き込もうと考えるようになり、街道を行く旅人からドレスデンでのコールハースの訴訟の経緯についてかなり詳しく教えられ、二人の間の公然たる敵対関係はあっても、新たな同盟を結ぼうと馬商人を誘うことはできると、考えるようになった。それゆえ、ほとんど読み解けぬドイツ語で書いた文書をもたせ、使者としてひとりの下僕をコールハースに送ったが、その内容というのがこうであった。「もしアルテンベルク領までいらっしやり、解散した残党で招集した一団の指揮を再び同地で執る気がおありなら、ドレスデンでの拘束からの貴下の解放のため、馬足、手下、金品を供出する用意があります。その際、わたしは、将来に渡り、従順で、あらゆる点で、今まで以上に規律を守り、善良でいるのをお約束し、忠誠と信奉の証として、貴下の牢獄からの解放に向け、わたし自身、喜んでドレスデンの近郊までお迎えに上がります。」さて、この書状を託された男は、不運にもドレスデンを目前にしたある村で、若い頃からずっと苦しんできた醜い痙攣の発作に倒れた。その際、胸当てに忍ばせた書状が助けに駆けつけた人々により見い出され、この男自身、意識を取り戻すや、逮捕され、大勢の民衆をゾロゾロと従えながら、ひとりの番兵の手により、政府の建物まで連行された。城代のフォン・ヴェンクは、この書状を読むや、すぐに〔ザクセン〕選帝侯のいる城へ参上したが、彼は、再び傷から回復したクンツ氏、ヒンツ氏、内閣宰相のカルハイム伯爵がそこにいるのを見い出した。これらの紳士は、「このような書状が、馬商人の側からの前もっての文書や、新たな残虐行為の企図のための二者間のおよそ不埒で犯罪的な繋がりなしに書かれるのはおかしいという点を論破するこ

とで、すぐにコールハースを逮捕し、ナーゲルシュミットとの秘密の同意という理由で、起訴すればよい。」という意見であった。〔ザクセン〕選帝侯は、「二人に昔からの繋がりがあったという蓋然性は、ナーゲルシュミットの手紙からでは全く読み解けない。」との考えで、この書状だけを根拠に自らが与えたコールハースへの自由通行権を破棄することを断固として拒むと、長くためらった後であったが、宰相からの提案により、この点をはっきりさせるため、彼が決意したのは、ナーゲルシュミットが派遣した下僕を使い（その下僕は、以前と変わらず自由であるように見せかけながら）、馬商人にその書状を手渡し、彼がそれに返事を書くのかを見極めるとのこと、それだけであった。そんなことで、城代は、獄中にいた下僕が、翌朝、政府の建物まで引き出されると、この下僕に再びこの書状を返却しながら、「お前は自由の身で、科した刑罰は免除される。」との約束の下、「何事もなかったように、この書状を馬商人まで届けてこい。」と、命令した。しかし、この男、またしても、即刻、いかなる悪意に満ちた計略に自らを捧げたのか、いわくありげなやり方で、蟹の行商という口実を用い（その蟹は、市場であの政府の役人が調達した）、コールハースの部屋に一步を踏み入れた。子どもたちが蟹をいじっている間に、書状に目を通したコールハースは、実際、こんな状況でさえなければ、その詐欺師の襟首を掴み、戸口に立つ徒歩傭兵たちに引き渡したのであろうが、当時の人々の気分では、そういう出方にすら無関心な解釈がありえたとし、今、巻き込まれている騒動から自分を救えるものなど何もないと、心底、信じてもいたので、馴染みの男の顔を悲しげな目で見つめながら、「お前の住まいはどこだ？」と、聞き、「数時間後にまたこっちに來い。そうすれば、お前の主人に関するわたしの決心を伝えてやる。」と、そう言ったのであった。それから、たまたま戸口から入ってきたシュテルンバルトに、「蟹を何匹か、部屋にいる男から買ってやれ。」と、命じると、取引が終わり、二人がお互いの正体知らずに立ち去った後、着座し、次のような内容の書状を、ナーゲルシュミットに宛てて認めた。「まず、アルテンベルクの一団の指揮に関するお前の提案を、わたしは受け入れる。それゆえ、五人の子どもとわたしが置かれた暫定的な拘束からの脱出のため、ドレスデン近郊のノイシュタットまで、二頭立ての馬車を用立てて欲しい。急ぎの逃亡のため、ヴィッテンベルクに向かう街道上で、さらにもう一台の二頭立てが必要になる。ここで説明すると長くなる様々な理由から、この回り道でしか、わたしはお前のところに辿り着けない。わたしを監視する徒歩傭兵たちは、当然、賄賂で落ちると思うが、力が求められる場面に備え、何人かの、勇敢で、頭の切れる、武装した下僕たちが、ドレスデン近郊のノイシュタットで控えるようにして欲しい。この準備に関わる全費用を賄うため、二十クローネ金貨の一巻きを下僕に託すが、その用途は、事件の終結後、お前と確認することにする。ちなみに、脱出する際のドレスデンでのお前の立ち会いは不要だから、断わっておく。むしろ、この一味は、リーダーなしでは先に進まぬだろうから、暫定的な指揮のため、アルテンベルクでの残留という断固たる命令をお前には与えよう。」——夕方になり、下僕がやってくると、彼はこの書状を託し、さらに沢山の物品も与え、「特に、この書状には気をつけるのだぞ。」と、強く言ってやった。——彼の意図は、五人の子どもを連れ、ハンブルクまで出て、そこからレバントや東インドや、見知らぬ人々の上に空が青く広がる限りの遠くまで、船出するということにあった。なぜなら、ナーゲルシュミットとの共同事業への嫌悪は脇に置いて、苦悩で折れ曲がった魂は、あの

青毛たちの肥育をすっかり諦めていたのである。――下僕がこの回答を城代に届けるや、大法官は解任され、かわりに、宰相のカルハイム伯爵が裁判所の長官に任命され、〔ザクセン〕選帝侯の勅命により、コールハースは逮捕され、しっかりと鎖で縛られた上、市塔の中まで運ばれた。馬商人は、市の辻々に張られたこの書状を根拠に起訴されると、裁判所の柵の前で、「この筆跡を認めるか？」と、聞かれ、そのような問いを突きつける顧問官には、「認めるッ！」と、答えたが、「何か弁解は？」との問いには、ジッと床を見つめながら、「何もないッ！」と、答えたので、顧問官は、皮剥ぎの下僕の真っ赤な火挟みによる引っ張り、八つ裂き、車裂台と絞首台の間での遺骸の茶毘という判決を下した。

ドレスデンで、哀れなコールハースに対する事態がこのように進んでいた時、権力と専横の手から彼を救うため、あのブランデンブルク選帝侯が姿を現わし、当地の〔ザクセン〕選帝侯の内閣官房に宛てた覚書のひとつの中、「コールハースは、ブランデンブルクの臣民である。」との不満を明らかにした。というのも、あの実直な市長のハインリヒ・フォン・ゴイザウ氏が、ある日のシュプレー河岸での散策の折、この異様で、しかし、非難には値せぬ男の物語を選帝侯に語り聞かせ、その際、驚いた選帝侯からの質問責めにあった彼は、「大法官のジークフリート・フォン・カルハイム伯爵の不適切な措置により、罪は選帝侯ご自身にも及んでいます。」と、伝えざるをえず、大いに怒った選帝侯が、カルハイム伯爵に釈明を求め、同人とフォン・トロンカー族の血縁関係に全ての元凶があると悟るや、多くの不興のしるしを表わしつつ、すぐに伯爵を大法官から解任して、ハインリヒ・フォン・ゴイザウ氏を大法官に任命したのである。

まさにその頃、どういう理由かは分からないが、ポーランド王国はザクセン王家と係争状態にあり、「ザクセン王家への対抗のため、共通の利害で連携しましょう。」と、繰り返し、矢のような催促をブランデンブルク選帝侯になしていたが、そんなことで、この手のことを得意とする大法官のゴイザウ氏は、「どんな犠牲を払ってもコールハースに正義を与えるというわたしの主人の宿願は、個人への配慮により正当化されるよりひどい形では全体の平和を危険に晒さず、実現が可能。」と、考えるようになった。ゆえに、大法官は、「神や人の道にもとる全く専横的な法的手続き。」として、無条件、かつ即刻のコールハースの引渡しを求めたが、「もしコールハースに罪があるにせよ、ベルリンの弁護士を使えば、ドレスデン宮廷は同人を提訴できるという告訴条項に基づき、同人をブランデンブルクの法律で裁くべき。」としたばかりか、ザクセンの大地で略取された青毛たちや、その他の天空が鳴動するような暴力に関しては、〔ブランデンブルク〕選帝侯が、地主貴族のヴェンツェル・フォン・トロンカに対抗し、むしろ、コールハースの側に権利を与えようと、ドレスデンへの派遣を検討中の弁護士の旅券をすら、要求したのであった。ザクセン閣僚の人事異動の際、内閣官房の宰相に任命され、窮地の中、様々な理由からベルリン宮廷の機嫌を損ねたくなかった侍従長のクンツ氏は、出された覚書に大いに落胆する自らの主人の名前で、次のような返書を認めた。「〔ザクセン〕領内でコールハースが犯した犯罪を法律に照らして裁くというドレスデン宮廷がもつ権利を拒絶される不親切や不公正については、皆、訝しい思いで一杯です。なぜなら、同人は、首都〔ドレスデン〕にかなりの地所を有し、自らのザクセン市民としての性質を否定しないのは、知らぬ者のない話だからです。」しかし、ポーランド王国は、自らの要求を貫徹するため、すでに五千人の軍団をザクセン国境に集結させ、大法官のハインリヒ・フォ

ン・ゴイザウ氏は、「馬商人が自らの名前の由来とする土地、コールハーゼンブリュックは、ブランデンブルクの領内にあり、宣告された死刑の執行は、国際法の侵害と受け取られかねない。」と、表明していた。それゆえ、〔ザクセン〕選帝侯は、この取引から手を引くことを望む侍従長のクンツ氏自身の助言に基づき、荘園から、クリスティーン・フォン・マイセン王子を呼び寄せていたが、この聡明な人士が発した数語により、大法官〔ゴイザウ〕の要求に従った、コールハースのベルリン宮廷への引き渡しを決めた。最近の不当な措置にはほとんど満足しておらず、しかし、困惑した主人の希望には沿う形で、コールハース事件の処理を引き受けざるをえなかった〔クリスティーン・フォン・マイセン〕王子は、「今さら、どんな理由で馬商人をベルリンの大審院に告訴しますか？」と、〔ザクセン〕選帝侯に尋ねた。そして、皆は、それを曖昧で不明瞭な状況下で書いたという理由で、馬商人がナーゲルシュミットに宛てたあの腹立たしい書状からの引用はできず、罪を咎めずと書いたあの高札があるため、かつての略奪や放火についての言及もできず、それゆえ、〔ザクセン〕選帝侯は、ウィーンの皇帝陛下に宛てて、ザクセンへのコールハースの武装侵入の報告を行ない、陛下が制定した一般治安令の違反についての苦情を申し立て、もちろん、陛下はどんな恩赦にも縛られないので、帝国検察官の力を借り、弁明のため、コールハースをベルリンの高等法院まで連行してきて欲しいとお願いすることを決めた。それから八日後、ブランデンブルク選帝侯が六人の騎兵たちを同伴させ、ドレスデンまで派遣していた騎士のフリードリヒ・フォン・マルツァーンの手により、かつてのように鎖に繋がれた馬商人が、一台の馬車に乗せられ、彼の申し出により、養護院や孤児院から再び呼び集めた五人の子どもを伴い、ベルリンまで移送されてきた。たまたま、当時、ザクセン国境に相当の領地があった領邦代官のアロイジウス・フォン・カルハイム伯爵の招待で、侍従長のクンツ氏や、彼の妻で、〔カルハイム〕領邦代官の娘であり、宰相の妹でもあったヘロイーゼ夫人、その場に居合わせた主猟官や廷臣は及ばず、綺羅星のようなその他の紳士淑女たちの中に立ち交じり、あのザクセンの選帝侯が、自らを喜ばせるために催された大鹿狩りに興じようと、ダーメまで出てきていたが、ひょんなことで、丘の上を走る街道を横切るように作られた、細長いのぼりをたなびかせた天幕の屋根の下、一本の檜の木の前から聞こえる陽気な楽の音に包まれながら、狩りの埃をつけたままの一行の全員が、近習や小姓たちからの給仕を受け、食卓を囲んでいたちょうどその時のこと、騎兵たちに守られた馬商人が、ドレスデンから延びる街道をゆっくり歩いてくるということになった。というのも、幼なくかよわいコールハースの子どものひとりが病気になり、同道していたフォン・マルツァーン騎士が、やむなくヘルツブルクで三日間を過ごすことになり、そこから、どんな基準があったかは知らないが、自らが伺候する〔ブランデンブルク〕王だけには責任を感じ、ドレスデン政府には子細を伝える必要はないと見なしたのである。半分、胸をはだけさせ、羽根つき帽子を樅の木の小枝で狩人風に飾った〔ザクセン〕選帝侯は、少年時代の初恋の君であるヘロイーゼ夫人の隣りに座り、周囲をヒラヒラと舞う祝祭の優美さで、快活な気分をさせられながら、「それが誰であるにせよ、あちらへ行って、その不運な男にワインを一杯、届けてやりましょう！」と、そう言った。ヘロイーゼ夫人は、〔ザクセン〕選帝侯に温かな視線を送りながら、スッと立ち上がり、卓上のあらゆるものに手をつけ、ひとりの近習が差し出す銀器の上に、果物、ケーキ、パンを盛りつけていた。一行の全員が、

それぞれの清涼飲料水を手にガヤガヤと天幕を離れるや、そこに困った顔をした〔カルハイム〕領邦代官が飛び込んで、「この場を離れないで下さい。」と、皆に懇願した。「そんなに狼狽して、一体、どうしたんだ？」という〔ザクセン〕選帝侯からの当惑した問いに、領邦代官は、侍従長の方を向くと、「あの馬車の中にいるのが例のコールハースです。」と、どもりながら答えたが、コールハースはもう六日も前に出発しているはずで、侍従長のクンツ氏は、皆にとって不可解なこの報告を前に、ワインが入った杯を取り、天幕の方を振り返り見ながら、砂の中にザッと空けた。すっかり赤ら顔になった〔ザクセン〕選帝侯は、侍従長からのそうしろとの目配せで、ひとりの小姓が捧げもっていた盆の上に自らの杯を置いた。騎士のフリードリヒ・フォン・マルツァーンは、見知らぬ顔の一行からの畏敬の念に満ちた黙礼を受けながら、街道を横切っていた天幕を引っ張る綱と綱の間を抜け、ダーメの方にゆっくりと歩みを進め、他方、一行の面々は、もうそれ以上、そのことには注意を払わず、〔カルハイム〕領邦代官に招かれ、再び天幕の中に入っていった。〔ザクセン〕選帝侯が着座するや、領邦代官は、即刻、馬商人の移送を断行させようと、当地の市参事会をして、ひそかにダーメに人を送り出したが、すでにかなり昼を過ぎていたのを理由に、〔フォン・マルツァーン〕騎士が、「この地で一泊するつもりでいます。」と、言ったので、皆は、灌木の林の陰に隠れた、天幕の脇に立つ市参事会の所有物の屋敷の中に、彼らをひっそりと宿泊させることで満足した。そんなことで、一行が、ワインや豪華なデザートを楽しむでいい気分になり、起きたことをすっかり忘れていた夕方になると、目撃された鹿の群れを追い、再度、待ち伏せ場所に立つという考えを〔カルハイム〕領邦代官が披瀝するまでになり、一行の全員は、その提案に喜んで飛びつき、二人一組で銃を渡されると、堀や藪を越え、近くの森の中まで駆けていった。そんなことで、驚くべきことではあったが、〔ザクセン〕選帝侯と、見せ物を見物みましょうとその腕にぶら下がったヘロイーゼ夫人が、直接、当番の伝令に導かれながら、ブランデンブルクの騎兵たちを同伴するコールハースがいる屋敷の中庭を突っ切るということになったのであった。このことを知るや、〔ヘロイーゼ〕夫人は、「こちらへ、慈悲深い方、こちらへ！」と、言いながら、〔ザクセン〕選帝侯が首から下げていた鎖を、ふざけて彼の胸当ての中に押し込んだ。「皆さんがいらっしゃる前に、その屋敷に入り、そこに宿泊しているおかしな男を見てみましょう！」〔ザクセン〕選帝侯は、顔を真っ赤にしながら、夫人の手を握ると、「ヘロイーゼ！ 何てことを思いつくんだ？」と、言った。しかし、夫人は、困った顔で彼を見ながら、「狩りの衣装に身を包んでいながら、一体、誰があなたを見分けられます！」と、答えるや、グイグイと彼を引っ張った。と、まさしくその時、その屋敷から、すでに好奇心を満たした二人の主猟官が姿を現わし、「実際のところ、領邦代官が開いた催しのため、ダーメの近くにどんな人間が集まっているのかは、あの〔フォン・マルツァーン〕騎士も馬商人も、全く分かっていません。」と、断言した。それゆえ、〔ザクセン〕選帝侯は、微笑みながら、帽子を目深に被り、「愚かさよ、お前が世界を支配している。女の美しい舌こそが、お前の住処だ！」と、そう言った。――馬商人の訪問のため、二人が屋敷に足を踏み入れると、コールハースは、壁に背を向け、藁束の上に座り、ヘルツベルクで病をえた自分の子にパンと牛乳を与えていたが、話のきっかけを作ろうとした〔ヘロイーゼ〕夫人が、「あなたは誰？ この子はどこが悪いの？ あなたはどんな罪を犯したので、そんな護衛に守られて、どこ

へ連れていかれるの？」と、尋ねると、馬商人は、革の帽子を少し上げ、仕事の手は休めず、これらの全ての質問に対し、十分とはいえぬまでも、満足が行く返答をした。主猟官たちの背後に立ち、馬商人が首から下げていた絹の紐の先についた小さな鉛製のカプセルに気づいた〔ザクセン〕選帝侯は、他にまじな雑談のネタもなく、「これはどんなもので、中には何が入っている？」と、聞いた。コールハースが答えた。「はい、閣下、このカプセルはですね！」——そう言いながら、それを首から外すと、カプセルを開き、封蝋で封印された小さな紙片を取り出した。——「このカプセルには、不思議な経緯があるのです！　もう七ヶ月くらい前、妻の葬儀のちょうど翌日、おそらくあなた方もご存知でしょう、わたしは、数々の不正を行なったあの地主貴族のフォン・トロンカを捕縛するため、コールハーゼンブリュックを発ちましたが、その際、わたしにもよく分からないある話しあいで、ザクセンとブランデンブルクの選帝侯が、わたしの哨戒行動の経路上にあった、開市権をもつ市であるユーターボークで会談を行ない、夕方近く、お互いが望んだ合意に至り、たまたまその時、そこで賑やかに催されていた歳の市の見物のため、親しげに会話を交わしながら、市の街道を歩いてこられました。お二人は、そこで、自分を取り囲む民衆を相手に、スツールに座り、暦占いをしていたひとりのジブシー女をご覧になり、『俺たちに何か伝えることは？』と、冗談っぽくお尋ねになりました。その時、わたしは、ある宿屋に自分の軍団と投宿し、そんな出来事が生じているその場に居合わせたのですが、わたしが立っていた民衆の一番後ろにある教会の入り口からは、この不思議な女が何を言ったのかは、全く聞き取れませんでした。そんなことで、人々が、笑いながら、『この女は、皆に見立てを伝えてくれる訳じゃないんだ。』と、囁きあい、準備中の見せ物のため、まさにギョウギョウづめの状態でいましたので、わたしは、野次馬たちに場所を渡すというより、実際、それらのことに何の興味ももてず、背後の教会の入り口に彫り込まれた台のところに登っていました。この地点から、完全なる眺望の自由をえて、その二人と、彼らの目の前でスツールに腰をかけ、何やら書き殴る女に目をやると、突如、その女が、民衆の中、周囲を見回しながら、松葉杖に寄りかかり、スックと立ち、それまで、この女と話した訳でも、生まれてこの方、見立てを頼んだ訳でもないわたしに、キッと目を向け、轟めく大勢の人の群れを掻き分けながら、やってくる、こう言ったのです。『ここにいた！　あの方は、見立てを知りたいというなら、お前に聞いたらよかったんだ！』そうして、閣下、瘦せて骨張った両手で、この紙片を差し出したのです。それから、民衆の全員が振り返り、わたしを見守る中、驚いたわたしが、『母さん、一体、何をくれるんだ？』と、声をかけると、沢山の小声でのたわ言の後（その中では、恐ろしく意外なことに、わたしの名前が呟かれていました）、女は、『護符じゃ、馬商人のコールハース、大事に取っておけ。いつかそれがお前の命を救う！』と、答えるや、サッと姿を消しました。——さて！」と、柔和な調子で、コールハースが続けた。「本当のところ、ドレスデンでは、わたしには非常にづらい形で物事が進みました。命に別条はありませんが。ベルリンではどうなるか、それでも命脈を保てるのか、それはなってみないと分かりません。」——これらの言葉を聞き、〔ザクセン〕選帝侯は、長椅子にドカッと腰を下ろし、驚いた〔ヘロイーゼ〕夫人からの、「お加減でも悪いのですか？」との質問には、「何でもない、本当に何でもない！」と、答えたが、夫人が駆け寄り、腕で抱えようとする間もなく、もう失神し、地面に崩れ落ちていた。ちょ

うどその時、ある仕事で、この部屋に入ってきた騎士のフォン・マルツァーンが、「聖なる神！　この方はどこがお悪いのか？」と、言った。〔ヘロイーゼ〕夫人が、「ここに水を！」と、叫び声を上げた。主猟官たちは、〔ザクセン〕選帝侯を抱き上げ、隣室のベッドに横たえさせた。息を吹き返させようとのあらゆる無駄な努力の後、近習に呼ばれた侍従長が、「全ての兆候は、卒中の発作に襲われたことを示している！」と、断じるや、驚きは最高潮に達した。医者を呼ぶため、献酌侍従が、騎乗する使者をひとり、ルッカウへ走らせると、その一方、〔ザクセン〕選帝侯が目を覚ましたので、〔カルハイム〕領邦代官は、馬車の中に彼を横たえさせ、近隣の自分の狩猟用の館へ静かに移送してやった。しかし、同所への到着後、この移送はさらに二回の失神を引き起こし、そんなことで、〔ザクセン〕選帝侯は、翌朝遅く、ルッカウからの医者が到着した頃、迫りくる神経熱からの同様に危険な症状は残しながら、ようやくその小康を回復した。意識を取り戻すや、彼は、ベッドの上に半身を起こしたが、最初の質問は、即座の、「コールハースはどこに？」であった。その問いを誤解した侍従長は、〔ザクセン〕選帝侯の手を握りながら、「あの恐ろしい男のことなら、ご安心を。なぜなら、奇妙で不可解なあらゆる事件が起きた後も、あなたとの取り決め通りに、ブランデンブルクの護衛つきで、ダーメの屋敷に留置されているのですから。」と、答えた。心からの同情を明らかにしながら、侍従長は、「この男とあなたを引きあわせるという無茶な軽はずみをした妻には、きつく言っておきました。」と、断じると、「あの男との会話の中、一体、何がそれほど奇妙に激しくあなたの心を掴んだのです？」と、聞いた。「あの男が、鉛製のカプセルに入れて身につけていた下らない紙片を見い出したことが、わたしを襲った全ての不愉快事の原因ということだけは、白状せねばなりません。」と、選帝侯が答えた。彼は、この状況の説明となる、侍従長には理解不能なさらに多くのことをつけ足したが、侍従長の手を両手で強く握りながら、突然、「この紙片の所持が、わたしには極めて大事なことです。」と、断じると、「すぐに馬に跨り、ダーメまで飛び、値段は幾らでもいいので、あの男から紙片を買い取ってきてもらえませんか。」と、要求した。困惑を隠すように努めた侍従長は、「この紙片に多少でも価値があるなら、この状況をコールハースに悟られぬようにする以上に、大切なことはありません。なぜなら、何らかの不用意な発言でそのことが知られば、復讐心に憑かれたこの怒れる男からそれを買い戻すには、あなたが保有する全財産でも足りないということになりますから。」と、断言した。それから、「何か別のやり方を考案しなければ。どうやらこの悪党は、それ自体への執着はさほどなさそうですから、あなたが重きを置くその紙片の奪還は、ひょっとして、完全に無関係な第三者の計略によってということになるかもしれません。」と、選帝侯を安心させるため、侍従長がつけ加えた。汗を拭いながら、選帝侯は、「この目的のため、直接、ダーメまで人を送り、どんなやり方でもいいので、紙片が手に入るまでの間、暫定的に馬商人の再移送を止めさせることはできませんか？」と、聞いた。耳を疑った侍従長が、「残念ながら、高い蓋然性を示すあらゆる計算によれば、コールハースはすでにダーメを出、国境を越え、ブランデンブルクの大地に立っているはずで、やつがそこまで出ている時に、護送の妨害や、それどころか逆送致を企らむなら、それは極めて不愉快で、際限のない、そう、おそらく取り返しのつかない困難を生むでしょう。」と、答えた。選帝侯が、黙り込み、絶望の身振りでクッションに身を横たえたので、「一体、紙片には何と書いてあるの

です？　どのように奇妙で、不可解な種類の偶然から、その中身が自分に関わりがあると分かったのです？」と、侍従長が聞いた。しかし、〔ザクセン〕選帝侯は、この件に関する恭順が疑われる侍従長には、ぼんやりした視線を送るだけで、何も答えず、心臓を不安げに動悸させながら、身を固くし、そこへ横たわると、両手で、物思わしげに握ったハンカチの両端にジッと目をやった。それから、突然、「他に片づける用事ができた。」と、言い訳すると、若く、快活で、俊敏な男で、すでにしばしば秘密の用事を言いつけていた主猟官のフォーム・シュタインを部屋まで呼ぶようにと、侍従長に命じた。その主猟官に事のあらましを述べ、コールハースが所持する紙片の重要性を教えた後、「わたしの友情をずっと当てにできる権利を手に入れるつもりはあるか？　やつがベルリンに着く前にその紙片を取ってくる気はあるか？」と、聞き、実際、それは奇妙な関係であったが、どうにかそのことを頭に入れると、〔フォーム・シュタイン〕主猟官は、「全力でこの務めに当たります。」と、そう断言した。そんなことで、〔ザクセン〕選帝侯は、「お前はコールハースの後を追え。おそらくやつを金で釣るのは無理だから、巧みに采配した交渉の中、それに引き換えての生命や自由を提案してやり、そうだ、もしやつが強情を張るのなら、直接、しかし、注意はしながら、あいつを移送するブランデンブルクの騎兵たちからの脱走に向け、馬や人や金を使い、コールハースの手助けをせよ。」との指示を与えた。〔フォーム・シュタイン〕主猟官は、〔ザクセン〕選帝侯からの直筆の信任状を要求した後、数人の下僕を引き連れ、すぐに出発し、息も継がせず、馬に鞭を食らわしたので、幸いにも、ある国境の村で、騎士のフォン・マルツァーンと五人の子どもと共に、とある屋敷の玄関を出た先の屋根のないところで準備された昼餐を食べるコールハースに行き着いた。〔フォーム・シュタイン〕主猟官が、「わたしは、旅の途中、連行されているというその珍しい男を一目見たいと思う異国の人間です。」と、自らを紹介した先のフォン・マルツァーン騎士は、彼をコールハースに紹介しながら、すぐに慇懃な態度で食事の席に案内した。〔フォン・マルツァーン〕騎士は、出発の準備に余念がなく、騎兵たちも、屋敷の反対側の食卓で昼食を平らげていたので、自分は何者で、どんな特別な任務でやってきたのかを、馬商人に打ち明ける機会はすぐにやってきた。話題に上ったカプセルを一目見て、すぐにダーメの屋敷で失神していた男の地位や名前はすでに分かっており、この発見でやる気になっためくらめく戴冠式に向けては、この紙片の秘密の覗き見以外、何の必要もなかった馬商人は、様々な理由から、単なる好奇心ではその紙片を開けるまいと、心に誓っていた。およそ可能な限り、あらゆる犠牲を払う完全な用意はあったのに、ドレスデンで体験させられることになった、卑劣で、選帝侯らしからぬ取り扱いを思い起こしながら、「この紙片は手放しません。」と、馬商人は言った。「少なくとも自由と生命は与えると言っているのに、こんなに意固地に拒むのはなぜだ？」という〔フォーム・シュタイン〕主猟官の問いに、コールハースは答えた。「旦那様！　あなた方の領邦君主がやってきて、『王笏の助けを借りて率いている全軍団と共に、自分は滅亡するつもりでいる。』と、言ったとしても――滅亡ですよ、分かっただけですか？　もちろん、それはわたしの魂が目論む最大の望みですが、それでも、わたしは、あの方が生命より大事だとするこの紙片を渡すのを拒んだ上、こう言うでしょう。『あなたは断頭台までわたしを引きずり出せるでしょう。しかし、このわたしにも、あなたは傷つけられますし、そうするつもりでいます。』と！」　そうして、騎兵をひとり呼び、「深皿の上に

残った料理は好きなだけ取るがいい。」と、死にそうな顔で勧めたのであった。その村で過ごした残りの全期間中、馬商人が食事の席についた〔フォーム・シュタイン〕主猟官に再び身体を向けたのは、主猟官など眼中にないという風に別れの挨拶の目配せをし、馬車に乗り込むという段になって、ようやくであった。――この報告が届いた時、〔ザクセン〕選帝侯の容体は、峠とされた三日の間、同時に多方面からの攻撃を受けた生命を医者が真剣に危ぶむ段階の中を、さらに悪い方に遷移していた。とはいえ、苦しみ過ごした数週間の病臥の後、自らに備わった治癒力で健康を回復すると、そんなことで、少なくとも、枕と毛布を満載した一台の馬車に乗り、政務のため、再びドレスデンへ移送されるまでにはなった。当市に着くや、〔ザクセン〕選帝侯は、クリスティーネ・フォン・マイセン王子を呼びつけると、「破棄された皇帝平和令についての抗告をウィーンの皇帝陛下に対して行なうため、コールハース事件の弁護士としてウィーンに送ろうとしていた、法官アイベンマイヤー派遣の件はどうなった？」と、聞いた。王子が答えた。「そのアイベンマイヤーなら、あなたがダーメへの出発の際に残した命令に従い、地主貴族ヴェンツェル・フォン・トロнкаに対する青毛たちについての嘆願書を裁判所に提出するため、ブランデンブルク選帝侯が弁護士としてドレスデンに派遣していた法学者ツォイナーが到着するとすぐ、ウィーンに向かって出発しました。」〔ザクセン〕選帝侯は、顔を赤くして、仕事机の方に向かいながら、この性急さを訝しんでいた。なぜなら、事前に必要となる、コールハースへの恩赦の下地を作ってくれたルター博士との協議を行なうため、さらに詳細かつ具体的な命令が出るまで、最終的なアイベンマイヤーの出発は控えるようにという自らの意思を明らかにしていたのである。それゆえ、選帝侯は、不機嫌さを抑えた表情で、机の上に置いた数通の書状や書類をめくり、またそこに戻した。王子は、大きな目で選帝侯をジッと見たしばらくの後、こう答えた。「この件でご満足いただけないのなら、それは残念なことです。今、申し上げた日時での弁護士の派遣をわたしの義務とする参事院の命令書なら、お見せできます。」また、こうも続けた。「ルター博士との協議の件は、参事院では話題にも登りませんでした。以前なら、この聖職者がコールハースに行なった尽力のため、その意見は聞くべきという話にも、おそらく道理がありました。しかし、全世界が見る前でその恩赦が破られ、コールハースも逮捕され、判決と処刑のため、ブランデンブルクの裁判所へと引き渡された今となっては、もう何も道理はありません。」〔ザクセン〕選帝侯は、「実際のところ、アイベンマイヤーを出発させた過失は、さほどのものでもなかった。」と、言った。「しかし、次の命令が出るまでのしばらくの間、アイベンマイヤーは原告の資格でウィーンに登場させないというのがわたしの希望で、それゆえ、即刻、特便で、アイベンマイヤーに必要事項を伝えて欲しいのだ。」と、〔ザクセン〕選帝侯が、王子に依頼した。王子が答えた。「残念ながら、この命令は、一日遅かったです。というのも、今日、ちょうど届いた報告によれば、『すでにアイベンマイヤーは、弁護士の資格で姿を現わし、ウィーンの内閣官房まで出頭し、嘆願書を提出した。』と、あるのですから。」「一体、なぜこんな短い時間に、そんなことが可能なのです？」との驚いた〔ザクセン〕選帝侯からの問いには、「この男が出発してから、すでに三週間が経過しました。彼が受けた命令では、ウィーンに到着後、すぐのこの仕事の完遂が義務づけられていたのです。」と、王子が続けた。「遅延は、今回の場合、なおさら適切ではありません。なぜなら、ブランデンブルクの弁護士ツォイ

ナーは、地主貴族のヴェンツェル・フォン・トロнкаに極めて挑戦的な態度を取り、青毛たちの将来の原状回復のための皮剥ぎ人の手からの青毛たちの暫定的な接收をすでに裁判所に訴え出て、相手からのあらゆる抗議にも関わらず、それを続行しているのですから。」と、王子が言った。呼び鈴を引きながら、〔ザクセン〕選帝侯は、「別にどっちでもいい！ 大した話ではない！」と、言う、王子の方を向き、「それ以外、ドレスデンでは、何もなかったのか？ わたしの留守中には、何もなかったのか？」というどうでもよい質問の後、内的な状態を隠し切れず、手で挨拶をしながら、そこから王子を退出させてしまった。同日、〔ザクセン〕選帝侯は、再度、王子に、「この事件は政治的に重要なので、自分が采配を取るつもりである。」と、釈明をしながら、「コールハースについての全書類を提出せよ。」という要求を文書で行っていた。彼は、紙片の中身の秘密が入手できる唯一の人物の破滅という考えに堪えられず、それゆえ、皇帝に宛てて自筆の書状を認めると、その中で、「おそらくは近い将来、より明確な形で説明するつもりである、ある重要な理由」から、「もっと詳細な決定が下るまで、アイベンマイヤーがコールハースに提出した嘆願書は、しばらく保留されるべきである。」と、心からの強い調子で求めている。内閣官房が代筆した覚書の中で、〔神聖ローマ帝国〕皇帝は次のように回答をした。「突然、あなたの胸の中に生じたように見える変化が、わたしには極めて不可解に感じられます。ザクセンの側から出た報告書により、コールハース事件は、神聖ローマ帝国全体の問題になっています。ゆえに、神聖ローマ帝国の元首で、皇帝でもあるわたしは、この事件の原告として、ブランデンブルクの宮廷まで出頭すべき義務があると考えます。そういうことで、一般治安令の侵害の廉により、ベルリンのコールハースに釈明を求めるため、弁護士の資格で、すでに勅任陪席判事のフランツ・ミュラーが同地に出発しています。どういう形でも、あの抗告状は撤回されえず、事件は法律に則って進むはずです。」この書状は、〔ザクセン〕選帝侯を完全に打ちのめした。彼を悲しみの底に突き落とすように、しばらくの後、大審院での訴訟の開始を知らせる私的な書状がベルリンから届いたが、そこには、「手配した弁護士のあらゆる尽力にも関わらず、コールハースは、おそらく断頭台の上の露と消えるでしょう。」と、書き添えられていたので、この不幸な人士は、もう一度だけやろうと決意すると、ブランデンブルク選帝侯宛ての自筆の手紙の中、馬商人の命乞いをしたのであった。〔ザクセン〕選帝侯は、「皆がこの男に誓約した恩赦を鑑みれば、正当なやり方で男に死刑を執行するなど許されるはずがありません。」と、釈明しながら、「男には、一見、苛烈な法的手続きが進んでいると見えるかもしれませんが、男の死刑がわたしの狙いではありません。」と、断じると、「ベルリンが男に与えると偽った保護が、予期せぬ変化を遂げ、結果的に、男がザクセンに留まり、事件をザクセンの法律で裁いていたよりひどい不利益に終わるとしたら、どれだけ絶望的なことでしょうか。」と、書いていた。色々な意味で、この陳述には、曖昧で、はっきりしない点があると思ったブランデンブルク選帝侯は、これに対し、次のような返書を認めた。「皇帝陛下の弁護士が強調している点からすれば、あなたが表明した要望通り、法律の厳格な規定から逸脱するなど、とんでもない話です。」彼は、次のように説明した。「あなたが示した配慮は、実際、度を越しています。なぜなら、コールハースが恩赦によって免責された犯罪に対する抗告は、本当のところ、男に恩赦を与えたあなたではなく、恩赦には全く縛られない〔神聖ローマ〕帝国の元首の手で、ベルリンの大審院

までもち込まれているのですから。」そして、彼は、「それどころか、すでに前代未聞の厚かましきで、ブランデンブルク地方まで迫っている、進行中のナーゲルシュミットの暴力行為を目の前にすれば、ゾッとするような実例による見せしめは、どれほど必要とされていることでしょうか。」と、説き、「これら一切を考慮しないというなら、皇帝陛下ご自身に相談するのがよいでしょう。なぜなら、好意的な絶対命令がコールハースに下りにせよ、それはこちらの〔皇帝の〕側からの何らかの宣告に基づいてしかやってきましたから。」と、勧めた。これらの不運に終わった全ての試みに対する悲しみや怒りから、〔ザクセン〕選帝侯は、新たな病の床に倒れた。ある朝、侍従長がやってくると、コールハースの露命を繋ぐため、いや、少なくとも、同人がもつ紙片を奪い取る時間を稼ぐため、ウィーンとベルリンの宮廷に宛てて書いた書状を、〔ザクセン〕選帝侯に見せた。侍従長は、彼の前で跪き、身を投げ出しながら、「全ての聖なる、愛しきものに向け、その紙片には何と書いてあるのです？　お願いですから、仰って下さい。」と、言った。〔ザクセン〕選帝侯は、「部屋に鍵をかけて、ベッドに腰をかけさせてくれ。」と、言うと、彼の手を取り、ため息をつきながら、胸にそれを押し当てた後、次のように話し始めた。「聞いている話では、ユーターボークで開かれた会談の三日目、ブランデンブルク選帝侯とわたしが、さるジブシー女と会ったという話は、奥様から聞かれていますよね。生来、あの選帝侯は利発な方で、食事の席ですらその技量が話題に上ったこの奇妙な女の評判を、衆人環視の中、貶めてやろうとお考えになりました。そんなことで、あの方は、腕組みをしながら、女の机の前まで歩み寄ると、『お前が本当にローマの巫女だとしても、そうしてくれなければ、お前の言葉は信じないからな。』と、釈明をしながら、『今まさにやろうとしている占いについて、今日、当たっていると分かる証拠を出せ。』と、求められました。女は、頭のとっぺんから爪先まで、ザッとわれわれを眺め渡した後、こう言いました。『庭師の息子が公園で育てている角を生やした大鹿が、お前たちが今いる市場に、お前たちがまだ市場を去る前までにやってくるというのが、その証拠じゃ。』さて、分かってもらいたいのですが、ドレスデンの厨房用に飼われていたこの鹿は、公園の樫の木が影を差す、板塀を高く巡らせた囲いの中の、錠前と門の奥に閉じ込められており、公園全体や、特にそこに続く庭園は、他の小動物や小鳥たちをさらに囲い込むため、念入りに養生されていましたので、この奇妙な妄言に倣い、どうやってこの動物がわれわれの前に姿を現わすのか、それは全く想像できませんでした。それにも関わらず、その裏に計略があるのを疑った〔ブランデンブルク〕選帝侯は、わたしとの短い取り決めの後、ふざけて、そのうち女の口から出る全てを取り返しのつかない形で台なしにしようとの決意を固めつつ、居城に人を送り、『今すぐあの鹿を殺し、数日中に食卓まで上るよう準備をせよ。』と、命じられたのでした。それから、女の方を向き（ここまでのところは、女が見ている前で、声高に話をしていました）、こう言いました。『さあ、もういい！　お前は、わたしの未来の何を明らかにする？』選帝侯の手相を見ながら、女が言いました。『選帝侯よ、主よ、万歳！　あなたの治世は長く続きます。あなたを出した一門は長く続きます。子々孫々は大いに栄え、この世のあらゆる王侯貴族たちが、あなたの前にひれ伏します！』一瞬、考え深げに女を見た選帝侯は、わたしの方に一步を踏み出しながら、『占いを台なしにしようと、使者を送ったのが残念でならぬ。』と、小声で言いました。それから、多くの歓声と共に、彼が従えていた騎士たちの手から、女の膝

にジャラジャラと金の雨が降っていた時、自らも懐の中に手を入れた選帝侯は、金貨を一枚、それに加えながら、聞きました。『わたしへの挨拶と同じように、お前がこちらの方に送ろうとする挨拶も、銀色の響きを奏でるのか？』女は、脇に置いてあった箱を開け、お金をゆっくりと細かく金種別に分けて並べ、その箱にまた鍵をかけた後、眩しそうに太陽に片手を翳すと、それから、わたしの方にジッと目を向けました。そして、女がわたしの手相を見ている間に、そっくり同じ質問をわたしも繰り返し、『この女、耳障りのよいことは何も言えぬようです。』と、冗談ぽく〔ブランデンブルク〕選帝侯に言っていると、女は松葉杖を掴み、寄りかかりながら、ゆっくりとスツールから立ち、謎めいたやり方で両手を差し出ししながら、わたしにピッタリと身体を押しつけ、聞こえよがしに、こう耳許で囁きました。『その通りじゃ！』——『エエッ！』と、狼狽したわたしは言うど、大理石の目から放ったような、冷たい、うつろな視線で、背後のスツールに腰を下ろす女を前に、一步、後退りをしました。『わたしの一門に対し、その危機はどの方向からやってくる？』女は、木炭と紙を手に取り、足を組むと、『一筆、書きますか？』と、聞き、実際、戸惑ったわたしは、現状では他にやりようもなく、『ええ！ お願いします！』と、答えるや、『よし！ じゃあ、三つのことを書こう。つまり、お前の一門の最後の君主の名前と、国を失なう年号と、武力で国を奪い取る男の名前を。』と、女が言いました。女は、民衆の見る前で、これらのことをやり、スッと立ち、しなびた唇で濡らした封蝋で紙片を溶着すると、中指に嵌めていた鉛製の指輪印章を押し当てました。それから、容易に想像できるように、言葉では言い尽くせない好奇心に駆られたわたしが、その紙片に手を伸ばすやいなや、女は、『なりませぬ、殿下！』と、言い、後ろを振り向き、松葉杖の一本を高く掲げ、『お望みなら、あそこの、大勢の民衆がいるさらに奥の教会の入り口の台の上にいる、羽根つき帽子を被ったあの男から、紙片を受け取るがよい！』それらの言葉をうまく飲み込まず、驚きの余り、言葉もなく、わたしが立ち尽くしていると、そんなわたしを残して、女はその場を去っていきました。女は、背後の箱の蓋を閉め、それを背中に担ぎ、自分を取り囲む民衆の群れの中に姿を消したので、それからは何がどうなったのか、さっぱり分かりません。さて、ちょうどその時、実際、それは心からの慰めになったのですが、〔ブランデンブルク〕選帝侯が居城に送っていたあの騎士が姿を現わし、ニンマリと笑いながら、『鹿は殺されました。目の前を、二人の獵師の手で厨房まで引きずられていきました。』と、知らせてきました。〔ブランデンブルク〕選帝侯が、わたしをその場から引き離す心づもりで、楽しげにわたしと腕を組みながら、『さあ、行きますか！ ほら、あんな予言は、よくあるイカサマで、時間や金をかける価値もなかったでしょう！』と、言いました。ところが、まだそんな話をしていた時のこと、広場中に叫び声が響き渡り、厨房で、その鹿の首をよい獲物として口に啣え、城の中庭から駆けてきた肉屋の大きな犬に、全員の視線が集まり、下僕たちや下女たちが追うその犬が、われわれの三步前でポトリとその首を落としていったので、その驚きたるやどれほどであったでしょう。かくして、語られた全ては正しいという証拠とすべく、実際のところ、女の予言は成就し、鹿も、死にはしましたが、われわれのいた市場に姿を現わしました。冬の空の落雷すら、この光景ほど破滅的な衝撃はもたらしませんでした。かくして、その集まりから解放され、わたしがした最初の努力は、女が示した羽根つき帽子の男を、即刻、探すことでしたが、三日間、絶えず偵察に出した部

下たちの誰ひとり、その男についてのわずかな報告も上げてきませんでした。ところが、わが友クンツ、わたしは、数週間前、その男がダーメの農場にいるのをこの目で見たのです。」——そして、侍従長の手を放すと、汗を拭いながら、再びその身をベッドに横たえさせた。この事件についての〔ザクセン〕選帝侯の意見への反論、修正は無駄な努力と悟った侍従長は、「それでも、紙片を入手するための何らかの方策は講じた上、そこから男がどうなるかは、運命の手に委ねましょう。」と、勧めたが、〔ザクセン〕選帝侯は、「あの紙片なしで生きねばならない、紙片にまつわる占いが男と共に滅するのを座視せねばならぬという考えで、わたしは悲嘆と絶望に暮れていますが、そのための方策が全く見当たりません。」と、答えた。「そもそもジプシー女自身の搜索は試みましたか？」との友からの問いには、「わたしが偽りの口実で発した命令に従い、今日まで政府は、〔ザクセン〕選帝侯領のあらゆる場所で、空しく、この女を追っています。」と、答えたが、ここでの説明を拒んだある理由から、女の居場所がザクセン領内で突き止められるかについては、疑わしい気もちで見ていた。ところで、解任後すぐに亡くなった大法官カルハイム伯爵の遺産のうち、ノイマルクで自分の妻に転がり込んだ数々の相当な地所の件で、ベルリンに発とうとしていた侍従長は、そんなことで、実際、選帝侯のことが気がりになったので、短い熟考の後、「この事件の自由裁量をわたしにだけ任せませんか？」と、聞いた。心を込めて彼の手を胸に押し当てながら、選帝侯から、「わたしになったつもりで、どうか紙片を奪ってきて下さい！」と、答えがあったので、侍従長は、仕事を人に任せた上、出発を数日だけ早め、妻はその場に残して、数人の家来だけを従え、ベルリンに出立した。

前述のように、その間にベルリンに到着し、〔ブランデンブルク〕選帝侯の特別命令で、騎士牢に入り、そこで五人の子どもと共に、最大級にもてなされていたコールハースは、皇帝の弁護士がウィーンから姿を現わすや、皇帝による一般治安令に違反した廉で、大審院の柵の前での釈明を求められていた。早速、彼は、「ザクセンへの武力侵入やその際に犯された暴力行為については、リュッツェンで、ザクセン選帝侯との間で結ばれた和解に基づき、わたしは責任を免れている。」と、異論を唱えたが、「弁護士がこちらで抗告をされている〔神聖ローマ帝国〕皇帝陛下は、そういう配慮が一切おできにならない。」という話を、教えられることで、知った。彼は、この事件についての説明を受け、一方で、どのようにして、地主貴族ヴェンツェル・フォン・トロンカの事件における完全な補償が、ドレスデンの側から与えられるのかを聞くや、極めて速やかに状況を受け入れた。その後、たまたま侍従長が到着した日に判決が下り、刀剣による死が宣告された。判決は寛大であったが、ねじれた事件の状況があったので、それが執行されるとは誰も考えず、〔ブランデンブルク〕選帝侯がコールハースに抱いている好意もあり、全市民は、その絶対命令で、その判決は、必ずや、単なる、おそらくは、長く、厳しい懲役刑に変わると期待していた。それにも関わらず、主人から言われた任務の達成には全く時間がないと思った侍従長は、それゆえ、コールハースが獄舎の窓に寄りかかり、何気なく通行人に目をやっていたある日の朝、いつもの宮廷服に身を包んだ自らの姿を、しっかり、かつ、丁寧に、彼の目に焼きつける作業に着手した。そして、急な頭の動きで、馬商人が自分を意識していると思わせた時、とりわけ、彼がカプセルのある胸の方に思わず片手を伸ばすのを、大きな喜びと共に認めた時、侍従長は、この瞬間、コールハース

の胸に去来したものが、紙片奪取の試みにおけるさらなる一歩への十分な準備になると、考えたのであった。彼は、ベルリンの路上で、ルンペンと取引していた別のならず者たちの一団の中にあり、〔ザクセン〕選帝侯が書いた女と年齢や着衣がほぼ同じと思われる、松葉杖でそこら中を歩き回っているひとりの古物商の老婆を自分のところに招き寄せた。かりそめに姿を現わし、紙片を手渡しただけの女の特徴が、コールハースの心に深く刻まれることはないとの前提の下、女とは別の架空の女を登場させ、コールハースの面前で、できれば、まるでそのジプシー女のような芝居をさせようと、彼は決心していた。そんなことで、演技のため、彼は、ユーターボークで選帝侯と架空のジプシー女の間で起きた全てを、子細に女に教えたが、どこまでがコールハースに伝わっているのか知らなかったのも、特に紙片に書かれた不思議な三箇条については、忘れずに言い含めた。そして、ザクセン宮廷には極めて重要なその紙片の入手に向け、計略や暴力を使い、皆でやってきたある種の準備を受け、この女が、脈略のない、理解不能な形で、何を男に漏らすべきかを詳しく伝えた後、「不幸な結果に終わりがねない、ここ数日の保管先として、紙片は、あなたの手元ではもはや安全とはいえないというのを言い訳に、それをこちらへ渡せと、コールハースに言って欲しい。」と、頼んだのであった。相当な金額の報酬の約束を受け（女からの要求で、侍従長はその一部を前払いした）、古物商の女は、「仰られた仕事をお引き受けします。」と、すぐに返事をした。ミュールベルクで没した下僕ヘーゼの母親が、時折、政府の許可を受け、コールハースを訪ねてきており、古物商の女は、数ヶ月前からこの母親と懇意にしていたので、それゆえ、牢獄の管理人への多少の心づけで、時を置かず、馬商人の牢に入り込んだのであった。――しかし、この女が入るや、その指に嵌めた印章つきの指輪や首から下げた珊瑚の首飾りから、それがユーターボークであの紙片を手渡した、旧知のジプシーの老婆だということが、コールハースにはすぐに分かった。真実の側では、起きそうなことだけが起きるのではない。ここでわれわれがお伝えしたことは、本当に起きたのだが、それを疑う自由は、どうしてもそうした方のために残しておく。このように恐ろしい失策を犯した侍従長は、ベルリンの路上で拾った古物商の老婆を使い、ジプシー女の真似をしようとしながら、自らが真似ようとした、秘密に満ちた当のジプシー女を引き当てたのであった。少なくとも、松葉杖をついたその女は、その奇妙な風体に驚き、父親に縋る子どもたちの頬を撫でながら、「もう随分と前から、わしは、ザクセン領からブランデンブルク領に戻っていた。昨春、ユーターボークにいたというジプシー女に関する軽はずみで大胆な質問を、ベルリンの路上で侍従長から受けるとすぐ、その彼に追い縋り、名前を偽り、『あなたが片づけようとする仕事をお受けします。』と、提案してやったのさ。」と、語った。その女が、亡くなった妻リスベートと不思議なほど似ているのに気づいた馬商人は、「あなたは妻の祖母ですか？」と、聞きそうになった。なぜなら、顔立ち、骨張ってはいたが、まだ美しい指、とりわけ、話をする時の手の動きが、リスベートをまざまざと想起させたのである。特徴だった首の黒子も、首のところに認められた。胸の内でも奇妙な考えが渦巻く中、馬商人は、「椅子に座って下さい。」と、言い、「一体、侍従長の仕事のどういう件でお越しになったのです？」と、聞いた。コールハースの老犬が、女の膝をクンクンと嗅ぎ、撫でられ、女に尻尾を振る傍らで、女が答えた。「侍従長からわしへの依頼は、その紙片が、ザクセンの宮廷には重要な、どのような三つの問いに関する秘密に満ちた答えを含むの

かをお前に伝えること、紙片の入手のため、ベルリンまで来た使者に警告を与えること、お前の胸にぶら下がっている間は、紙片が心配じゃと言いつつをしながら、お前から紙片を奪い取ることの三つじゃった。しかし、わしがここに来た目的は、悪だくみや暴力行為で紙片を奪取するという脅しが、悪趣味で、中身のない幻影であり、拘禁されたブランデンブルク選帝侯の保護下にある以上、あいつを恐れる必要は全くなく、それどころか、紙片はお前の手元の方がわしの手元よりはるかに安全で、誰にせよ、どんな言い訳にしろ、紙片を渡してなくさぬよう用心をせよと、お前に伝えることであった。」――それにも関わらず、次のように女は結論づけた。「ユーターボークの歳の市でわしがお前に手渡した目的に沿う形である紙片を使い、国境で地主貴族のフォーム・シュタインが出した招集には耳を貸し、生命や自由と引き換えに、もう用がないあの紙片はザクセンの選帝侯に返すのが一番と、わしは思っている。」敵の踵で塵の中に踏みつけられていた時、その踵に致命傷を与える力をもらい、踊り上って喜んだコールハースは、「断じて渡しません、お母さん、断じて！」と、答えると、老婆の手をギュッと握り、「紙片には、恐ろしい問いに対するどのような答えが書いてあるのです？ 知りたいのはそれだけです。」と、言った。女は、足元にしゃがみ込んだ一番下の子を膝の上に抱き上げると、「断じて渡しません、ではなく、馬商人のコールハース、この愛らしい、小さな、金髪の少年のために、渡しませんであろう！」と、言った。そして、目を見開き、自分を見るその子には笑いかけ、頬ずりをし、キスをして、ポケットにあたりんごをカサカサの手で渡した。狼狽したコールハースが、「子どもたち自身も、大きくなれば、わたしの行ないを誉めてくれます。紙片をもち続ける以上によいことを、わたしは子や孫にしてやれませんか。」と、言った。加えて、「自分があんな経験をした後で、新たな欺瞞を前に、誰がわたしを守ってくれます？ 最近、リュッツェンで招集した軍団を〔ザクセン〕選帝侯に差し出したように、最終的には、無駄に紙片を手放すことになりませんか？」と、聞いた。「一度、約束を破った人間とは、」と、彼は言った。「わたしは決して取り引きをしません。ただ、あなたからの、決然とした、迷いのない要請がある時だけは、善良なお母さん、それにより、わたしが苦んできた全てのかわりに、本当に不思議な形で満足が生じてきた、あの紙片を手放します。」女は、子どもを床に立たせながら、「色々な観点で、お前には正しいところがあるから、思った通りにやったらいい！」と、言った。そして、再び松葉杖を手に取り、立ち去ろうとしかけた。コールハースが、あの不思議な紙片の中身の質問を繰り返し、女が、ぞんざいに、「単なる好奇心だろうが、もちろん、お前がそれを開けてもいいんだ。」と、答える一方、コールハースは、「あなたがここを去るまでに、まだ別の千の事柄についての説明を聞きたいのです。」と、女に頼み込んだ。「そもそもあなたは何者です？ あなたが身につけたその学問はどこで修めたのです？ それを宛てて書いたはずの〔ザクセン〕選帝侯に紙片を渡すのを拒み、あんな何千人もいる中から、よりによって、その学問に何の興味もないわたしに、なぜ不思議な紙片を手渡したのです？」――――さて、その瞬間、たまたま階段をこちらに上がってきた数人の警邏が立てた物音がし、そのため、この部屋で彼らに現場を押さえられてはという突然の不安に襲われた女は、こう答えた。「これにて、コールハース、これにて！ 次に会う時には、お前はこれら全てについての知識をえるであろう！」そして、ドアの方を向きながら、「さらばじゃ、コールハース、さらばじゃ！」と、叫び、順々に、幼い子

どもたちにキスをしながら、その場を後にした。

一方、不安な考えに苛まれたザクセン選帝侯は、当時、ザクセンで大いに尊敬を集めていた、名をオーデルホルムとオレアリウスという二人の占星術師を呼び、自分と子や孫の世代にとっては極めて重要な、秘密に満ちた紙片の中身に関する相談をもちかけた。二人は、ドレスデン城の塔の中で数日に渡り続いた深遠な探究の後、この予言が、次世紀のことを言っているのか、現在のことを言っているのか、ひょっとして、今なお一触即発の関係にあるポーランド王国のことを言っているのかについての合意にまで至らず、こういう学術的な論争でこの予言を吹き飛ばすどころか、不安、こう言うは何だが、この不幸な男の絶望は、ますます鋭利なものになり、最後には、魂が背えないくらい巨大なものになった。加えて、ちょうどその頃、侍従長は、自分を追い、ベルリンへ発とうとしていた妻に、次のように命じるということがあった「自分がある女（それ以来、二度とは姿を見せていない）と工作をし、失敗に終わったある試みの後、コールハースがもつあの紙片の奪還という希望の雲行きがどんなに怪しくなっているのかを、出発までに、選帝侯に伝えてきて欲しい。というのも、今や、コールハースに下された死罪は、面倒な書類審査の後、ブランデンブルク選帝侯による署名を受け、すでにその執行は、復活祭前の月曜日と決まったのだから。」そのことを知った〔ザクセン〕選帝侯の心は、苦悩と悔悟に引き裂かれ、すっかり敗残者のようで、自室に閉じこもり、二日の間は、生に倦み果て、全く食事も喉を通らず、三日目になり、突然、「狩猟でデッサウ選帝侯のところに出張する。」と、政府に簡単な届けをし、ドレスデンから行方をくらました。本当は彼がどこに行ったのか、デッサウに行ったのかは、決めないでおく。なぜなら、われわれが比較して報告を作った幾つかの年代記は、この部分で、奇妙な形で、お互いに矛盾を来たし、打ち消しあっているのであるから。ちなみに、この時、そのデッサウ選帝侯が、とても狩猟などやれる状態になく、叔父であるハインリヒ公爵がもつブラウンシュヴァイクの屋敷で病に伏していたということ、翌日の夕方、ヘロイーゼ夫人が、自分の従兄弟と偽ったフォン・ケーニヒシュタイン伯爵なる人物を伴い、夫である侍従長クンツ氏のベルリンの屋敷に到着したということの、二つは確かである。――その間に、コールハースには、選帝侯の命令により、死刑判決が読み上げられ、鎖は外され、彼がドレスデンで否認を受けた財産について書いた書類は、再び手元に戻ってきた。そして、裁判所から派遣された参事会員たちが、「お前が死んだ後の財産はどうするのか？」と、聞いてくるので、彼は、公証人の力を借りながら、子どもたちに有利となる遺言状を作成し、実直な友人、コールハーゼンブリュックの地方官を後見人としてつけてやった。そんなことで、彼の最後の数日間の安らぎと満足は、何にも比べようがなかった。なぜなら、その直後、選帝侯からの特別命令で、彼が入っていた牢獄の扉すら全開となり、そのうちの多くが市中に住んでいた友人たち全員に対する夜昼ない自由な牢への出入りが許され、そう、さらには、ルター博士の直筆による、疑いなく極めて注目すべき、しかし、今では失なわれた書状を携えた神学者ヤーコプ・フライジンクが、博士の使者として牢獄に姿を現わし、補佐役の二人のブランデンブルクの教区監督たちが見守る中、この聖職者から聖体拝領の恵みを受けるという満足をすら、彼はえたのである。そんなことで、今なお、彼の延命という鶴の一声への希望を捨てられずにいた市の全体が混乱の中にあった時、世界の中で自らの権利を認めさせるという余りにも性急な試みのため、彼が世間に

贖いをすべきとされた運命の日、復活祭前の月曜日がついにやってきた。ひとりの屈強な番兵を伴い、二人の子どもを片腕に抱え（というのも、裁判所の柵の前で、彼はこの特典をはっきりと願い出たので）、神学者ヤーコプ・フライジンクに導かれ、彼が牢獄の門から一步を踏み出すと、知った顔ばかりからなる悲しげな人々の群れが彼の手を握り、別れの挨拶をする中、おどおどした顔で、選帝侯の城の城代が姿を現わし、ある老婆から渡されたという一枚の紙切れを、彼の手の中に握らせた。ほとんど見覚えのないその男を不審げに見ながら、コールハースはその紙切れを開いた（封蝋に押された印章の形は、旧知のジブシー女をすぐに思い起こさせた）。そして、そこに次のような報告を読み取った時、彼を襲った驚きを、一体、誰に記せよう。「コールハース、ザクセン選帝侯は、ベルリンまで来て、もうすでに刑場の中にいます。もし気になるなら、青と白の羽根飾りがついた帽子でそれと分かります。あの方がここに来た意図は、言うまでもありません。あなたの埋葬後すぐ、カプセルを掘り起こし、その中の紙片を開封しようというのです。――あなたのエリーザベトより。」恐ろしい驚きに撃たれたコールハースは、城代の方を振り返ると、「この紙片を渡した不思議な女に見覚えはありませんか？」と、聞いた。しかし、「コールハース、あの女は、」――そして、この男が、話の途中で言葉を途切らせたために、この瞬間、再び始まった行列に巻き込まれた彼には、ブルブルと全身を震わせる男が何を言ったのか、理解するところには至らなかった。――刑場に着くや、ブランデンブルク選帝侯が（その中には、大法官のハインリヒ・フォン・ゴイザウ氏もいた）、数え切れない群衆に囲まれながら、お供たちと一緒に、その場で馬上の人になっているのが見えた。右手には、死刑判決の控えをもった帝国側の弁護士フランツ・ミュラーが、左手には、ドレスデン高等法院の判決文をもったドレスデン側の弁護士で法学者のアントン・ツォイナーが、民衆が作る半円状の輪の真ん中には、健康に光り輝き、ひづめで土を踏み鳴らす二頭の青毛たちを従えた、小包みをひとつ抱えた伝令が立っていた。というのも、大法官のハインリヒ氏が、主人の名の下、地主貴族のヴェンツェル・フォン・トロンカに対し、ドレスデンで係争中のままにしていた訴えを、一步一步、何の制約もなく前に進めておいたので、頭上で旗を振られることにより、馬たちはその名誉を回復し、飼われていた皮剥ぎ人の手からも取り上げられ、地主貴族の家来たちの手で肥育され、そのために特別に任命されたひとりの委員の立ち会いの下、ドレスデンの市場で弁護士に譲渡されていたのである。そんなことで、〔ブランデンブルク〕選帝侯は、番兵につき添われたコールハースが、丘の上の自分のところまで登ってきた時、こう言った。「さあ、コールハース、今日こそ、お前の権利が認められる日だ！ 見よ、馬たち、ネッカチーフ、ライヒスグルデン貨、下着、それだけではない、ミュールベルクで倒れた下僕ヘーゼの療養費に至るまで、トロンケンブルクで力づくで奪い取られたもの全て、領邦君主として、わたしに再調達の責任があるもの全てが、ここでお前に引き渡される。これで満足か？」――コールハースは、大法官の目配せにより、手交された判決文を、キラキラと光る大きな目でザッと一読し、片腕に抱いた二人の子を自分の脇に立たせた。そして、判決文の中に、地主貴族ヴェンツェルに対する二年の懲役を言い渡す条項があったので、様々な感情に完全に圧倒されながら、胸の前で十字を切り、遠くの方から〔ブランデンブルク〕選帝侯のところまでやってくると、その前にしゃがみ込んだ。それから、立ち上がり、選帝侯の膝の上に片手を置き、「この世で

の最大の宿願が成就しました。」と、大喜びで請けあい、馬たちのところまで駆け寄り、じっくりと吟味し、丸々とした首の辺りをポンポンと叩き、また大法官のところまで戻ると、「わたしはこれを二人の息子、ハインリヒとレオポルトに遺贈します！」と、明るい声で言った。大法官のハインリヒ・フォン・ゴイザウ氏は、馬上から優しく彼に顔を向けると、「お前の遺志は厳かに守られる。」と、選帝侯の名前で約束し、「小包みの中のそれ以外の品物も、随意で処分せよ。」と、彼に勧めた。そんなことで、コールハースは、広場でその姿を見かけたヘーゼの老母を群衆の中から呼び出すと、品物を渡しながらか、「さあ、母さん、これはあなたのものです！」と、言った。――コールハースへの損害の補償として、小包みのお金に添えてあった金子すら、女の老後の生活や娯楽のための贈り物として、加えられた。――― [ブランデンブルク] 選帝侯が大声を出した。「馬商人のコールハース、今度は、こういう形で弁償を受けたお前が、一般治安令を破った廉で、弁護士がこちらに臨席されている [神聖ローマ帝国] 皇帝陛下に、お前からの弁償をする準備に取りかかれ！」帽子を脱ぎ、地面に投げつけると、コールハースは、「準備ならできています！」と、言いながら、子どもたちを再び抱き上げ、胸に押し当てた後、コールハーゼンブリュックの地方官に引き渡したが、この男が静かに涙を流し、広場から子どもたちを退出させている間に、斬首台の方まで歩いていった。彼が、首に巻いた布の結び目を解き、胸当てを開いた時、民衆が作った輪の上にサッと目を走らせた彼は、青と白の羽根帽子を被ったよく知った男が、自分からほど近いところで、身体を半分隠している二人の騎士の間に佇んでいるのを見出した。コールハースは、自分を取り囲む番兵たちが怪しむような突然の足取りで、その男のすぐ前に歩み寄ると、首からカプセルを引きちぎり、そこから紙片を取り出し、封を破り、ザッと中身を一読すると、早くも甘い希望に顔を綻ばせつつあった青と白の羽根帽子を被ったその男に、キッと視線を送りながら、その紙片を口の中に投げ入れ、ゴクリと飲んでいた。この光景を見るや、青と白の羽根帽子を被ったその男は、痙攣し、バツタリとその場に倒れ込んだ。そして、驚いたお供たちが身を屈め、地面から男を助け起こすその間に、コールハースは断頭台の方に身体を向け、そこで死刑執行人の手斧の下、その首がゴロリと転がった。ここに、コールハースの物語は終わる。民衆全員の嘆願により、その亡骸は棺に横たえられ、郊外の教会墓地で丁重に弔おうと、荷役夫たちがそれを担ぎ上げる間に、[ブランデンブルク] 選帝侯は、故人の息子たちを呼び寄せると、「貴族学校で養育してやれ。」と、大法官に伝え、彼らを騎士に取り立てた。その後すぐ、ザクセン選帝侯は、身も心も破れ、ドレスデンへ戻ったが、そこでの後日譚は、歴史書をお読みいただきたい。そして、コールハース家について言えば、前世紀においてなお、陽気でかくしゃくとした数人の子孫がメクレンブルクで存命中であった。

ミヒャエル・コールハース クライスト

著 bambus

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
